

198号 今月の発信・あこら松山



素人の素人による素人のための

# 文章講座



いかに生きる ● 野澤光江

私のこだわり ● 奥川 睦

書くことの歓び ● 菊池佐紀

書くことは生きること ● 吉村典子

自分史の伴走者として ● 山本典子

# 目次

## い き い き 文 章 ゼ ミ ナ ル

巻頭言 自分の思いを文字にのせたい 奥川 睦 1

第一回 いかに生きる 野澤光江 3

メモも忘れて惹きこめました 檜垣幸子 14

別の自分を発見するきっかけに 渡部巻恵 16

第二回 私のこだわり 奥川 睦 17

学生時代に戻る楽しみ 黒木弘子 28

講師の人柄に打たれる 武智紀美子 29

第三回 書くことの歓び 菊池佐紀 30

自分に出会えうきつけに 藤川益美 51

第四回 書くことは生きること 吉村典子 53

新しい嶺へ第一歩を踏み出したい 赤松宣子 87

脳細胞の浄めの水 井谷五十鈴 89

第五回 自分史の伴走者として 山本典子 90

美しい人の美しい話に感動 森幸子 99

講座を終わって

文章教室で見つけたもの 三浦加奈代 100

その日の日記から 芥川光江 102

〔随想〕

今を生きるために 井谷五十鈴 105

老春に燃える 檜垣幸子 106

「仮面の家」を読んで 宮浦暢子 107

雨の午後 占部愛子 109

「書く」こと「生きる」こと 高井百合子 110

少なからず項垂れて 夏井紀明 112

私の「庭」に花が咲いた 吉沢菊枝 114

TOPICS 北京会議NGOフォーラムの登録受付ほか 118

めじやーなりすとのめ 個として生きる 深井美和 115

気になる英語 セクシユアル・オリエンテーション 120

あこらめいと 砂山恵子さん 122

〔連載〕ペルーの女は立ち上がった(Ⅳ) 124

第二章 資本主義経済の中で (Ⅰ) 124

C・アンドレアス 訳サンデイ サカモト 124

集会からフィリピン元従軍慰安婦を迎えてほか 深見史 136

活動から 織田が浜裁判 阿部悦子 140

〔連載〕看護婦 光と影(16) 川嶋哲子さん① 増田れい子 142

あこら読書室 娘の学校、奥川 睦 ほか 148

表紙 真田ふさえ

# 自分の思いを文字にのせたい

奥川 睦

こんなに素敵な輝いている人たちが松山にいた！ そんなうれしい喜びをもらえたのが、初回のバタバタの右往左往しながらの、正直な思いだった。

フェミニズム講座（「あこら」一八八号）を一応ひと区切りつけようという時期に、東山さんから「文章を書く難しさをどうにかしたい」との希望が出、「上手な文やうまい文は書けなくても、せめてもう少し自分の思いが文字に乗せられないか」との願いを込めた講座を開こうという話に発展、開講へ向け働き出すことになった。

場所・費用・講師の顔ぶれ、どれもなかなか決めがたく、迷うとキリがなかった。堂々めぐりに歯止めをかけるべく、問題点を洗い出してみようと準備会も三度もつた。悩みを捨ててしまえば、後は「なるようにしかならない」から「なるようになる」へ。へあこら」のポリシー、だめもと（だめでもともと）、良いかげん（いいかげんじゃなく）は、実行への大きな原動力となった。

どこかで思い捨てるしかないとわかつてはいても、これが意外にクセ者。今アメリカではやりだというI・S（Intersection Syndrome——映画「わかれ路」からとった「わかれ路族」）、決断の一步は、なかなか踏み出し難い。

「素人の素人による素人のための文章ゼミナール」と銘打つたことで、参加の勇気が湧いたという人や、「文章を書くことで自分育てを！」のキャッチ・フレーズが目にとまったという人も含め、多彩な顔ぶれの人の輪ができた。

事務局のバックアップで一冊にまとめ、ご報告がてらお目に触れる機会を与えられていただけでホツとしている。手づくりの講座の雰囲気的一端なりと感じていただけたら、幸せである。

# いきいきぶんしょう

## ゼミナール



書くことであなたを  
そだててみませんか

### 講師紹介

野澤光江

埼玉県春日部市国際友好交流協会理事

春日部市女性問題審議会委員

春日部市豊野塾（旧豊野大学校）塾長

奥川 睦

〈あこら松山〉呼びかけ人

英会話・女性学等講師

ケンタツキー名誉市民

菊池左紀

文芸同人誌「アミーゴ」主宰 愛媛文芸家協会会長

神戸女流文学賞・NHK四国脚本コンクール優秀賞他多数受賞

著書に小説集「薔薇の聲音」随筆集「花蔭」他

吉村典子

呉女子短期大学助教授

〈お産ネットワークえひめ〉へ女が老いを豊かにする会代表

処女作「お産と出会う」で毎日出版文化賞受賞

山本典子

人の森出版代表

「わたしの昭和」（九一年）出版

「戦争を伝える本」出版に向け奮闘中

# 第一回　いかに生きる

―生きたい思いの湧いてくる心の泉を―

野　澤　光　江

人数の多少を問わず、やる気のある方に、私の話が少しでもお役に立つのならと思い、ふるさとへ帰つて来ました。何を求めて文章講座に来られましたか。人それぞれに求めるものが違うので、話の焦点をどこにおくか難しいのですが。ご自分のニーズに合わせて、私の話や資料の中から一つでも何かをつかんでもらえたら嬉しいと思います。

## 一　生きている証に

子育てを終えた後、物足りない何かを求めて、地域の夜の公民館文章講座に参加したのは、私が四十歳になった頃でした。自由にそれができる環境ではなかったのですが、自分の中に湧いてくる「何かがちがう……」という思いを断ち切るきっかけ作りにと、無理をしての出席がありました。そこで詩人の門倉諷氏に出会ったのです。そのとき聞いた、秋田の子守奉公の話が大変印象的でした。



その昔、秋田の方では、身売りではないのですが、少女たちが幼くして口減らしのため、子守奉公に行かされたといいます。日常の苦しさで多忙の中で、彼女が見つけ出したもの、それは、夜、納戸のような寝室でひっそりと日記を書くことでした。そうすること自分を取り戻していたのです。日記といっても、天気とそこの日の気持ちを符号で表すだけの「生きている証に何かを記す」というに過ぎない、つたないものでありました。まさに書くことの原点であつたのです。

書けるとか、書けないとか言つて人の気持ちの中に、名文を書こうとか美しく人を感動させたいとかの邪念がよぎります。それが「表現したいものを本当に表現する」邪魔に、どれほどなっているか、ということに、その話を伺った時、改めて気づきました。人にはそれぞれ独自の思いや考えがあります。これだけは譲れない、これは我慢できない、というもの（モットーとかメッセージ）を素直に自己表現していけばいいのではないのでしょうか。つまり「人としてどういう生き方をしているか」ということが基本にあつて、それをタイミングを選びながら、言葉という媒体を借りて表現していけばいいと思うのです。

## 二 名文に親しむ

主語・述語の関係がどう、テクニクがどう、と言っているとキリがありませんし、一時間の中では、話の焦点もぼやけてしまいますので、今日は控えておきます。

書くことの原点である「自分が一番書きたいこと」を書き始め、しかもそれが行き詰まった場合には、名文（古典でも現代文でも）を繰り返し繰り返し読んでみるのがいいと思います。できるだけ多くの作品を読み、こういう言葉をこのように組み立てると、こういう感動が伝えられるのだなあ、ということを感じていくしかないと思うんですね。今日は、名文と言われる沢山の文章表現の中から、難しい言葉を使わなくても、すこくいい表現ができるという例をコピーしてききましたので読んでみてください。

とりあえず丸谷才一氏の「文章読本」の第二章「名文を読め」にとり上げられている中から、佐藤春夫の「良き友」と斎藤緑雨の「立ち小便」を用意してきました。

多くの作品を読み通すことはもちろん大切ですが、全文が大儀ならダイジェストに触れるだけでもいい、作品を読みたくなる契機になるかもしれないと思いましたので、例を引きました。人にはそれぞれ、その人に合った表現の仕方があるはずです。名文に接しながら、誰もが持っている「自分にできる表現の仕方」を上手に学び、自分に合う分野、これなら自分にもできそうだというものを掴んでいく学びのコツのようなものを耕していつて欲しいと思います。

では、名文とはどういうものなのでしょう。一、言葉使いの見事さ 二、正しい文章の呼吸を、知らず知らずのうちに伝えてくれるもの 三、作者の精神の充実、高揚が伝わってくるもの。その三条件だと思います。

そういう名文を音読してみると、それがよくわかるので、（今声を出して読むことがとてもグサイことのような扱いをうけていますが）その中から学び取ってください。音と響きを耳で感じ、自分の中で反すうしていけば、何処からその良さが来るのかわかってくると思います。

それが身につけば、書きたいと思う時、過去に出会った名文の中から会得したなにかが微妙に作用して、妙なる流れ（ことばのリズム）につながっていくのではないのでしょうか。美辞麗句を連ねる言葉遊びではなく、「これは何だろう」「どうなっているのだろう」等々、心の中から湧いてくる探究心、心の叫びのようなものがあつて、つまり、自分が一番伝えたいことがあつて、それに自分が学んで来た表現の方法を添わせていけばいいと思います。それをどう伝えるかというのが書くということの内容ですよ。内容が空っぽでは、いくら文章をいじくつても良いものは書けません。それはわかりきったことだと思っています。

### 三 はつきり伝え、誤解の余地がない

それに加えてもう一つ気をつけないといけないことは、はつきり伝えるということです。あまい表現は何も伝えません。「はつきり伝え誤解の余地のないこと」は、言うとも簡単なのですが、とても難しいことです。伝達ゲームなどやってみると、簡単な内容も意外に正確には伝わらず、とんでもない方向にいつてしまうことがよくわかります。人間の聴覚とか視覚は思ひのほかルーズなものだということを大前提として自覚することも大切だと思います。

### 四 言葉の選択が基本

適切な言葉を選ぶに当たり、心すべきことを谷崎潤一郎は「異を樹てようとするな」と書いて



ています。つまり異（普段使っていない言葉）をことさらにもつてきて樹てる（中心におく）ということは、当然難しいという印象と、借り物の印象と、消化不良の印象を、非常に強くしてしまいます。伝えたいことがボケてしまうのです。使い慣れて、使いこなせる、居心地の良い言葉をつないでいくということが、基本だと思えます。ただ誤解のないように申し添えますが、どこにでもある言葉、手垢のついた言葉とは根本的に区別しなければなりません。

## 五 何を書くか

何でも書きたいことを書けばいい。一億総作家という言う方があります。たしかに書きたいことを書くわけですが、その時に、自分の心の中の何が、このことを伝えたいという思いにさせるのか、なぜそれを書きたいと思うのか、中味の再検討が必要になります。それを確かめた上で筆を取れば焦点がボケるということはありません。「こう書きたいのに、書いたらちがったヨ」というのは、ひとひねりというか再構築が甘かったということにつながると思います。

これらを五本の柱として心にとどめておきましょう。

ここで佐藤春夫について触れてみたいと思います。彼は「都会の憂鬱」とか「田園の憂鬱」とかの作品があるので厭世作家と呼ばれ、彼の感性が誤解されている所が一部あるように思われるのですが、「交友録」の中から「好き友」を紹介してみます。

考へて見ると、私には少年時代の昔から友達といふべき者はなかつたやうな氣がします。

私が十二歳の時、私はちやうど、今日貴社から與へられたと全く同じ質問を、小學校の先生から與へられがありました。その時も私は今日と同じやうな不愉快を感じました。

その時先生の質問といふのは、生徒たちの學校外での生活を知るために各の生徒たちが持つてゐる友達を五六人數へ上げよ、といふのであつた。雨の日の體操の時間で、雨天體操場などのあるべき筈もない田舎の小學校では時をり、そんな機會にそんな事をする時間があつたのです。先生が紙をくばつてくると、生徒はそれへ返答するのです。人に見られないやうにと肘でしつかりと圍をして、それぞれに小さな頭と胸とを働かせながら書くのです。割合に自由な時間なので、いつもこんな時には、私は樂しかつたものです。一番好きな歴史上の人物は誰だとか、或は誰でも教壇へ出て面白い話をしてみよとか、つまり雨の體操時間といふのは遊びの時間だつた。それなのに、その日は何だか試験の日のやうに緊張した感じがあつた。私はといふと、試験ならば即座に答へてしまへるものを、この日のこの質問には本當に悩まされた。答へようにも私にはひとりも友達らしいものはなかつたからである。

しかし、ひとりも友達がなかつたと言つて、私は人に馬鹿にされて相手になつて貰へなかつたのではない。却つて私は人に畏れられてゐたのである。私は大人びた尊供で學科も不出來ではなかつたし、私の家は醫者だといふので田舎町の純朴な人たちは敬してゐてくれた。さういふわけで、小さな我々の仲間までが、私をへんに畏敬する風があつた。それに私は、いつもひとりで遊んでゐる無口な子供ではあつたし、誰も用事の時の外には、氣輕るに口を利いてもくれなかつたのである。それを、私はふだんは大して不幸にも思つ

たのではない。しかし、今日かうして、お前の友達是谁々だと問はれると、直ぐに答へ得る名のないのを淋しく思つたのです。その上、私は先生に向つてきつぱりと友達はひとりもないと書くことは出来なかつたのです。どうしてだか知りません。いろいろと考へた末で私は、教室に於ける自分の座席のぐるり四五人の子供の名を順々に書き並べたのです。何故かといふのに、その子供たちが、さういふ位置に置かれた自然の關係として、自然と最も多く私と口を利く機會が多かつたからでした。

その時間が過ぎてしまつて、自由な時間が來た時、子供たちは、今のさつきの先生の質問をさも重大な事件のやうに話し合つてゐた。彼等は皆、人々に、俺はお前のことを書いたといふやうなことを言ひ合つてゐた。しかし、私に向つてそんなことを言ひかけた者はひとりもなかつた。すると、いつものやうに黙つてゐる私のところへ來て、ひとりの子供が話しかけた――

「あんた。誰書いたんや？」

その子は快活な口調で言つた。それは教室で私のすぐうしろに居た子供であつた。きさくな性質で、氣むづかしげな私に對しても常から最も多く口を利いてゐた。彼に對して私は答へた――

「おれはあんたの名を書いたんぢや」

その答へとともに、彼ののはしやいでゐた顔は一刹那にがらりと變化した。しばらく無言だつた彼は、やつと私に言つた。――

「こらへとおくれよ。なう、わあきやあんたをわすれたあつた。わあきやあ、ぎやうさ

んつれがあるさか」

二十年を経た今日、彼のその言葉を、私はそつくりとその田舎訛りのままで思ひ出す。さうして私は彼のこの正直な一言に、今も無限の友情を見出すのです。ひよつとすると、これが私のうけた第一の友情ではないかとさへ思はれるくらゐです。

貴問に對して私は、假に三四の名を擧げることも出来るでせう。しかし、その人たちが數へ上げた名のなかには私が無かつた時に、彼等は私に對して、果して、

「<sup>や</sup>恕せ、友よ、予は君を失念しゐたり。予は多くの友を持つが故に」

と、さうはつきりと私に言つてくれるだらうか。どうも覺束ないやうな氣がするのです。

或る時、私は、或る雜誌社から「吾が交友録」といふ題で一文を求められた時、それに答へようと思つて以上のやうな文を書いた。しかし、あまりにひねくれた言ひ分だと人が思ひはしないかと思つて、書いたままでそれをまるめて、屑籠のなかへ入れてしまつた。

この短い文章の中に、雨天体操場の場面がほうふつと浮かんできます。そして友の一言の詠びに、万感を込めた佐藤春夫の心情が見事に表現されています。この感覺に似た体験を中学生の頃、国木田独歩の「牛肉と馬鈴薯」を読んだ時、感じました。理想（高価な食品）と現実（身近にあるありふれた食物）との見事な対比でした。独歩との最初の出会い、教科書にあつた「忘れえぬ人々」でした。それは遠目に見た托鉢僧の姿を、作者が強烈な印象として書いたものでした。それまで私は、「忘れえぬ」という言葉のイメージには、交友の期間とか密度が、

必須条件ではないか、という気が心のどこかでしていたのです。その時、私は思いました。人を感動させるのは、物の量とか期間の長さ、密度の濃さとは関係ないんだ。この文章のように、自分の感性と遠目の描写だけで、その情景が忘れられないということがあるんだ、と気づいたのです。人とかかわり、生きる上で大切な何か、それを香辛料とでも呼びましようか、その香辛料となるわずかの言葉で、感動させることができることを学んだのです。これらの中学時代に接した作品が私の文学への目覚めの契機となりました。

それ以来、他の多くの人の名文を読むことで、表現の仕方を自分の中に蓄積していきました。書く時に、その蓄積させた思いの中から、浮かび出てきたものと、今の自分の思いを対比させ、その違いを軌道修正しながら、手を加えていくことが、自分の文章となり、人に感動してもらえる何かにつながるのではないか、という気がしています。

また、ウィット、洒落の感覚も身につけていくと、さらに面白くなると思います。その例として斉藤緑雨の戯文である「立ち小便」を取り上げてみます。

○わが知れる人の巡查を拜命したるとき、厭なる大道に立ちて説諭といふことをするのなりと言續けしが、今日はこれより非番の歸り途、立小便する人あるを見て、わざと避けて近き拔裏に入りしに、折しも夏の眞晝なり、こゝには裸體の男、これはと元へ取つて返せば、彼處の小便尚歇まず。

○佛學者と漢學者と連立ちて途を行きけるが、やがて夕やけの空を指して、あれが暮靄といふのですなと佛學者のいへば、漢學者はしばしば耳傾けて、ボアイ、成程、佛蘭西で

は爾<sup>さ</sup>申<sup>まう</sup>しますか。両學者<sup>りやうがくしや</sup>竟<sup>つ</sup>に何事<sup>なにこと</sup>も曉<sup>さ</sup>らず。

〔おぼえ帳〕

これなどは、大道でいばつて説教するのがきらいな巡査の優しさをうまく表現していると思います。

文章を味わう時、自分の体験に引き寄せられると、理解が深められるので、体験の裾野を広くすることも大切です。読書は習慣です。それができている人は老年になつても、自分を深めることができます。自分が深められると、物事の多面性が理解できるようになり、多面性を理解できれば、聞き上手になり、書き上手にもなれるのです。

目標に達するためにはいろいろの方法があります。一つの山を登るにも、けもの道や小さな路もあれば、裏道や表参道もあります。どの道を行くかは、その人、その人の、生き方となります。日記を書くのはいい方法と言う人が多いのですが、毎日書かねば、との強迫観念にとらわれたり、本当に書きたいことを書いてないという弊害もあります。

だから普段、手近にメモ帳を置いて、ひらめきをメモしておく、次のとつかりに結びつきます。それを習慣化すると、文章を構築してゆきやすくなると思います。そうすることで、暮らしの中での新鮮さを感じ取り、自分の目線・足場が作れ、自分の言葉となつて、思いにかなつた文章へ近づいていけると思うのです。

だから他人に期待するのは今日からやめてください。誰かが新鮮さをもつて来てくれるなんてことはありません。石川淳の「出雲の指物師」は自然と人間が一体化した作品です。これなどは自然の中の感動を、自分の創作活動にどのように活かしていくかの過程がうまく描かれて

いるので参考にしてください。

自分の生活の中に、いつも疑問符を持つ生き方をしていると、借り物でない本当の自分らしさを表現しやすくなると思います。私はプロの主婦の感覚で生活し、基本的にはフリーの身でありたいと思っています。でも講演などで無理に肩書きを求められる時はマラソンのジョイナーさんにもあやかつて「生活エンジョイナー」と称しています。何事も楽しむことの本質から離れてはありえないと思うのです。苦しさ、悲しさ、人の痛み、それらも共に分かち合いながらエンジョイしています。そうすれば何が来てもそれほど怖くはないのです。怖がる人の中に、しくじること、恥をかくことを恐れる人がいます。一度徹底してしくじったり恥をかいてしまふと、隠さないといけないものがなくなります。自分をさらけ出せる勇氣を持つことは大切なことだと思います。

私は三年前の湾岸戦争の時、九十日かけて三十三か国を船で世界一周した経験があります。言葉は理解できなくても、相手の身になつて誠意をもつて接すれば、不思議にも相手は心を開いてくれるものです。物見高い視察の態度では誰も見向いてくれません。学者たちにそつぽを向いた現地人も、私たちには食事の仲間として接してくれました。

旅も、文章を書くことも、根は同じで、自分をさらけ出して積み上げていくしかないと思います。いろいろなことを体験し、行動し、書き進めていると、次の疑問が生まれるはずで、その積み重ねは人間を大きくします。今、書けなくても後日のステップとなると思いますので頑張ってみてください。

(まとめ 三浦 加奈代)

## メモも忘れて惹きこまれました

檜垣 幸子

相変わらずドジな私は、〈あこら〉可能性教室の会場の喫茶店に一時間も開講時間を間違えて着いてしまった。

この〈あこら〉可能性教室とは、「書くことであなたを育ててみませんか——」という初心者対象の文章講座で、新聞紙上で参加募集を知り、「いかに生きる」という第一回目の題に大変興味を持ち、でも恐る恐る参加申込みをして、心弾ませて会場に早く着いてしまったのだ。そのお蔭で私は、この日の講師の野澤光江先生のすぐ横に座ることができた。

野澤光江先生は、埼玉県春日部市からわざわざ来松され、生きることがもう楽しくてたまらないというような、見るからにパワーの塊のような、そして大変気さくな先生である。可愛い、色は忘れてしまったけれど、スニーカーを履いておられるのを見て、一層親しみが湧いてきた。今、思い出すと恥ずかしいことだけれど、松山の市花でもある椿の絵を描いた手作りの私の名刺をお渡しし、野澤先生のご住所を手帳に書いていただいた。すぐ絵手紙を出そうと意気込んでいたのに、何故か今もその念いを叶えていない。こんなことにも、私の怠け者の性質が表れているようだ。二回目の講座がすんだら必ずお手紙を出そう。ここで砥部に住んでおられる愛媛の国民的詩人坂村真民さんの詩「二度とない人生だから」の一節、「二度とない人生だから一ぺんでも多く便りをしよう 返事は必ず書くことにしよう」を思い出した。



会場は立見席ができるほどいっぱいの方の参加で、いかに今、こういう講座を求めている人たちが多いかがうかがわれる。

さて、野澤光江先生の「いかに生きる」のお話は、思つたとおり歯切れよく、ぐいぐいと聞き手を魅きつけていく話しっぷり。一つ一つ大きく首を振つてうなずける共感を呼ぶ内容であつた。一、生きてる証に日記を書く 二、名文に親しむ 三、伝達したい内容をはつきり伝えて誤解の余地がないこと 四、文章はみな言葉で書くのだから、その言葉の選択が根本である 五、なにを書くか、などの項目にそつて、細かく説明をしていただいた。

メモ帳をいつも用意していて、思つたこと、自分の閃きを、借りものでなく、自分の言葉で書き止める。わかり合おうとする誠意がお互いに心を開く。生活をエンジョイするという意気込みで、苦しみも悲しみも乗り越えてゆく勇気が大切だと。今、私がのめり込んでいる特効薬の絵手紙にも通じるお話で大変嬉しかつた。メモ魔の私が、メモすることも忘れて心こめてお話をきいた。

次の講座の時までに、初回の講座での感想を書いてくるように宿題？ が出た。私はこの日の感想をすぐ書こうと思つていたのに、やはり怠け者、二回目の講座が開かれる前日に、それも拙き出しに確かにしまつてあつたと思ひ込んでいた原稿用紙が見つからず、レターペーパーに書いている。相変わらずドジな私だ。でも明日がとっても楽しみだ。

## 別の自分を発見するきつかけに

渡部 巻恵

私は一人喫茶店の踊り場で躊躇しながら、誰か来ないかと、人待ち顔で立っていた。すると大街道側から五、六人のグループが、こちらに向かつて来たので、その中にまぎれ込むようにして階段を駆け下り、いい場所に席がとれた。そこは、お二人の先生が真近に座っておられる場所であつた。

そして暫くして開会となり、野澤先生のお話を耳をかたむけた。しばらく聴くほどにその一言一言が心に滲み入り、私の心は強く揺さぶられた。

私自身も五十歳の坂を下りかけた年齢になつて、主婦業から一転し、ささやかながら、店をもち、それなりに自分の世界を切り開き、多少の自負心をも、もつていた。しかしそれは、ただ自分だけの狭い見の世界であり、その狭い視野からは、何も見えてこないことに、今日気づかされた。

それにしても大勢の人たちが、よりよく学び、そして自分を高めたい、との願いをこめ、遙か伊予三島市から馳せ参じた人の弁には、強い情熱がみなぎっていた。こういつた若き人々に混じつて、自分がどこまでついで行けるかは、はなはだ疑問である。会を重ねるうちに、振り落とされるかも知れない。ただ「当たって砕けるだけ」この精神で頑張つてみようと思う。明日の仕事の準備もさることながら、この熱き思いが冷めないうちに、ペンを走らせながら、本当に有意義だった二時間を思い出した。それは別の自分を発見できるかも知れない、そんな気持ちにさせられた貴重な時間だった。

## 第二回 私のこだわり

—ことばに表せられない思い、吐き出したいモヤモヤをどう表現する—

奥川 睦

### こだわりについて

小さい頃に見た映画で、わからないことがずっと心に引つ掛かっていた。それが、大人になつてから、ふとしたきつかけでわかつた。ずっと、心の中でこだわり続けたことがわかつたということ（すんなりわかつたときよりも）深くわかることが多いし、喜びも大きい。物事にこだわって生きるというのは、決して楽ではない。しかし、自分が、何にこだわりを持っているかを自覚するのは、大切だろう。わかるということは、わかりにくいことである。何故なら、わかりたいことしかわからないのが私たちだから。

### 異文化交流

異文化とは、国が違ふとか人種が異なるところから生じるだけではなく、個体差から生じる

文化でもある。お互いの文化の相違点だけをみるのではなく、共通点を見つけ出すのが面白い。共通項をどれだけ見出せるかによって、その交流の深さも、理解の度合いも違ってくる。

## 文章を書くということ

文章はどんなに下手でも、書いてみなければ始まらない。とにかくまず書いてみる。その後、どこまで無駄を削ぐか、その作業を丁寧にする必要がある。文章の書き方については、いろいろな方法があるが、そのいくつかを紹介してみよう。

### (一) カンカラ作文術(カン・カラ・コ・モ・デ・ケ・ア)(コモはコモンセンスのコモ)

カン・・・感動

カラ・・・カラフル(色彩感)

コ・・・今日性(新鮮さ)

モ・・・物語性(自然な流れ)

デ・・・データー(確認のため必要)

ケ・・・決意

ア・・・明るさ

文章に感動と色彩感、今日性、物語性があり、それにデーターが、しつかりしており、併せて「こう思う」「こうしよう」という決意が明るく語られていることが大切。

これを、文章構成上の七要素と、山崎宗次氏(毎日新聞)は、提唱する。

## (二) 緒方竹虎(朝日新聞主筆) 式 文章の書き方

- ① まず、短冊のような細長いメモ用紙を作る。
- ② 書き落とせない要点を、思いつくまま一枚に一つずつ、この紙切れに書き込む。
- ③ 書き込んだ短冊を、机の上いっぱいに広げる(自分の書くこうとする文を客観的にながめられる)。
- ④ それを読みながら、これは序論に使う、これは結論の「目玉の言葉」に残しておく、などを入れ替える。
- ⑤ 机の上に並んだこの骨組みをつなぎ合わせ、肉を付けて、所定の長さの文章に仕上げていく。

## (三) 『PTA広報づくり入門』(新評論) 大内文一(月刊『新聞と教育』編集長)

- ① 頭の中の霞のようなものが、紙に書き出すことによって、はつきりと形にまとまる。
- ② 短冊に書く時、見出し文句のように短く濃縮するので、自分の書きたいことが簡潔にできる。
- ③ 机の上に項目別に、グループを作つてまとめるので、大事な事を(落ちこぼれがあるかどうか内容が曖昧でないかなど)点検できる。
- ④ 文字に書いてしまう前の段階なので、序論・本論・結論



で使う「ネタ」を簡単に入れ替えることができる。

- ⑤ この骨組みさえ先にできてしまえば、後は原稿の長さは、自由に調節できる。分量をふやしたいなら「例えば……」などと実例を入れて、その論旨を一層引き立てればいい。

「緒方式の利点」を、大内氏は次のように言っている。

「何と言つても、この方法の一番の利点は、自分の脳の中のものを、自分の手にとつてみるができるということです。しかも、単に見る、というよりは、丘の上に立つて盆地を見下ろすみたいに（全体を見渡す）ことができます」

ホント、自分の文章を「箱庭」にしてみれば長所も短所も一目でわかります。

#### （四）「日本の文章」（中公文庫） 外山滋比古

同じことを書くにも、五通りの書き方がある。

「五つの時計」説 マーチン・ジョーンズ（アメリカ言語学者）

☆frozen（凍結体）……「ご同慶の至りに存じ奉り候う」

候文または文語体……使うのはよほどの老人のみ

☆formal（正式体）……「心からお慶び申し上げます」

☆consultive（相談口調体）……「本当によろしゅうございましたね。お喜び申し上げます。」（人に話しかけるような形）

☆casual（普段着体）……「おめでどう。僕もうれしい」

☆intimate (親密体) . . . “よかつたな、おい”

文章を書くときには、少なくとも三つの時計はもちたい。T・P・Oが必要である。

formal (改まった言い方)

standard (標準的)

casual (くだけた言い方)

## (五)「作文——十の条件」『朝の独学』 森村 稔

楽しい作業（書く）が、成立する条件

- ① 特定の万年筆。他のものでは、重さ、筆圧、すべり具合、文字の形が気に入らず、文章が雑になったり肩が凝ったり、頭の回転が止まったりする。
- ② この万年筆とインクに合った紙質の原稿用紙を使うのでなければならない。それが切れたら、いくら油が乗っていても、その日はそれで終わりである。
- ③ 机と椅子の具合が快適でなければならない（気が乗る場所）。
- ④ 二・三時間のまとまった時間がなければならない（集中する）。電話が何度もかかってきたり、次のスケジュールが気になるような時間帯ではダメである。
- ⑤ 理想的天候 朝方うす曇り、昼から午後にかけて（晴れ時々曇り）といった程度の天気が理想的である（集中力がもてる状況をつくる）。
- ⑥ 腹が減つてはいけない。食後すぐもダメ。頭が働かないから。
- ⑦ アルコールは特にダメ。気分が昂揚は、文章を書くというような七面倒なことを撥

ねつけてしまう。

⑧ おもしろいテレビ番組も良くない。原稿用紙の相手なんかしてられない。「洋画劇場」「ロードショー」などは、まずお手上げだ。

⑨ 気を散らさないための静けさが必要。路上で、近所の子らがケンカ、現場作業員のラジオ・大声などが耳に入るような環境では、机上の仕事には集中できない。

⑩ 書くことがなければならぬ。机に向かつてから「何を書こうか」と考えるようでは、話にならない、頭の中で書きたいことが、すでにチラチラと見え隠れしていて、斉藤茂吉のいう歌わずにはいられない〈内部衝迫〉が、突き上げてきているようであればならぬ。

(六) わかりやすい文章 千葉亀雄(東京日々新聞学芸部長 昭和初期)

① ハッキリ書け、さすれば人は理解する。

② 短く書け。さすれば人は好んで読む。

③ 絵で書いたように書け。さすれば人は記憶する。

(具体的に書くこと) T・P・Oで工夫すること。

大衆の「受容の原則」  
一つでは物足りない  
五つだとオーバー

(七) 「悪文」 岩淵悦太郎(日本評論新社)

彼女は目を光らせてコン棒をふりあげる男の前に座っていた。

目を光らせているのが、彼女なのか、男なのか、わからない。長い。

↓彼女は、目を光……



↓彼女は目を光らせて、コン棒を……

↓男は目を光らせてコン棒をふりあげていた。彼女は、その前に座っていた。

↓彼女は目を光らせていた。コン棒をふりあげた男の前に。

彼は女が好きだけれど、よく働く。↓彼は女が好きだ。しかし、よく働く。

彼は女が好きで、よく働く。↓彼は女が好きだ。そして、よく働く。

彼は女が好きなので、よく働く。↓彼は女が好きだ。だから、よく働く。

「彼は女が好きだ。しかし、よく働く」……プラス・イメージ

「彼はよく働く。しかし、女が好きだ」……マイナスイメージ

このように、文節をひつくりかえすと、その文章から受けるイメージは、全然違ったものになる。(だから、しかし、の多用は、文章がだらけるので避ける)

同じことを説明する場合でも、左記の文章ではどちらがわかりやすいか。

× 私の家は駅から一キロです。(具体的でない)

○ 私の家は駅から歩いて十五分です。(具体的な日常感があつてわかりやすい)

歩き手が大人か子供か、速度は、などの理屈は後回しで、歩いてみるという行為が大切。これは、女性の方が得手(頭より体を使うから)。

具体性、絵で書いたように。実際絵を描くと、距離、駅、家とおさまる。女性が駅から描き始めると、自宅は紙の外にながちでもあるが……。

## (八) 作文のススめ四か条

- ① 思いを大切に（恥ずかしかった）
- ② 場面を切りとる（恥をかいだ場所）
- ③ 事実を丁寧を書く（おもしろい／恥ずかしい／おかしい などの形容詞・副詞はなるべく少なく）
- ④ 事実を読み直してみる

（例）私は下手な絵を笑われるようで、いそいで机の中に道具をつつこんで部屋を走り出た。（恥ずかしかったんだナと分かる）

世阿弥のことばから

- ◎ 離見の見——客観の目。多角的に距離をおいて、一度客観的に。
  - ◎ 初心忘るべからず——ヘタだった（今も？）自分を原点として大切に。
  - ◎ 動十分心 動七分身——長い年月、心も身も十分にはたらかす基本を習い極め、熟達しきつた後に、十分の心の七分くらいに身の動きを控えて、やすやすと演じる。三分ひかえて表現。何をわかりたいか、何にこだわりたいか、どこが面白いのか、何を大切に生きていきたいかを、しっかりと認識し、感性和情報をキヤツチするアンテナを錆させないことを心がける。
- 最後に野口体操（整体）で知られる野口晴哉氏の本からの抜粋をお目にかきたい。

## 雨と風

### 雨

人間の生きているのは苦しむ為だ。

その苦しむことが楽しくなる迄、生きていることが養生というのだ。犬も猫も、苦しければ逃げる。人間は自分の心身が苦しいことだけが苦しいのではない。他人の苦しみにも苦しむ。世界の一切の動きにも苦しむ。

人間の向上とは苦しむことを拡げることだ。

動物の苦しみから人間の苦しみへの展開こそ、人間の向上だ。その苦しみに徹し、苦しむことが楽しくなる迄、苦しむことだ。

楽しむことを拡大し、一切の苦しさに苦しむことが進歩というものだ。

### 風

良きことも、悪しきことも、外にあるのではなく、自分のそれに処する能力にあるのだということ  
は明らかだ。

それなのに悪しきことを避け、良きことを求めようとするのは何故か。弱いからだ。その心が起こ  
るそのことがもう能力の無いことを示している。

そうしている限り安心は無い。安心が無い限り、良いことも悪いことも心配の種子だ。

良いことは失うまいとし、悪いことは早く去れと希う。

事の良し悪しに拘らず、それに処する能力さえあれば、求めず避けず、いつも悠々としていられる。

それなのに何故、人はあくせくしているのか。  
良いことや悪いことが、外からくるのだと信じているからだ。

能力が無かつたら伸ばせばよい。

腕の力でも脚の力でも使つてゆけば強くなる。

人間の一切の力を伸ばすことは難しいことではない。

苦しいことをどしどし抜けて、苦しいことが楽しくなる迄苦しめば、それで良いのだ。

苦しむことが楽しくなり、苦しんでいることが面白くなつたら、それで能力が抜がつたのだ。

依りかかることをやめて、自分で立つ。立てないで転んだら、又立つ。又転んだら又立つ。立つ意

志がある限り、人は強くなり、その意志がある限り、転ぶ毎に人は伸び、能力は増える。

転ぶことを厭いて、立たない人はどんどん弱くなる。

自分の足で歩かない人は歩けなくなる。立てなくなる。

立てなければ、転ぶこともできない。

それなのに、転ばないことを慎重のつもりでいる人もある。

慎重と用心は、人が先のことが判るつもりでいることから始まる。これは知恵のある行為だ。

しかし、その知恵の為、決断と実行を失つて、人は眠つてしまつてゐる。

しかも、眠つてゐる間に、気が抜けてしまう。

失敗したらやり直すだけだ。失敗をいくら繰り返しても、失敗を活かそうとしている限り、失敗ではない。

そして、そういう人には失敗は無い。

それ故、安心は、何も彼も全く知らないでポカンとしている時と、何も彼も知り尽して、その時のように処する能力を持つている時だけにあつて、慎重と用心からは産まれない。

何も彼も知り尽すということは、何も彼も判らないことが、本当に判つたことをいうのだ。

何も彼も判るつものうちは、判るといふことは無い。

知り得ない人間が、知り得ない世の中を、知り得ないままに歩んでいる。

手探りしている人は、知り得ないことを知っていない人だ。知り得ないことを知つた人は、大股で歩んでいる。

闇の中で光を求めているのは、知り得ないことを頭で判つた人だ。知り得ないことを本当に納得した人は、光を求めない。又頼らない。その足の赴くままに、大股で闊歩している。彼はその裡なる心で歩いているのだ。

後をふり返るは弱いからだ。

手探りするは信なき者だ。

足もとをみているのは、先の見えぬことを、腹で判らぬ人だ。

哀れなことにそういう人はいつも汗をかいている。

(まとめ 武智 紀美子)

## 学生時代に戻る楽しみ

黒木 弘子

何か学びたい。何でも学びたいと思い、奥川先生の英会話（伊予市主催）に参加して、はや三年目に入りました。

先生の幅広い活動の中の一つであるこの講座にも参加でき、大変うれしい。毎回の講師のお話は、学生に戻つたみたいで楽しく勉強になります。仕事が販売員なので、毎日、金銭や接客マナーの事ばかりに神経を使っている講座の内容が別世界みたいに思われる。

毎日、家計簿らしきものを記入し箇条書き程度の日記も記しているが、文章を書くようにはならない。本来に、小学生の作文にも劣るのではないかと恥じている。

先生方の本への親しみには、すごいと感心するばかりです。奥川先生、吉村先生は、私と年齢的に近いのでつくづく感じました。私も今までに少しは読んだはずですが、本の虫ではなかったようです。まず読書しようと思う。いろいろな本をたくさん。

自分の考えや感動が、すらすらと文章に書けるように……。私も人生後半に入りました。世の中は、手紙を書くことも少なくなつて来たところで、これからの生活に読書、文章書きを加えて、忙しく生きて来た前半と違う楽しみを見つけないか。生きがいだと思います。今後とも良きアドバイスをお願いします。

## 講師の人柄に打たれる

武智 紀美子

奥川さんのお話は、豊かな知識と鋭い感性で、私たちを魅了する。

独特の語り口は、リズム感と、スピード感に溢れている。聴く者は、その流れの中に、自然に嵌まり込み、話の面白さに、メモを取ることさえ忘れがちになる。

文章講座を受講した時もそうで、今こうして報告書をまとめることになって、ノートを開いても、ほとんどメモらしいものが残っていない。当日の資料と、私の記憶によつて綴つてみたので、不十分なところは、ご寛容いただきたい。

奥川さんは、この日の講義の後、北欧旅行に出立ちなされた。たいへん慌ただしい気分のはずなのに、彼女の講義は、語るほどに熱を帯びた。

いつものことながら、彼女から受けるパワーは、強烈なものがある。あの細身の小柄な体のどこに、そんな力が（行動力が）潜んでいるのか、不思議でさもある。

外国事情にも明るく、日本と外国の文化や教育にも、熱心に関わつて研鑽をかさねておられる。彼女の卓越した英語力、何事にも積極的に興味と関心をもつて臨まれる姿は、多くの人々に感動を与えらると思う。私も、面白い事さがしからでも、自分を少し磨いてみたくなってきた。

「文は人なり」私の、文章修行の第一歩が、今、踏み出された気がする。

## 第三回 書くことの歎び

菊池 佐紀

### 一 書き初めの苦しみ（読むことから書くことへ）

今日の講師を勤めます菊池でございます。今回、奥川さんよりは是非にというお誘いを受けまして、難しいことは到底できませんが初心者の方向けにということでございますし、またタイトルが「素人の、素人による、素人のための、いきいき文章ゼミナール」ということでしたので、何だか福沢諭吉がリンカーンにでもなった気分になりまして、晴れがましくも登場、となったわけでございます。私の体験を生かしまして、少しでもみなさまの文章道のお役にたばと願う次第でございます。

さて「書き初めの苦しみ」から入りますと、人間の文化的行為には、まず、聞くこと・読むこと・書くことの三つがあります。本を読むことは、人から話を聞くという行為に比べますとたくさんさんのエネルギーが要ります。しかしもう一つ、書くという行為にはこの三つの中で最もたくさんさんのエネルギーが要りますし、精神的にも大変疲労する行為と思われれます。読む・聞く、



というのは受動的ですが、書くというのはアクティブな表現行為になります。生まれつきの天才は別として、普通人にとりましては、書くということは相当の精神的な疲労を伴う行為で、他人様が読んで、何とうまい文章だろうと感心してもらえようになるのは、それなりの相当の努力が必要でして、決して生やさしいものではないと思います。谷崎潤一郎ほどの大作家が一日中机に向かつていても、自分の納得できる文章が原稿用紙たった一枚しか出来なかった日もあったと述懐しているくらい、文章を書くというのは難しい作業だと存じます。ムツカシイ、ムツカシイといつて大分おどかしてしまいましたが、文章をどうにかして書こうとして苦勞していらつしやる方がこの中には相当あると思いますので分かつて頂けると幸いです。

さて、読むことから書くことへ移行するとき、精神的な緊張はぐんと高まってきます。モノを書くという行為があつてこそ私たちは小説を読んでも、作家がそこに自分の魂の何を盛りこもうとしているのか、モノを書かない人よりはもつと多く理解できると思います。

俳句や短歌・詩などの短詩型ですと、歩いても、電車の中でも、自分の頭の中で考え推敲



し、手直することもできるのですが、少しまとまった長いものを書こうとするとそうはいきません。ソ連の著名な現代作家、ソルジェニツインのように、収容所で強制労働させられている最中に、頭の中に原稿用紙を拡げ、今日は何枚、明日は何枚と小説を書いてゆき、それを収容所をでてから清書して、「イワン・デニソビッチの一日」という、あの名作が出来上がったと

います。が、とても我々のマネのできることはありません。

また、書き初めの方にとりましては、いきなり五十枚、百枚といった芸術作品が書けるというのは何といつても難しいと思いますので、ペンを握ったあとは、テーマをきめて、短い文章、短文を、幾つも幾つも書いて試してみられるのが良いかと考えます。短い文章は長い文章の前提となるものでして、短文がきつちりと仕上がらなければ長い文章へ移行することは難しいと思います。句読点の打ち方、改行の仕方にしても、軽い気持ちでいい加減なことではできません。スポーツにもルールやきまりがあるとおり、文章にもそれがあります。電話で用件を言い、自分の意志を伝達するのはスラスラできるのに、どういうのか手紙やハガキとなると苦手で、苦しくて苦しくて仕様がなと言われる方がありますが、これなど、習うより慣れろで、今から書こうと志しておられる方は、まずハガキで、便箋で、自分の意志を書く訓練をされてみるのが、一番の文章上達法でしょう。また、毎日日記を付けてみる。メモ程度ではなく、なるべく細やかに、その日の出来事を書き、それから自分の感想も書き込みますと、その行為が度重なってくる中に、自ら文章のコツが会得できるのではないでしょう。

芸術作品や高度な純文学を読み、文章の香気にふれるということもむろん大事ですが、読書は若いころからの習慣がないと、五十をすぎ六十に手が届いてからではとても多量に読めるものではありませんので、手っ取り早い文章上達法、精進法としましては、まず、上手下手は抜きにしまして、短い文章をいくつもいくつも書き上げてみるのが一番かと存じます。

書き初めのころは、どんな立派な作家でも苦しい作業でして、スポーツと同じように、汗を流さないと、苦しまないと——極端な言い方になるかもしれませんが、のたうちまわらないと

いい文章は出来上がりません。書いて書いて書きくたびれた末に、その努力の結果として、うまい文章が出来るのではないのでしょうか。テレビや雑誌、新聞の意見だけをうのみにしないで自分で考えてみることも必要です。

また、自分は文才がないから書いても見込みはないと自分でケリをつけている方もあるようですが、決してそうではなく、高度な芸術作品は無理としても、人様に共感をもつて読んでもらえるくらいのものは出来上がると思います。

自分一人でやみくもに書くだけでなく、この道の先輩の人とか同じ志を持つ人同士寄り合つて批評し合うことも大切だと思います。現代は自意識過剰の時代ですから、他人に批判されるというのを嫌う時代でして、私など年の功で「アミーゴ」という文芸同人誌の世話人をやっておりますが、ふしぎなことを感じるのです。長年文章を書いている人ほど、人の批判を素直に受ける。他人からクサされても決して怒らない。ところが初歩の人ほど、ちよつとでもクサされると気に入らないといった現象が起こります。他人の批判を素直に受入れ、もう一度そこへ立ち止まつて、自分の作品についてよく考えてみる、つまり推敲を重ねることから、巧くなつてくるのではないのでしょうか。合評会するとき、ちよつとでもクサされると、とび上がつて怒る人がいますが、「あの人に本当のことを言つたら怒る。面倒だからホメておけ」ということになりまして、以後誰も本音を言わなくなりません。その結果、その後上達もせず、そのうち消えてしまった例が実際にあるくらいでして、クサされ叩かれるのを覚悟でいないと、この道の上達はありません。叩かれるのをバネにして、一段二段と高く飛び上がれるのだと思います。

書くということは孤独な作業であります。これが演劇とか舞踊、スポーツなどですと、必ず何人かの仲間がいて、みんなで汗を流しながら、複数のグループで、切磋琢磨し合うことが可能ですが、「書くこと」はたつた一人きりの世界に放りこまれます。誰も見守ってくれない、助けてくれない、独りぼつちでペン一本を頼りに、自分だけを徹頭徹尾頼りにして文章を練り上げ作品を仕上げるしかありません。作品を書き上げるためには孤独にたえるつよい精神性が必要かと存じます。作家に自殺者が多いのもそのためでしょう。しかし「書く」という行為は自分だけの純化された世界に没頭することですから、倅せでもあるのです。

## 二 「思つたとおり書け」という間違い

最近の国語教育、なかんずく作文指導について首をひねることがあります。「文章は自分が話すように書け、思つたとおり書け」とよく言われまして、近ごろでは定説になつてしまつていますが、それでは思つたとおり書くというのは一体どういうことなのか私にはわかりません。文章作法としてかんたんでイージーゴーイングな方法なのでよく使われていますが、果してそうでしょうか。思つたとおりスラスラ書いて、果してそれで読むにたえる文章ができ上がるかどうか疑問に思えます。これはどうやら芥川龍之介と漱石との会話から、間違え伝えられた文章道らしいのです。あるとき芥川が志賀直哉の文体をほめて、どうしてあんないい文章が彼は書けるのでしょうか、と感嘆してしまつたとき、漱石が即座に、こう申しました。「彼は文章を書こうとせず、思つたとおり書くからだろう」と。どうもこの漱石の言つた言葉が後後

伝えられて「思つた通り書く」のがさも文章道の正道として喧伝されているようですが、この時代は文語体が幅を利かしていたので、口語体の文章はまだ流行らなかつた。志賀直哉は何とかしてその文語体・漢文体から脱却して話し言葉と同じような優しい口語文で、つまり言文一致で文章を書こうと苦心していました。漱石が言わんとしたのは、「文語体ではなく口語体で書こうと苦心している」と言いたかつたのが、どうも誤つて伝わつたのだという説を、聞いたことがあります。

思つたとおり書けといきなり言われても、初心の方は戸惑つてしまふと思います。現実の話しコトバにはムダが沢山あり、取捨選択もせず、思つたとおり見たとおりダラダラ書いても決して良い文章が出来上がるはずはありません。自分が見たこと思うことがむろん中心になりますが、やはり何を書き何を省いて捨て、文章らしくしていくか、その言語感覚が問われます。

私の子供のころには、いい文章というのは、流暢な耳触りのいい美文に限ると教えられていました。みんな、やたらと美しい調子のいい文章を書こうとしたものでした。平家物語の七五調の格調高い文章に憧れていましたが、文章も時代のはやりすたりがあるそうですね。高山樗牛などの文章をよく真似たものでしたが、最近はそのような「美文」はすたれてしまつて省みられなくなり、むしろ「美文」は「悪文」だと冷笑されています。しかし私は現代国語教育にも誤りがあるように思います。「思つたとおり書け」というから、今の若い人の書いた文章は美しいリズム感がなく、カサカサに乾いたものがどうも多い。作家の清岡卓行氏が「美しい文章を書きたい」といつも思う」と最近言つておられましたが、文章の美しさに惹かれて、その小説を読むということがなくなりつつあるのは、残念ですね。文章はわかればいいというもの

はないでしょう。

絵画とか書道・華道・茶道などの芸術の中で、言語芸術は何といつても一番抽象的な、一番難しい精神作用を伴うようです。「あるがまま思つたまま」書くものではありません。やはり自分の感性、美意識、考えをフル回転して、コトバを取捨選択すべきだと思います。「美文調」というのはたしかに耳に快いものですが、時代の進んだいま、いつまでも美文にこだわつていては時代遅れのレツテルをはられてしまいます。では一体どんな文章が名文と言われ、どんな文章が悪文と言われるのでしょうか。

### 三 日本語の怪奇現象

歌は世につれ、ということがありますが、言葉も世につれさまざまに変化して参りました。時代が移り文明がすすむのに逆行して、日本の美しい言葉がだんだん減つてゆくのはさびしいことです。亡くなられた慶大教授の池田弥三郎氏が、かなり昔になりますが、現代語の乱れを嘆いておられます。卒業した学生からお礼のハガキがきて、殊勝なことが書いてある、感心して読んでいるとおしまいに、「それでは先生、お元気で。先生のご冥福を祈ります」(笑)。また、ある会合で、「おれも命旦夕<sup>たんせき</sup>に迫つたかな」と冗談を言うと、「へエ、先生も胆石ですか？ ぼくもそうなんです」(笑)。

どこかの入社試験で「覆水盆に返らず」の解釈に「覆水先生はとうとうお盆に帰らなかつた」(笑) などという珍解答もあつたそうですし、□肉□食の中へ漢字を埋める出題には「弱肉強

食」の模範解答にまじって「焼肉定食」が相当あったといいます。

プロっぽい、ナウっぽいなどは、もう現在はあたり前の日本語としてまかり通っています。また、元氣している、青春している、といった表現も、今はやっていますが、これ、どうでしょう。口で言うぶんにはふしぎとリアルな感じもあつて、さほど抵抗はないにしても、文章に書く場合、果していい文章といえるかどうか。

その他外来語の氾濫。この間もテレビで、帽子のPRに「カジュアルで、値段もリーズナブル、実にナチュラルで、ビューティフルです」。これでは外国語の中に日本語がチヨボチヨボと入っているようです。話し言葉だけでなく最近では文章の中にも多く見られるようになりました。外来語を使うなというのではありませんが、適宜に混ぜるのでないと、どうも美しい本来の日本語とは言えそうにありません。

愛媛新聞の「門」欄にも七十九歳の主婦の方が投稿しておられました。「このままだと日本語はだんだんダメになるのではないか、心細くなってくる。最近では日本人の生活の中にカタカナが氾濫している。若い人が外国語にとりくむことは、それはそれで喜ばしいことだが、日本語の正しい使い方は忘れてほしくない」と。新渡戸稲造氏の講演によると、「ある夜泥棒に入られた。何と声をかけようか。貴様、あなた、おい君、お前。こんなとき英語なら「ユウ」だけ。「わたし」にしても英語なら「アイ」だけです。日本語は複雑で困る。しかし、日本語は複雑なだけ、それだけまた、変化があつて、文章を書くにも書きがいがあるように思えますがどうでしょうか」

また十八歳の女子高生の方が投稿しておられました。「言葉は生きものです。時代によつて変化していきます。美しい日本語を、正しい日本語を、と今、年とつた人たちが盛んに言うけれども、現代において正しく美しいとされている日本語も、古代人が聞いたらどんなにみなく卑しく感じることでしょう。だから言葉は生きています。時代と共に変化しているのだから、今使われている日本語は古い人たちからすれば汚くとも、それは生きている証なのだからそれはそれでいいのではないか」という反論が載っていました。確かに一理あるお説のように思えます。青春している、主婦している、という表現は私は好きではありませんが、たしかに、生き生きしてきこえます。「こたわる」というのは一昔前までは、「いつまでもそんなことにこだわらな、肚がせまいゾ」などと否定的な意味に使っていました。今では、そのものに一生けんめい打ち込んでいるという、肯定的な意味に使われます。しかし、事故つたとかパニックとかいったわけのわからない語が氾濫してきて、この手のものが新しくどんどんふえるとなると問題ですよ。こんな言葉を使っていると、現代人としての自分自身の美意識の欠如を表わしているように思えます。文章に書くとなるととても頂けません、みなさんはどう感じられるでしょうか。

#### 四 美文・名文・悪文について

イ 常套語はあまり使わないこと



桜の花がらんまんと咲き誇る、梅の花が馥郁<sup>ふくよく</sup>と香る、走馬燈のように思い出す、などはみんな言い古されていて手垢がついてしまった言葉で、まるで貸衣装のような感じですよ。若い人でも「走馬燈」はよく使うのですが、本人も何のことかわかっていないことがあるようです。言い古された表現はなるべく避けて、血の通った独特な表現を考えるべきでしょう。

#### 口 決まり文句の味けなさ

芥川のエッセイに、「隅田川を舟で渡っていて、岸辺の桜がまるでボロ布のように見えた」というところがあります。美しいはずのものが白いボロに見える。芥川が精神が少しずつ自死へ向かつて歪んでいったのがこれでよくわかります。今までにすでに存在する言い古された表現はなるべくやめて、自分のコトバで表現するのですね。文章は生きてきません。手紙でも、役所から来たものなどは全くキマリきつた文句の、上の空で書いたものが多いので、味気ない。個人の場合はキマリ文句をよして、相手の心にひびく言葉を選ぶべきでしょう。

#### ハ 主語

主語というのは文章構成の上で一番大切なものですが、主語をあまり連発するのは目ざわりですから、「彼」とか「彼女」とかの代名詞に変える方が良いと思います。反対に、主語が少なすぎたり、主語がしつかりしていないと、文章が何のことか分かりにくくなってしまう。例えば、

- (1) わたしは年老いた両親が住む山深い里の傾きかけた納屋がふつと浮かんだ。  
 (2) しかし不運にして負けた場合でも、ぼくはナインが全力をふりしぼって負けたのだつたら、決して責苦すべきではない。

わたしは…、ぼくは…という主語に対する述語はどこへ行つたのでしょうか。

- (3) 杉の井ホテルの舞台で一世を風靡した山本リンダがけんめいに熱唱していた。  
 これもおかしい。辻つまが合いません。

## 二 擬音はあまり使わないのがいい文章

例

イ、冷たい風がヒューヒューふく

ロ、ぷつと吹き出す

ハ、わーん わーんと子供が泣く

ニ、ポトポトと水が垂れる

ホ、ガアガアとからすがなく

擬音は劇画・マンガには必要でも、こうして擬音だけ並べると、大人の文章にはどうかと思えてきます。擬音はあまり使わないで、それでいて読み手の心の中にそんな音がまざまざと聞こえてくるように書くのがいい文章ですが、これもケースバイケースで、絶対に使うなどということではありません。そこらあたりを見きわめる目を養うのが文章作成のコツでしょう。

ホ 字は必ず辞書を引く

面倒でも、あやふやな場合は必ず辞書を引くべきです。

例

- (1) 彼女には女らしい怪しい魅力がある(妖しい)
- (2) 子供を供う(伴う)
- (3) 今だに独身です(未だに)
- (4) 恋人同志(同士)
- (5) 彼の声は以外と明るい(意外)

へ 「が」という接続助詞 「そして」という接続詞の連用はやめよう

「彼は美しいが性格はよくない」「空はよく晴れているが、気温は冷たい」

ト 「ように」「みたいに」の連発は避ける

「風は体を刺すように冷たく、私は海老のように体を曲げた」「彼は馬のようによく食い、河馬のようによく呑んだ」

「ように」を使うととても書きやすいのですが、あまりいい文章とは言えません。全然使わない文章は無理ですから、ほどほどに。大江健三郎の文章は読みにくく、屈折していてすらすらと流麗ではありません。「○○のように」が非常に多いのですが、平凡な文章ではなく、一

語一語に哲學的思弁の裏打ちがなされていますので、この「ように」が多くても、それをカバーする力を持っています。「みたいな」というのは文章語ではなく、本来「話し言葉」なのです。「バカみたいなこと言わないでよ」「お花にお水を上げる」というのも話し言葉でして、文章に書くべきではないでしょう。

## チ 文章の長短について

その人その人によつて文章（センテンス）に長い短いが見られます。それも各自の好みと體質によるものですから、短いのが良い、長いのが悪いとは、いちがいに言えません。永井荷風、谷崎潤一郎、古井由吉などが長い文章家の見本ですし、菊地寛、志賀直哉などは典型的な短い文章家。例にありますとおり、第百八回芥川賞受賞作「犬婿入り」は大変に長い文章でして、これだけ長いセンテンスが、最後の「午後二時」に向かつて放たれます。結局、七月の午後二時という状態をこれだけ長いもので表現しようとしているのです。

○昼さがりの光が縦横に並ぶ洗濯物にまつしろく張りついて、公団住宅の風のない七月の息苦しい湿気の中をたつたひとり歩いていた年寄りも、道の真ん中でふいに立ち止まり、斜め後ろを振り返ったその姿勢のまま動かなくなり、それに続いて団地の敷地を走り抜けようとしていた煉瓦色の車も力果てたように郵便ポストの隣に止まり、中から人が降りてくるわけでもなく、死にかけた、蟬の声か、給食センターの機械の音が、遠くから低い音が聞こえてくる他は静まり返った午後二時。（第百八回芥川賞受賞作「犬婿入り」多和田葉子）

○「父が、松葉を抜いている。あたりは静かで、動くものとしてない。ただ、松葉だけが降ってくる。わたしは、声をかけようとして、声をのんだ。父は、青空と松葉の中にあつて、まるで、空自身、松自身になり切つたのかのように、森閑とした姿であつた」

〔蘭の跡〕玉貫 寛

現代の文章作法においては、たいがいの指導者が、「文章は短く、簡潔に書け」と教えていますし、中には「短い文章が良い文章だ」と断言している人もいますが、いちがいにそうはいえない。長いセンテンスを作るより短いセンテンスを書く方が安易で楽、また、短い文の方がよくわかるし、失敗も少ない。が、長短はその人の個性ですから何もムリすることはありません。要は自分に合つた文体を早く見つけることです。

しかし「文体」は書き続けるうちにだんだん変わってきますし、文章芸術は数学の方程式のようには参りません。後の例は松山市出身の作家、玉貫 寛氏の「蘭の跡」という、芥川賞候補になつた短編小説の一節ですが、妻を失つて孤独の日々を送る父親の方丈、つまり和尚さんが脚立に上がつて松葉を抜いている情景を、息子の、これも坊さんの眼から映しとつています。玉貫先生は俳句の道をきわめることに一生を賭けた方でありまして、俳句に「のたうちまわつた」と自分でもおつしやつておられたとおり、それが散文の中に短いセンテンスとしてよく生かされています。ここでは人間と自然が一体になつていて、玉貫さん独自の文体であり、長い間の俳句の修業と修練によつて培われたものだと思います。一語のムダも冗漫さもない短い文章の名文の代表でしょう。散文を書いて、ここまで到達するには並大抵のことではないと実感

するのであります。

この作品の全部を読まないと、これだけではピンとこないかも知れませんが、妻を失い、好きな女性にも逃げられてしまつて、孤独をかこつ方丈がやつと諦めの静かな境地に入つた姿が、まざまざと見えてくるのです。

玉貫先生の作品には、ご自分の癌を冷静に見据えて、死のまぎわに書かれた「有明海」という短編があります。有明海の泥の海の自然描写の凄さは、鬼気迫るものがあります。癌でやがて世を去る運命を悟つた医師の吉川の「覚悟」が行間からただよつてくる、見事な文章と言えます。この作品はぜひ、一読をおすすめします。

短いセンテンスによる省略的な文章は短編小説に適します。長い文章は長編小説の傾向を帯びます。しかし、短い文章は下手に書くと、時として、色も匂いもない単調な文章となる危険性を持っています。せつかちで無味乾燥な、詩情のない、パサパサした文章では、読み手の心を捉えることはできません。反対に長い文章は、徒らに冗漫になつて、わかりにくくなる怖れがでてきます。

ここで、一つ疑問がありますが、文章作法どおりに書けているのに、読んで、ちつともいい文章だなあとと思えない文章があります。なぜでしょう。文章はルールだけでなく、美しい情感や明確感、詩的な情緒が現れないと、人の心を捉えるとはゆきません。そこに文章道の難しさがあると思います。また、文章が巧く書けても、文章が巧いだけでは、巧い小説が書けるかといえそうはいかない。実に難しい世界です。構成力、プロットの立て方、テーマ、空想力などが必要です。

文章を書く、ということが日常のあたり前の姿勢になるように努力することが大切です。もうこれでいい、ということは絶対にないのでありまして、文章の永久の求道者であるよう、努力すべきでしょう。それに自分の文体も、書くうちにどんどん変わってくるからふしぎです。書いてゆくうちに巧くなるのが普通で、下手になるということはありません。個人の美意識や持つて生まれた感性によつて、上達はいちがいには言えませんが、修練を重ねるうちに、どんなでも必ず、ある一定の水準は書けるのだということを言いたいですね。

茶道とか華道・舞踊とかになりますと一定の型がありまして、先達によつてきめられたその型を一応踏襲すれば何とかサマになりますけれども、文章表現でモノを書き表すというのは、常に新しいものを生み出し工夫してゆかねばならず、新しいものをクリエイトする、創作する、ということは、大変な苦しみがあるかと思ひます。

自分で書いたものも、一度声を出して読んでみると、巧いか下手か判断がつきやすい。

テレビによつて現代人は傍観者が多くなりました。テレビをただ見ているというだけでは、また文化講演を聴いて帰るというだけでは「文化の受身」であつて表現者ではありません。モノを書くこと、原稿用紙一枚でも半枚でも、最初はたとえ下手でも書こうとすることによつて、自己表現ができます。モノを書くことによつて自分を表現し、自分の可能性を引き出しましょう。書くということはスポーツと同じ、ピアノの練習と同じで、しよつ中やつてないと退化してしまいます。作家の井上ひさし氏が、三日もペンをとらないとそのあとで書くのがとても辛いから、毎日書く、と言つておられました。長い間書かないでいると、書く能力も退化してしまいます。巧く書こうという気持ちを持つと、かえつて書く意欲を殺いでしまいます。何でも

いいから、書いてみることです。

絵画や音楽の分野などでひとかどの人物の書いた文章というのはずいぶんと面白くよみこたえがあります。例えば、東山魁夷の随筆を一読して圧倒され魅力を感じましたし、音楽家の吉田秀和、芥川也寸志などのエッセイもそうです。一つの秀れた人格（人間性）が文章にも滲み出ているからでしょう、書き手のすぐれた感性、美意識、芸術性はおのずから滲み出て参ります。

「文章読本」も沢山出ていますが、読んだからといっておいそれと巧くなるものではありません。どの文章読本も共通点があります。つまり、どの人も、いわゆる「名文」と言われているものを読み、いい文章を肌で感じとれ、と言っていますが、これは大変なことです。普通一般の、読書の習慣のない人にはとてもムリでしょう。若いときから心がけて、少しずつ読んでいく習慣をつけることですね。

## リ 句読点と改行について

- (1) 改行はなるべく多く、あけて書く。べつたりと原稿用紙一ぱいに書かない（視覚的效果）。
- (2) 漢字は少ない方がよいといっても、漢字を入れないと意味が通じにくいものもあります。（漢字を四文字続けない）

## 例

イ. ここではきものをぬげ（これは漢字を使えば意味がわかりますが、漢字を使わない時は、点を打ちます。点の打ち方で意味が変わる）



ここで、はきものをぬげ  
ここでは、きものをぬげ

やたらに点を打たないこと。打たなすぎても意味がわかりにくくなる。書きなれることによつて、点の打ち方は次第に会得してくるもの。句読点の打ち方が一番難しいと言われている。(息の長い文章と息の短い文章との個人差は仕方がない)

○文章を書く上で欠かせないもの

- (1) 観察力を養う
- (2) 個性的なものの見方をする
- (3) 何ことにも好奇心を持つ

○美文↓飾りたてた文章

名文↓無駄のない、よくわかる文章、しかも芸術性の香りのあるもの(志賀直哉など)  
悪文↓わかりにくい、論理性のない、辻つまの合わない文章

○語尾を変化させることも必要

「——だった。」だけでなく「——なのだ」とか「——している」とかさまざまに変化させないと一本調子になって素っ気なくなります。

○原稿用紙に書くとき

- (1) 書き出しは二マスあけて二マス目から書き始める。
- (2) 句読点は。も、もそれぞれ一マス使う。「も一マスをあてる。
- (3) 話題が変わるような場合は、。で切つてマス目を残して次の行に移り(改行)、その

際はやはり一マス目はあける。

### ○書き出しの文章

名文と言われるのは川端康成の「国境のトンネルを抜けるとそこは雪国だった」といわれていますが、書き出しの一行はやはり文学の生命。これから始まる物語を暗示するような表現のものが面白い。

### ○キリ 最後のとどめの所をうまく決める。これでもうおしまい、といった書き方は拙い。

○文章は急いで巧くなろうとするとムリで、「巧い文章を書こう」とするよりまず「わかりやすい文章」を心がけることが大切。思いをこめて自分の気持ちに素直に表現するのがいちばん人の心を打つ。

○まず書く姿勢になること。書き落としたことや書きにくいことはあとでいくらでもつけ加えられます。

## 五 書くことの飲び 書く苦しみから飲びへの移行

一時間や一時間半程度では到底、文章について細かい点まで意を尽くせませんし、アウトライインだけになつてしまひまして、御容赦願います。文章というものは私の体験から申し上げますと、書きはじめの時期が一番苦しく、しんどい。しかし自分の書いたものがはじめて活字になったときの喜びはたえようもなく、嬉しいものでした。自分が一生けんめい表現してきたものが人さまによんでもらえるのですから。

作家の宮尾登美子氏が「權」という長編小説のあとがきにこう書いています。

「權」は完成までに九年かかりました。思うように書けず私は自分の無力が口惜しくてよく泣いた。挫けて病氣にもなり入院しました。でも今思えば「炎涼」というのか、苦しんで書いていながら私は一人ひそかに楽しんでたようなふしもある。作品が出来上がると、一日も絶やさなかった炉の火が消えたようで淋しくてならなかった。

ものを書くものにとつて、「炎涼」は誠に真髓に迫る言葉だと思えます。夏の盛りの烈しい暑さの日にも、ふと涼しい一陣の風が吹きわたつてきて、ホッとくつろぐことがあります。あれと同じように、モノを書くのも、苦しい中に言うに言われぬ楽しみが、歓びがあります。苦しみだけでは決してありません。自分は文才がないから文章は書けない、という方がいらつしやいますが、決してそうではない。書けないのではなくて書かないのです。コツコツうまわずゆまず、コツコツと修業することによつて、必ずある程度まではうまくなります。三島由紀夫や志賀直哉のような芸術的文章はムリでも、他人に笑われない文章は必ず書けるはずです。文章音痴などあるわけはありません。

ペン一本で、自分の言葉で表現できることは、とりも直さず自分の人生が豊かになることでもあります。私が発行人になつております文芸同人雑誌「アミーゴ」は年三回出してありますが、八十四歳の方を筆頭に、七十代の方も数多くいらつしやいまして、いずれもアマチュアでありまして、老後の唯一の「生き甲斐」として、みなさん、せつせと、随筆・エッセー等書いておられます。「モノを書くことで自分の生活にハリが出来た」「書くことで人生が広がり、

生きる自信がついてきた。書くことをやめたら自分の人生は暗黒になってしまう。生涯書き続けたい」と言われます。

モノを書くこうとするには老いも若きもすべて多情多感であれということとして、人間本来のあたたかい愛の心、他人に対する優しい<sup>いたな</sup>労り、自己に対する厳しさあつてこそ、読み手の心に訴えるいい文章が書けると思います。人間の肉体が老化していくのは致し方ないことですが、せめて精神だけは幾つになつてもみずみずしく潤いのある若さを保つていないと、とても、現代感覚のある新しい、読むにたえるものは生まれません。いわゆる精神年齢が若いということですね。

みなさまどうか、文章の道に志を立てられまして身近なものから手を付け、エッセー、自己史、はては小説へと挑戦されまして、若い方はこれからのご自分の世界を拡げられ、熟年の方は書くことによつてよりいつそのイキイキ熟年ライフを見出されますように。

現在の政治家などをみていますと言葉は真実をかくすために使われているようですが、私たち、モノを書くこうとする者にとりましては、「言葉は真実を告げるためにある」のでございます。ペンは決して裏切りません。その真剣な気持ちをつつまでも失わずに文章道に精進して参りたいと存じます。素人が大変おがましいことを申し述べましたが、長時間、御静聴ありがとうございました。

(まとめ 芥川光江)

## 自分に出会うつかけに

藤川 益美

私は、本当に何がしたいのだろうか。私に何ができるのだろうか。どうなれば、満足するのだろうか。わからない。いや、うすうすは気づいていて、自分を守るために、わからないと言っているのかもしれない。能力的にムリだとか、立場としてダメだとか、立ちはだかっている壁が結構高く、越えようとする勇気がなかなか出ないのだろう。

人は、生きている途中で、何度も、どっちの道をとるかを迫られる。私の弱い性格から考えれば、"あんまりしんどくない方"へ流れていったのは当然であるが、時々「やはりあの時……」というグチが出てくることがあり、情けない。

たいていの人は、結婚し、子どもを持つ。しかし、女と男では、そのことによつて、生き方が違ってくるのではないかと、子育ての小休止の時期が来た当時は、随分考えたものだ。結婚によつて何が変わっただろう。男が家族を経済的に精神的に支えていく大変さは、女以上かもしれないが、基本的な所は変わっていないような気がする。私が教職を去り、子育てに専念している間に、夫は、職場で専門的な力をつけ、周りの人たちからも信頼されるようになり、ひと回り大きくなったと思う。それにひきかえ、トンネルを抜け出た私は、自分が時代遅れで、どんなに力を落としているのかを知つてがっかりした。「ついたのはせい肉だけ……」などと、ため息まじりの冗談を言っている場合ではないと、とてもあせつた。

二年前、末の子が幼稚園に上がったことで、今まで一番ほしいと思っていた「自由な時間」が持てるようになった。しかし、解放感に浸っていたのはほんの数日で、「何かしなくちゃ」という気持ちが強くなり、あんなに楽しみにしていた自由な時間が苦痛になつてきた。子どもの世話をしないでもいい分だけ、自分のお守りをしなくてはならなくなつて、「私」というものを考えるようになった。

何か物足りない。四年前から英語教室の講師を始め、去年からコーラスグループにも入った。もちろん主婦もしているから、確かに時間的には充実しているのだが、あと少し、何かがほしいと、ずっと感じている。この文章講座の誘いに引きつけられたのも、自分の中にある何かと出会えるかもしれないと思つたからである。文字通り、自分の足で松山まで行つたわけだ。

講師の先生のお話を聞いて、「人が何か誘ってくれるのを待っていても何も起こらない。自分で一步を踏み出さないと……」と心からそう思つた。何をやってもムダということはないのだ。今、アレコレ思つて、悩んだり、迷つたりするのも必要があつてのことだろうから、せいせい振り回されてみようと思つている。そのうち自分に出会つて、仲良くなるかもしれないと、ちよつとワクワクしている。

## 第四回 書くことは生きること

吉村典子

はじめに

みなさん、こんにちは。いまご紹介いただきましたように、奥川さんとは、専業主婦として子どもの育て方や自分の生き方についてずいぶん迷って、悩んだり苦しんだりしていた頃に知り合いました。その苦しい時代知り合った人とは、いろんな意味で、今でもおつき合っています。そういう意味で、みなさんがほんの少しでも社会と接点を持ちたいと思っていらいっしやるならお役に立ちたいと思って引き受けました。



私は文章講座を引き受けるほど文章はうまくありません。だから奥川さんにも「そんな……ええの？ 文章なんて、とてもよ」と言っただけですが……。ただ、私見を申し上げれば、文章というのは、人間の生き方が如実に反映されてくるんじゃないか？ という気がします。うまくそのあたりのことをお話しで

きるかわかりませんが、お話しさせていただきたいと思います。

私は、五十歳です。いままでは自分の人生が自分のためではなくて、いろんな意味で人のため、家族のためにやらなければいけないことでいっぱいでした。去年の十月、五十歳になった時にすごく感慨深かったのは、あと私が生きる時間つてそんなに長くないのではと思ったわけです。これからは、やらねばならないこと、つまり、いま自分が生きて、生まれて、そして生きてよかつたと思うこと、気がかりなことを、できるだけ遠慮せずにやらなければいけないのではないか、と思いました。去年の春、たまたま一番下の娘が大学へ行くようになり、子どもたち三人全員が外へ出てしまつたいま、「二人つきりアゲイン」でございます。そういうことで余計に感じたのかも知れないのですが。

私は今までへお産ネットワーク えひめ」という、出産について考える会を細々とやっていました。それも何となく恥ずかしげにやっていたのですが、もうこのあたりで、自分がいいと思うことは恥ずかしく思わず、わかる人にわかつてもらえばいいんじゃないかと思つたのです。そこでもう一つ去年の暮にへ女が老いを豊かにする会」という会も始めました。そういう意味で、人生の残り半分を、自分らしく生きる時間としてすごく大事にしていかなくちやいけないと思います。

## 一 私の記事遍歴



## 中学時代の文章（散文）

私は父が警察官でして、よくいろんなところに引つ越しました。中学二年の時、宇和島の近くの広見町という、宇和島から江川崎へ行くちやなJR軌道が出ているところのちょうど真ん中ぐらにある町へ引つ越したんです。ところが、そこへ引つ越した年の暮に——それまで私は、文章が上手という自信はまったくございませんでした——広見町が出している三頁か四頁の広報紙の一番前に、年末に私が中学校で書かされた「年の暮れ」という散文がデーンと出てまして、「あらつ」と思つて、そして初めて自分の文章をしつかり他人のような感じで読んだわけです。で、その時、「あらつ、私つて、文章うまいかもしれん」とか思つて……。そんなに自信はなかつたんですが、そこで取り上げられたことによつて、初めて上手なのかもしれんと思つたわけです。

その文章を読み返した時に、非常にロマンチックな中学二年生ですから、カレンダーを木の葉にたとえるとか、けつこう文章が生き生きとしていて、私は「へえー」と思つて、われながら「表現つてけつこううまくできるもんだな」と、他人ごとのように驚いた覚えがあります。

## 大学時代の文章（レポート）

それからずつとあとになつて、大学時代にはレポートというのがありますね。だいたいは夏休みに一冊本を読んで、その感想を書きなさいというのですが、非常に褒められたレポート

がありました。自分ではそんなにうまいこといったとは思っていませんでした。先生がそれを褒めてくれて「えーっ!」と思つて、自分であとから考えてみた時に、なるほど自由な立場で書いていると思ひました。そしてハッキリいうと斜めにものを見ていたというか、たとえば「彼の生き方に対してこういう考え方ができたのは、彼の背景にこういうものがあつたんではないか」という風に書いているわけです。

社会思想史の大変無味乾燥なレポートでしたが、非常に褒めていただいて、自分でも文章を自由に、心をしばられずに書けば、いいものが出来るんじゃないかと思ひました。

#### 結婚十年目の文章（聴講生レポート）

それから、結婚十年目に、愛媛大学に聴講生として行きました。そして、藤岡喜愛という文化人類学の先生の授業の聴講生となつたわけです。そこでもまたレポートの宿題がありました。そこで提出したレポートは、優・良・可という中で優をもらつたんです。まだ優か良か可かわからない時に先生が「あとで、レポートを返してほしい人は来て下さい」と言われて、とにかく行つてみようと思つて行きました。そうしたら、優のレポートを返してくれたんです。けっこう自信作ではあつたので、「優だつたか!」と思ひました。でも、ちよつと謙遜して「へえ、優ですか? 優になるとは思ひませんでした」と言ひましたが（笑）。

藤岡喜愛というその先生がおつしやるには、「いやあ、この文章は、小学校の級長さんみた

いな文章やったわ」っておっしゃったんですね。それで私はそのあと、ほんのちよつとの間ですが、「小学校の級長さんでどういふことかなあ」と、とても悩みました。先生のおっしゃる意味は、そのレポートの問題意識について「優」をくれたんであつて、文章についてはあまりいい文章ではなかつたということだつたのです。

### 「私の目」の変化と文章の変化は重なっている

これらのことからおおざっぱな考えですけれども、私自身の心つていうか、私自身の目の自由さが変化していくと、文章は変化していくんではないかと思ひました。そこから私の目つていうか、私の心つていうか、価値観、こういうものが変化することによつて、文章は変わるんじゃないかと思つたわけです。もつと文章を自由に操れる方は、そういうことはないかも知れません。もつと自由にできるかも知れません。しかし私たち、もちろんプロの方もいらつしやるので、「私たち」という言い方は語弊があるかも知れませんが、素人が文章を書く場合、やはりその文章には「生き方」があらわれてくるんじゃないかと思ひます。

## 二 私の記事を変えた『文章作法』

さて次にこの私の結婚十年目の文章が、今の文章に変わったターニングポイントの本として、桑原武夫さんの「文章作法」といふ本をあげたいと思ひます。この本は大変よかつたと思ひま

した。どんな内容か目次をコピーしてみなさんに差し上げます。

## 1 人さまに迷惑をかけない文章の書き方

自分で考えたことを書く  
できるだけシンプルに書く  
基本的な技術を身につける  
独り言になつてはいけない

## 2 相手を説得する文章の書き方

パンチをきかせて書く  
細かい切り込みで調子をつける  
密度の濃い文章を書く  
ひねりをきかせて書く

## 3 知的遊びのある文章の書き方

あいまいなことは書かない  
最後の締めを工夫する  
書き出しの印象が大切  
知的な話題を提供する

## 4 本質をとらえた文章の書き方

助詞の使い方です勝負する  
不必要な反感を与えない  
現象の底流をさぐる  
問題意識をもつて書く

## 5 自分の持ち味を生かす文章の書き方

かみしもを着た文章  
普通のことをふつうに書く  
自分の持ち味を大事にする  
独自の見方で飾らずに書く  
文章の脈絡をきちんと通す  
文章の展開はわかりやすく  
文学的な虚飾は避ける  
擬音の使い方には注意する  
比較の基準は公平にする  
着眼のユニークさが大事

## 人に迷惑をかけない文章を

いま、「よかった」と申しましたが、この本のどこがいいのか、ということを今回調べてみました。

私は本を読む時には必ず、いいと思ったところ、感動したところに印をつける主義なんです。だから、印のついたところを再読しました。ところが、この本にはそんなにすごいことは書いてないんです。たとえば「いつも心にかかつて考えていたこと、あるいはいつもインタレスト、興味の強いことがキラツと出たのが、随想でも論文でも出来がいい」というふうなことが書いてあるんですね。そんなことは、みなさん、ご存じですよ（笑）。私は、そういうところに必死で印をつけてあるわけです。で、その自分が印をつけたところ全部をたどってみました。みんな見直してみてもそういうことばかりなんです。それで人生を変えるほど、自分の文章のスタイルを変えるほどのことは書いてないなあと思ったわけです。

しかし桑原さんは、たとえば「人さまに迷惑をかけないような文章を書きなさい」と書いているんですね。これはちよつとインパクトがありました。やつぱり私たちは人に迷惑をかけるようにしたい。「迷惑をかけない文章」、これは大変、心にかかった言葉です。

心に受け皿がなければ心にひびかない

けれども、目次を見て下さい。自分で考えたことを書くとか、できるだけシンプルに書くとか

か、基本的な技術を身につけるとか、ひとりごとになつてはいけなとか、そんなことつて本  
当に当たり前ですよ。ここに書いてあることでみんながオーツ！と言うようなことは、そん  
なになんじやありませんか？ 本当にすごいなあと思うようなところつてそんなになんじや  
に思うわけです。これはつまり、私なりに考えてみた時「私が何に対して飢えているのか」と  
か「私が何を求めているのか」という目的意識で本を読んだからじゃないか。その人の中に  
それに反応する受け皿がなければそれは心の中に入つていかないのではないかと思つたわけ  
です。つまり、私はこの本を読む時、実際に私自身が変わりかけていたんではないでしょうか。  
だからこそこの本を、なるほどそうだな、そうだなと思ひながら読んでいつたし、それが  
実際に自分の心の中で血や肉になつていったんではないかと思つたわけです。いくら「これは  
いい本だよ」と言われても、その人自身の中にそれを求めるものがなければ、やっぱり本とい  
うものはただ読んでいるだけ、目で追つてるだけ、ということになるのではないか。こういう  
ことを気づかされました。

### 三 『お産と出会う』の誕生

一九八〇年代に入つて、「お産と出会う」という本を書かないかと奨められました。ちよう  
ど私自身、調査とかいろんなことをしまして、さまざまなお産に感動した時だったので、この  
本を書くことになりました。……運ていうのはすごいというか、やつぱり大変幸運だったな  
という気がするんですけれども……。

私は専業主婦であつた時になんか自分の納得できることをやりたいと思つていました。そして出産後、出産という自分を自分の心の一つのこだわりとして持つておりました。娘が生まれた時は、二番目の子どもでしたから、出産を知らなくはありませんでしたけれども、こんな出産は本当に娘にはさせたくない、「させたくない」というより、私自身が娘を……女の子を産んでしまつたということを、なんていうか、非常に不憫に思いました。

一番上の子どもは男の子で、生まれた時には泣けないようなひどい状態でしたけれども、その子が生まれた時には、それほど強い思いはなくて辛さだけでした。でも二番目に女の子が生まれた時には、本当に考えこんでしまつた。お産をしなければならぬ「女の子」を産んでしまつたということは、私の人生にとつては非常に大きな気掛かりの一つでした。この子が後で「女の子でも本当に楽しかつたよ」と言えるような人生を送るために、出産のことをもつときちんと調べなければいけないというふうに、そこはかとなく思つていたのです。それが藤岡喜愛というすごい……すごく素晴らしい先生に出会つたために、実行に移せたわけです。

### 藤岡先生に出会う

大学の聴講は一年間でした。その時はたまたま非常に幸運だつたわけです。女の人で、主婦になつてから聴講するという人は非常に少なかつたわけです。それで聴講前の面接で、藤岡先生は「主婦でなぜ勉強を始めようとしたのか……と。「えっ？　なんで俺の聴きに來てくれたんか？」とちよつと期待してくれたんじゃないかと思うんですね（笑）。いつか話に

来ないかと言われて、私は聴講終了後、幼稚園の娘を連れて行きました。先生は「やりたいことがあったら、主婦かて、何かで、僕のできることは何でも手伝うてあげるから、やりたいことやりなはれ」って言ってくれたんです。

今西錦司先生の直弟子、藤岡喜愛。スケールの大きな素晴らしい先生に出会ったことによつて、私はフィールドワークとして、出産を「産む」という側から調べ始めました。それまでは——今もですが、出産というのはお産をさせてあげる側、助産する側からしか調べられていませんでした。で、自分が出産した時に、助産する側から書かれた本が、知識として、産む人にとつてはいかに何の知識にもならないかということを感じてたわけです。

#### 離島でのフィールドワークを始めるために

私は自分がお産した時、あまりにも産み難かった。では、どういう出産だったら産みやすいのかということが出産を調べるキツカケになりました。せめて子どもには、こういう産み方だったら産みやすいということを伝えてやりたいと思いました。そのために離島で昔の出産習俗を聴き始めたわけです。

私は専業主婦でしたが、自分の勉強には夫にお金の面で頼りたくないと思ってたんです。けれどもいったん主婦になつてしまうと、なかなか復職できないという愛媛県環境がありました。愛媛県は当時、高校の先生になりたいと思つても三十歳までしか採用試験を受けさせてもらえませんでした。今は違いかも知れませんが。私はとにかく、自分のためにはお金がいる、と。



しかし、夫に面倒をみてもらって研究はしたくない、と思つたわけです。そこで頼まれて非常勤講師を始めました。一九八〇年のことです。

しかし、非常勤講師というのは非常にしんどい仕事です。みなさんご経験があるかも知れませんが、ただのパート労働と同じで、私が主任で教育……というか、生徒指導のやり方とか、そういうことを全部指導しても、いつまでたつても非常勤講師で、そしてパート労働のお金しかもらえません。しかも、期間が四月一日から三月三〇日までの一年に一日足りない契約なんです。そうしますと、二年しても三年しても、いつも非常勤のままキャリアにはなりません。三月三十一日、一日だけ取つてしまつてゐるために、共済の健康保険にも加入させてもらえないんです。ですから、国民健康保険に入つて……結局主婦は、そういう労働しかさせてもらえない。職場ではけつこうきつちりと責任だけはかぶさつてきて、給料は新卒の人よりも安い。そういう中で、主婦というものの辛さというか、うまく使われるくやしさを非常に強く味わいました。

### トヨタ財団の研究助成

一九八一年四月の終わりに、トヨタ財団という所が研究助成をするために、研究を募集しているのを知りました。五月三十一日が締切りだったわけです。それまでに、どういう形で助成してほしいか、どういうテーマなのか、どの程度の予算なのかを、全部立てて出さなきゃいけなかったんです。で、私はまず今年は無理だなと思ひました。私、そういう研究助成してもら

ための申請書なんてそれまで出したこともありませんでしたから、どんなことを書いていいのかわからないし、どの程度の予算なのかわからないし、野外調査を始めるといつても、それにどの程度のお金がかかるかわからない。しかも非常勤の仕事は忙しいということで、もうこれは無理や、と思つて、一度は放棄したんです。でも三〇日になつて、やつぱりこれは何か、ひよつとしていや来年申請するためにもと必死に作つて、三一日に速達で送りしました。

ところが、それがジャーン！ と、こう（笑）なつたわけです。八十何万円ぐらいの研究助成をいただきました。

それだけじゃなくてトヨタ財団で研究助成をいただくということは、実はすごく名誉なことというか、大学の研究者でもほとんど通らないような非常に大変な助成だったわけです。だから主婦でありながら研究助成がもらえたということで、トヨタ財団でも大変話題になりました。いろんな意味で非常に幸運だったのです。主婦は私がたつた一人出していました。テーマは産む側から出産を考えて「出産にかかわる女たちの主体性の変遷」ということにしました。そういうテーマはそれまで一度もなかったし、トヨタ財団でもほんとうに賭けのような助成決定だったそうです（笑）。これは全然モノにならんか、すごいものになるかだなというような、そんな一か八かに賭けたみたいなことだったと、あとでわかりました。

私は認められたんかと思うて（笑）もう一〇〇%喜びました。またトヨタ財団で認められることによつて、私のやつていることつて間違ひじゃないんじゃないかとずいぶん自分に自信もできました。この財団では、お金は申請しただけ全額くれました。あとで領収書さえ出せば、何に使つてもかまわない。文部省などで助成する場合には非常に細かく決められています。

トヨタ財団には大変立派な助言者——研究者に対して助言をする専門家がたくさんいます、その方々の助言も私にとつては大変大きな財産になりました。「お客様は神様」という、三波春夫の言葉が流行していた頃ですが、ある産婦人科の御大、本当に皮肉をこめて「お客様は神様と言われますけれども、吉村さん、決して医者には「患者が神様」だとは思いませんよ」と言われたんですね。まあそういうふうに言われましたけれど、でも日本の産婦人科学会で御大である人たちに平等に口が利けるというような立場を得たわけです。しかも助成されることによつて、いろんな出版社から、その研究について「すごいんじゃないか、本を出さないか」と言われました。学問的な本しか出していないある出版社からもそう言われた時に、実際自分自身である程度調査を進めていたので「じゃあ、お願いします」ということができたわけです。

自分のために、子どもたちのために、自分の文章で書くぞ

私はそれまで自分が専業主婦になったということについて、夫に対していろんな意味で心にとめた怨念というか、そういうものが、非常にたくさんありました。で「男つてダメね」つて……あ、ゴメンナサイ（笑）、私の夫ですから……（爆笑）。私は私の夫に対して自分で結婚を決めながら最後までどうしてもふつきれないものを持つてました。そういうものをふつきるためにも、私はこの本に自分のことをぜんぶ書きたいと。この本で、一躍有名になりたいとか、この本で何か地位を得たいとか、そういう気持ちはまったくありませんでした。本なんて私には書かせてもらえないはずもない。その中で「本を書きませんか」ということは、つまり、私が

お金を出さなくても、私の考え方をみなさんに伝えさせてあげますよっていうことです。これが最初で最後の機会かも知れない。だから私はここで夫とこのまま一緒に一生を続けていくためにも、ひとつきちゃんと書いて、ここから一段飛び上がろうと思っておりました。

だから、この本はとにかく誰のためでもなくて、自分のために自分の文章で書きたい、そればかり考えていました。それと同時に私は、その当時、一番下の娘が小学校五年生でしたが、三人の子どもたちにもちゃんと自分史として残しておきたいと思いました。私と同じ道を歩まないように、本を読めば私よりもう一段上から生きていけるんじゃないかと思ったわけです。ですから、自分で感じる、自分で本当に思う、そういう表現で文章を書こうと思いました。当時私は非常勤の講師は引き受けていましたけれども、時間をできるだけ制限して少ししか引き受けておりませんでしたので、ほとんど専業主婦に近かったです。だから、この本に非常に精力を注ぎました。今までの自分の生き方、出産についての自分の思いのたけを書いたのです。

### 医者による人工難産に出会ったことがきっかけに

私は自分の出産についても、自分がこういうお産をしたい、これがいいんじゃないかということを考えてないで出産に出会いました。自分のお産でありながら、産婦人科のお医者さんにおまかせして、それが一番安産につながり、一番いい女ということではないかと思っていた。それが出産してみても、本当に信頼しきっていたお医者さんによる人工難産に出会って、お医者さんに腹立てたよりも、自分自身にものすごく腹立てました。考えてみたら、私の体で育んでる

つてのは自分で知っていたし、自分の体から出すためには本当に自分が産まなきゃいけないってわかるのに、なぜかお産となるともう真っ白になって、お医者さんをお願いしなきゃあ私にわからないって、パニックになったのです。

夫とも、この人と結婚したい、というよりも、早く結婚したい、早く結婚しなければいい女と思われないと、結婚にあこがれていた自分。本当にこの結婚がいいのかというよりは、まあまあいい、まあまあならこのあたりで結婚してしまおうと（笑）。専業主婦であることについて、私はもしかしたらもつと違う人生をひらけたんじゃないかと、そこは他人のせいにながら、どうも自分の心の中では専業主婦って素敵なんじゃないか、夫に好かれるんじゃないかと思っていて、その所を夫と話し合ったわけでもないのに、自分自身で縛っている、そういうものがあるということをしごく感じてました。

ですから、この「お産と出会う」の中では、私は自分の文章で書きたい。どうしても非難できない人、たとえば夫のお母さん、姑はやっぱ非難してはいけないと思うんですが、夫はあんなに非難しても、あとでお互いに話し合う時間があればそこで乗り越えられるんじゃないか……と思っていました。ですから、そういう意味で本の中身は私たち家族のことについては、本当に私自身がその時の私を乗り越えるために全てきちんと書くこうと思ったわけです。

「ほんまにええ文章になったなあ」

そして藤岡先生に、一番最初に自分が書いた汚い手書きの原稿を全部送りました。そして

藤岡先生が「ああ、ほんまにええ文章になったなあ」ってほめてくれました。「僕なあ、直すところもないから、もうこの線でいつたらしい」っておっしゃったんです。藤岡先生が非常に細かく、非常にきれいに直してくれたとしたら、それも、嬉しかったかも知れないけども、「ほんまにええ文章になった、もうあんな言うことないから、自分の考えるとおりでこのままを出したらいい。お産についてはあんなの方が専門家や（笑）。僕は何もわからんし、文化人類学については話すことはできるけど、お産についての“お産の人類学”はあんなが専門家やだから……」と言われたことは、とても勇気付けられました。そこで出来上がった文章が、現在の「お産と出会う」です。

実はその文章を出した時、出版社は賛成ではありませんでした。その出版社は大変堅い本を出してましたので、もうちょつと堅くて、もつと強い戦闘的な文章を望んでおられたんじゃないかと思うんです。私はこれ以上書き直すつもりがなかったし、「て・に・を・は」は書き直すけれども、それ意外の表現は、もう一生懸命考えたからこれでいきたい、と。だから出版社は全然期待してなかったんです。しかも「頑張つてぜひ本を出しましょう」と言ってくれた編集者は、私の出版直前に入院しちゃったんです。

これは著者としては、特に、初めて本を出す著者には非常に大きなダメージなんです。本当は編集者がいろんな所へ宣伝してくれて、初めて本は売れるものなんです。が、出版の一个月前に入院したんです。

だからその本は全然期待されてなかったわけです。当初は三千部刷ってくれるということだったのですが、初版は二千部でした。いかに期待されていなかったか……ということですよ。

ところが、五月末に出版して十月中頃に、事務用の茶色の封筒で手紙が来ました。見たら毎日新聞社と書いてある。何だろうと思つて開けたら「あなたの本は非常にいい本であつたので、毎日出版文化賞を差し上げたいと思う」つて、白い半ピラのB5の紙に事務的にワープロでチャチャと書いてあるわけです。「エーッ」、そんな嘘だろう? と思つて、もう急に手が震えて「本当に、本当だろうか?」と信じられませんでした。一番最初に、松田道雄先生という小児科医の、私は非常に尊敬している先生なんです、その先生が推薦してくださつたということで、お礼の電話をかけようと思ひました。が、それよりも前にやつぱり「お産と出会う」という私の出版を非常に喜んでくれた夫に一番最初に伝えなきゃいけない……、と思つたら夫はその日出張でしたので、私は帰るまで必死で、誰かに言いたい(笑)、でも言えない(笑)、と思ひながら必死で待ちまして一番最初に、話しました。「お前さんですごいんやねえ」とか言つて、すごく感心して尊敬して喜んでくれました。その本を出したことによつて、私自身の人生がもつと自分流で生きるということに、もう一段跳び上がったような気がします。

#### 四 「私の目」で見る、そして書く

いい文章を書くためにという今日の一番の命題がありますので、一応、いい文章を書くために三つほどあげてみました。これは私自身の考え方です。それを皆さん流に考えて下さい。

一つは私自身の目で見ると、そして私自身の表現で書くということ。「文章講座」というこの講座も非常にいいと思うんですけれども、やつぱり私自身の目を磨かなければ本当に「あつ、

これだよねー」つていうような文章は書きにくいんじゃないかと思ひます。でも、基本的には「て・に・を・は」とか、どういふふうに書くかということも非常に大切だと思ひますので、そこにもうひとつスピリットを加えるという意味で聴いて下さい。

二つ目はやつぱり問題意識を自分できちんとして持つ、ということが大切じゃないかと思ひます。私はその人がその時点で書いた表現というのはやつぱりその人のものじゃないかというふうに思ひます。私が中学生の時書いた文章にはいろんな文章家の本の中から取つてゐるような部分もありましたが、今は自分の文章を書くためには夫にも相談しません。「お産と出会う」の時にも、夫にも誰にも相談しませんでした。なぜかというと私は大変素直な性格ですので（笑）、夫が「お前さん、やつぱりここあかんぞ」とか言われると「そーかなあ」と思つてしまふんですね（笑）。そして「そーかなあ」と変えた部分というのは必ずどうも光らないんです。で、「この部分、ちよつとちぐはぐですね」つていわれるんです。講演とかそういうふうなことも、まあ時々頼まれますけれども、頼まれる時には誰にも相談しません。自分の持つてゐるものを吐き出すつもりということが、一番必要でないかなというふうな気がします。

井上光晴氏語録……「ギョツ」とするものを書け

その意味で、先日亡くなりました井上光晴という人、この人の文章というのは非常に光つて——すごいなあと思ひました。以前にその人の文章講座風景をテレビでやつてたのですが、「あんなこういう文章じゃダメだよ、この文章読んで自分でギョツとするか？」つていわ



れたのです。「ほおーう」と思つて私、それすごくこたえたんですね。この文章読んだら、なるほどとか、へえ、そうだよなーとか何か本当に心がドキツとするようなそういう文章が書けるつていうのは、やつぱり自分の持つている問題意識を、下手であつても自分が感じたとおりに表現するつていうことじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。私は井上光晴さんの「ギョツとするような文章を書け」と言われたその言葉は、すごく心にこたえました。

それから簡単に言うのと、多く書くほど上達するんじゃないかと思ひます。文章をあまり書かない人は余分な言葉とか言い回しとか、どうも無駄が多かつたり、自分にしかわからないような表現をされたりします。これが、たくさん書くうちに、あれじゃ人が読んでわかりにくいよねエとかいうことが少しずつわかつて来るんじゃないかなと思うんですね。そして、書いたものを読んでもらう。私は、手紙とか新聞の投稿欄に昔はよく出しました。後で考えてみたら非常に恥ずかしいけれども、そういうものを出して反響をみる。自分の文章が取り上げられてる時つていうのは、やつぱりその文章に何か光るものがあるんじゃないかと思うんで、そういうものを数多く書いていくということは一つの上達につながるんじゃないかと思ひます。

それから、「これはやつぱりすごいなあ」と感じるのには、実践に裏付けられた文章です。これは非常に心打つものがあります。その文章自身はそんなにうまくなくても何かその人自身の体験による感性つていうのが本当に輝き出して来るような気がするんですね。言つてることが絵空事じゃなくて、心の中、体の中からほとばしり出るような文章というのは、そんなすごいことじゃなくても心打つものがあるように思ひます。

## 五 「私の目」の遍歴

さて、最後に私自身「私の目」がどんなふうに遍歴していったかということ、「私の心は私色」というふうになっていくまでの自分というものを、非常に簡単ですがレジュメに書いておきました。一番最初は女であることについて。子ども時代は嫌な思い出ばかりでした。まあ若い人にはなかなかかわからないと思うんですが、私の時代——私は昭和十七年、一九四二年の生まれですが、私の子ども時代というのは、学校は今よりもずっと民主教育でした。非常にいい教育をされたと思います。戦後の混乱期と言われながら……。先生自身があんまり自信がなかったから、本当にいいものも、悪いものも、ツツばつてるものも、みんな受け入れてくれるような、そういう教育でしたから、私なんかは非常に救われたと思います。

女なんていや！ の子ども時代と、結婚に憧れ、専業主婦さんせーい！の青春

私は本当にオテンバでしたけれども、兄弟は上も下も男で、母は男の子にしか期待しておりませんでした。だから私は父にすごく可愛がられました。けれども今、結婚したらよそへ行くからということで全然期待されなかった私が親の面倒をしています（笑）。女は何かすごく損だなどと思うのは、生理的にやつぱり親をほっておけないんですね。「私はよそへ行った人間やから知らないよ」と言えないんです。それで優しく見てみると、知らん間に私がその役割を担

つてしまうような（笑）、そういう形になつて、今度は今まで「よそへ行つた人間なんて」と言つてた親たちが「子どもだからお前、時々は来るのが当たり前ぞ」なんか言いはじめて。本当に女つて損だなと今も思つています。子ども時代は女であるということ、とにかく立て膝をしちやいけない、トイレで口笛吹いてはいけないとか（笑）。

中学校で部活がありました、女は部活などをあんなブルマーで（笑）する必要がないと父母は言うのです。父は警察官でしたので、男はみんな狼だと思つてましたから、もう六時ぐらになると、自転車でサアサアサアサア迎えに来ました。「典子、お前、後へ乗れ」と、今だつたら警察さんが違反でいけないんじゃないかというような二人乗りにして……（爆笑）。

部活の後はみんな喜んでワイワイしゃべりながら帰るんですけど、私はいつも父と帰りました。

生理が始まつた時も、本当に女は嫌だなあと思いました。なんで私は女なんかになつちやつたんだろうと、そういう子ども時代を送りました。それが知らん間に高校ぐらいからしつかり女らしくなりまして——高校の終わりぐらいになるとすっかりいい奥さんするのが女の幸せみたいな気持ちになぜかなつてしまつて……そして、女性の教師なんかで結婚してない人を見ると「オールドミスつていやよねえー」とか思つて（笑）、何もわからないのに。また女がオシヤモジを持つてデモをしたとか聞くと「いやあねえー、女がデモをするなんて！」（笑）というふうに、それがいいことか悪いことかというよりも、まずその社会の規範の中であの女はこうあるべきだという、そういう女らしさをすごく身につけていったように思います。

## 大学選びもままならず

大学は女子大でした。今思うと女子大というのは非常によかったですね。父と母は大学へ行くことを許してくれましたけれども、彼らは男女共学みたいな所へ行くと、もう女がすぐ変なことになつてはいけない、だから女子大に行つたほうがいい、女らしくなつたほうがいいと。ところが、これは正反対でした（笑）。私は本当は男女共学にぜひ行きたかったです。けれどもうちは貧乏でしたし、国立しか行けませんでした。共学なら愛媛大学、共学じゃなくて女子大なら県外へ出してやるという。私はたまたま宇和島のほうでしたから、幸せなことにどこへ行くにしても外へ出ないといけなかつたわけです。もし地元に大学があつたら絶対に出してくれなかつたと思うんですが、それで出してくれたのです。ただし、両親が言うには「東京は生き馬の目を抜くような所だから行つちやいけない」（笑）と。

そうするともうこれは奈良女子大しかないわけです。私は奈良研究はしたことがありませんでした。けれども、私はとにかくよそへ行きたかつたんですね。もう親のしめつけがひどくて（笑）、本当に一から十まで、箸の上げ下ろしにまですごく文句を言われました。それで行きたかつたんですが、親からは「行くなら家庭科」（笑）と言われました。もう決まつたようなものだったですね（笑）。それで、家政学部へ行きました。

ただ、女子大がすごくいというのは、何もかも女の子がするということです。トップになるのも全部女の子です。奈良は特に京大とよく連携を取っていましたけれども、京大の男子が来ても、だいたい脇役です。私たちが大学祭をやるにしても、何をするにしても、女が全部し

て、 TENT 張るのも、みんな私たち。力仕事もこまかい仕事もしました。だから当然そういうものだと思っていたわけです。ところが娘たちをみていますと、高校から大学、みな共学へ行きましたが、どこかへ行く時は男の子が車を運転して、女の子はお弁当を持って行くんですね。「あんた命あずけられると思わなかったら一緒に乗つたらいいかんよ」(笑) っていうんですけれども。まあそういう風な感じで、本当に共学の方が男役割、女役割がしっかりあるみたいで、女子大というのは本当によかったなと、今頃よく思います。

### 商社に感じる男女差別

女子大を卒業して、当時私は教員にはなりたくなくて、親の所へも帰りたくなくて、大阪で商社に勤めました。当時はまだ奈良女子大っていうのは稀少価値があつたみたいで、これは先輩のおかげですけども、愛媛県から人が来て無試験で高校の先生にならないかとおすすめいただいたものです。だから、沢山の人が愛媛県の先生になりました。私はもう愛媛なんかに戻るもんかと思いました(笑)。とにかく親の所には帰りたくない。

商社に入つて、デザイン部でいろんな事をやるつもりでしたが、商社に勤めてみて、女というのはいかに働きにくいものかということがすぐよくわかりました。つまり、同じ仕事をして、女の私の方がずいぶん給料が安かつたんですね、男より……。実は入社宣誓式には私が宣誓をしました。なみいる男たちがみーんない前で(笑)。だから私としてはけっこう自負も持つていました。ところが給料をもらつてみると隣の同期で同じ仕事をしている男と私と

比べてみたら、断然違うわけです。働くのはお金じゃないよと言いなから、お金が違うということは本当に働く意欲を無くしていくものです。それはつまり私自身の能力を評価されるということは、お金によつて評価されるということと同じなんだとよくわかったわけです。

それでもう一つ、その夏、ものすごい喘息にかかりました。大阪の御堂筋にある大きな商社でしたが、当時初めてクーラーが入りだした頃で、いい会社のステイタスみたいな感じがすぐクーラーが入ったわけです。そしたら寒くつて寒くつて。夜になってあつたまつて来て、寝る頃になつたら、ものすごい喘息が起こつてきました。ひと夏でもものすごく痩せるぐらい喘息が起こつたわけです。

そこで結局、松山に帰つてきて、たまたま短大の先生を探しているというので、翌年四月から短大に就職しました。当時は短大がどんどん出来た時代で、ちょうど私のように浪人して帰つて来た者にも声がかかったわけです。そこで現在の夫と出会いました。私は、本当は共働きをつづけるつもりでした。ところが、共働きは、「お産と出会う」の中にも書きましたけれど、いろんな理由でできませんでした。しかももう一つの短大の先輩を頼つて就職を依頼し、先輩が探してくれた職場も、さまざまな事情の前でどうしても続けることができなかったんです。

その時は専業主婦というものに対して、そんなに悪いイメージは持っていませんでした。夫に尽くすということにも、非常に魅力を感じていました。私が専業主婦で細やかにいろいろしてあげると夫が喜ぶんじゃないかと、心からそう決め込んでいました。子どもたちも、当時育児休業なんてありませんから、私が手塩にかけて育てると、それが非常にいいお母さんだろうという風に思ってたんです。

「絵に描いたような幸せ奥さんになって」……私はどこでしょう

そうやって、私は専業主婦になつて、絵に描いたような幸せな生活に入つたわけです。

ところが、結婚十年目位から私自身非常にイライラしてゐることに気づきました。なぜなのか、そのところがわかりませんでした。けれども私自身は小学校の時から人間はなぜ生きてゐるんだろうとか、死ぬつて何だろうとか、そういうことをいつも頭のどこかに抱えて生きていました。結婚後は夫の帰りを待つて夫の世話、それはそれは私はちゃんとしました。本当にこれぞいい奥さんと思うくらい、せつせと洗濯も掃除もきちんとして、夫のパンツだけ別に洗つたりしないで（笑）、ちゃんと一番に、きれいにたたみもし、お風呂に入つたら脱衣かこに着替えもちゃんと入れてあげて、という風な本当に絵に描いたような奥さんをしたわけです。

ところが、それがすごく自分にとつて空しくなつてきました。私はなぜ生きてゐるんだろうか。私自身の人生つて何だろうか、という風なことを考え始めました。それは多分、私にとつて私の存在理由がわからなくなり始めていた時期じゃないか、それから子どもにとつても、自分たちで歩き始めようとしてた時期だつたんじゃないかと思うんです。

今度は子どもたちが心身共に自分で歩き始めました。小学校へ入つたり、幼稚園へ行つたりし始めたわけです。その中で、私自身は母親として、小学校に入つた長男を見ていますと、すごく腹が立つ……本当にイライラしてくるようになりました。幼稚園の間は長男との間はうまくいつてたわけです。小学校へ入つてから息子は一つも変わらないんだけれど、私自身の息子に対する考え方が、ものすごく変わつてきたのです。ある日気がついたら、私は鬼のようなお

母さんになつてゐるなと思つたわけです。私にとつていい子になつてくれないと、本当にイライラしてきはじめたんです。そしてある時、私はこの子をダメにしてしまふんじゃないかと氣付きました。三十何歳のお母さんが七歳や八歳の子どもに、七年か八年しか生きていない子にアタこれじゃダメ！と言つて三十何歳の氣持ちを吹きこんだつて無理ですよ。その所に私はちつとも氣が付きませんでした。私がこの子によかれと思つてゐることは、私がそれじゃないとガマンできないつてことだ。これはダメだと思ひました。

私は出産した時、いい子に育てたいというよりは、子どもが、生まれてきて自分の人生は幸せだつたと思へるような子どもに育てたいと思ひました。それなのに私はこの子をダメにしてしまふんじゃないか、せめてこの子をダメにしないために私は私らしいものをもたなきやいけない。つまり子どもには無関心になろうと思つたわけです。とにかく無関心になろうと。

無関心になるためには何をするかという時にはじめて、私自身が勉強をしなくちゃいけないんじゃないか、私が本当に関心のあることに没頭して、子どもが好きなように生きられるようにしてやる、それが私が母親としてできる最大のことでないかと思ひました。

すぐに目的が見えなくても大学というのはいいところよ

そう思つてゐた時に、一番下の娘が幼稚園に入ることになりました。夫も自分が仕事をしつづけるために私自身をやめさせてしまつたという負い目がある程度あるわけです。

一九七七年一月のある日、夫が「君がいつも興味をもつてゐたような事を研究している先生



が去年愛媛大に來たぞ、あの先生は素晴らしい先生だから聴講してみたらどうや」つて言ってくれました。当時、聴講の費用つてけっこう高かつたんです。調べに行つてこんなにお金使うなんてもつたないわと思ひました。だから「けっこう高いし、いいよ」つて言ひました。すると夫が「もし本当に自分が受けてみたいと思うんだつたら、今行かないとダメ。今行かなかつたらあの先生帰つてしまふかも知れんぞ。少々の事なら何とかなるんだから行けよ」つて言つてくれました。それで私は、聴講に行つたわけです。ですからそういう意味で、私は夫に對して感謝しています。夫がきっかけを作つてくれたから藤岡先生に出会つたし、藤岡先生に出會つて初めて學問の楽しさつてどういふものかつていふことを知りました。

奈良の大學へ行つてゐる時は、ちつとも學問は面白くありませんでした。さばることとか、代返とかけつこうありました。奈良はいろいろな行事がありましたから、一年に一回の年中行事と一週間に一回の講義とどつちが大事かと言つたら當然わかるだろうとか言つてよくさぼりました。でも、聴講してみればじめて、自分がこういう研究をやつてみたいと思つていたことに氣づきました。初めてこれが続けてみようという氣持ちになりました。だから私は十八歳やそこらの今の大学生が自分の生き方がわからないというのは、当たり前だと思ふのです。うちの子はこの大學へ行くか、まだ決められないのよつていうことはよく聞きます。当然だと思ふんです。だから一番下の娘が大學へ最初行かないと言つた時に、うちの周囲はみんな狂ひました。「そんな！ 大學だけはいかなきゃあ」と私の親なんか必死で言ひました。でも、私はそうじゃないと思ひました。「行きたくなければ、本當に行きたくなければやめなさい。だけど大學つていうところはやつと自分自身で考える時間があるところよ。今までは受験受験と、い

ろんな事がいっぱいあつて、本を読んだりする時間が無かつたけれども、お母さんは大学で初めて夏目漱石や志賀直哉や、本当にいっぱい読んだよ。そういうことができるのが大学だし、いろんな事が考えられるのが大学だ。だからあなたにもそれだけの時間をあげたいと思う。でもあなたが行きたくなければ、どう考えても行きたくなければやめなさい。けれども行くんだつたら少し勉強しなさい」と

そこで、娘は考えました。「三年の運動会がすんだら私は一生懸命勉強する。だから大学へ行かせてくれ」ということで、変わつたわけです。その時に大学へ行きたくないという理由として、何をやっていいのか、わからないと言いました。だから「そら当たり前よ」と。「お母さんだって、大学卒業する時まで何をしたいのかわからなかつた。そういうものはじよじよに見つけていくものであつて、まだ二十年も生きてもないのに、そんなに簡単にわかるもんじやないよ」と言いました。そしたら、そういうもんかなーというふうなことを思つたみたいです。息子はこういう事やりたい！ つて決めて大学へ行きました。けれど大学で、自分で思つたものが違つたということです。いぶん悩んで変わりました。ですから 私は、大学行くまでにこうやりたい！ と思つていたようなものは本物ではないと、私自身の体験的実感として思つています。大学生のお子さんを持つような御年齢の方もいらつしやると思いますが、大学へ入つた時とあなた考え方違ふんじゃないの、つていう風なことは言わないでほしい。その子の人生にとつて一年や二年のブランク、大したことないわけです。大学を卒業して、いやいや就職をするよりも、ここで一年ぐらゐあなたが一生懸命考えて、そして本物のやりたいことの方に進んでいくんだつたらその方がいいんじゃないと言えるぐらゐな時間を与えてあげてもいいんじゃないや

ないかと自分の体験で思います。

師と出会う……お産が、子どもが見え始める

愛媛大学に入って、藤岡先生に出会って初めて、私が私の心を縛っている価値観というものに気づきました。社会が悪いんでも、夫が悪いんでもなくて、私自身がいい女らしくしたい、いいお母さんらしくしたい、社会の規範の中で、これがいいお母さんだよ、これがいい女だよというものに全部自分を縛ってしまっていることに気づきました。出産だったら、どういう出産が私にとつては産みやすいのかではなくて、先生におまかせして、いい産婦になることによつて安産させてもらいたい、と考えているんじゃないかということがじよじよに、じよじよに分かつてきました。

離島などに行つて古い出産というものを初めて調べたこと（そういう調査をフィールドワークといいます）が、私にとつてもものすごい収穫になりました。出産は産科のお医者さんなどの専門家におまかせしてたら何とかできるんじゃないかと思つてたのが、そうじゃない。私が産まなきゃどうにもならんじゃないかというのが、一番のショックでした。

出産を調べに行つた最初はまだまだ古いものつていうのは遅れているものだ、進歩つていうのはすごくいいものだと思つてました。ところが、そうじゃなくて、今、私たちを覆っている価値観を調べていくと、明治以後の近代西洋医学などが入つてきたその後にとり入れられた価値観であるとわかりました。医療だつたら医者という免許を持った人に自分の体をまかせなけ

ればいけないという、専門家に全ておまかせしなければならないという価値観は明治以後に出来たのです。教育だつて、昔は親が子どもを教育するということは当たり前だつたわけですから。体験を通して教育していききました。ところが、今は、親が、自分が教育するから学校に行かなくてもいいよと言つたら犯罪になります。義務教育ですから……。そして、学校に行くようになると、今度は「お母さんに聞くより先生に聞きなさい」と言うようになります。

先生たちも、あなたたちは素人だからわからなくて当たり前、教育のことはみな先生に聞いて下さいというふうな話をします。そして家族のあり方にさえも先生たちが結構口出しします。私はそれはおかしいと思います。けれども今はそれが当たり前です。たとえばうちの子どもは非常にアレルギー體質がひどく、風邪をひいたりするとすごい頭痛がします。そういう時には病院へ行つてひどい注射をもらうよりも、うちで安静にしておく方がずっといいわけですからアレルギー性の湿疹、すごい湿疹なんです、それについても、お医者さんへ行けば今は副腎皮質ホルモン剤をぬるしかないわけです。

いろんなお医者さんへ行きました。漢方療法も皆試しました。けれどもなかなかうまくいきませんでした。そういう親子の体験を抜きにして、学校を休むと、なぜ病院へ行かないのか？ お医者さんに風邪と診断されましたか？ 二日も休むと本当にお母さんがズル休みさせているんじゃないか、と先生に叱られました。中学校の高学年の時、長男は「お前汚いじゃないか、湿疹が出来てどうして病院へ行かないのだ」ということを体育の先生にすく言われました。そういうことで長男は友達から「お前、汚い」というふうな、本当にイジメにもあいました。高校に入ってから是一年の先生も、二年の先生も「病院へ行つたらもつと良くなりますよ」と

言つてくれました。そんなものはこちらがずっと玄人なわけです。子どもの体質と医療との関係は……。けれども、親の子どもに対する思いっていうものは、教育の場では全く抹殺されません。これは今の教育制度を支えている近代の明治以後の考え方で、医療だって、皆同じです。そういうことが、フィールドワークによつて見えてきたのです。

昔の出産っていうと、取り上げ婆さん、汚い、くーい、ジメジメという不潔なものか思つていませんでした。ところがそうじゃなくて、本当に産む側の知恵というのが非常にたくさんありました。しかしそこへ明治の教育を体現した人として、産婆さんが出てくるわけです。産婆さんのやり方は、結局出産についての専門家におまかせしなさいというやり方に変わつていくわけです。そこで出産のやり方が全部仰向けに寝て出産するように変わっていきます。

産む人にとって「お産とは何か」……それは「私とは何者か」の旅

産婆さんが出てくるまでは出産の専門家は産婦でした。ですから、それまでの出産は、本当にその人がやりやすいやり方で産んでいたわけです。そこでは立つたり、座ったり、いろんな恰好で産んでいます。寝ているお産というのは全然ありません。それが産婆さんに診てもらえという形になつてはじめて皆ズラーツと寝てお産するようになりました。これは産む人じゃなくて、産ませてあげる、産むことを助ける側にとつて非常に都合のいいお産姿勢なんです。

助産婦を教育する本の中に、出産する時のスタイルというのが、初めて出てきますのは、明治三八年、「実習産婆学」という本です。ところが、その前に書かれた産婆さんたちの本など

は全部、たとえば引き綱に掴まつてとか、座つてとか、布団にもたれてとかです。結局出産というのは体の中で異物になつた胎児を産みだすわけですから、あんまりきれいな言い方ではありませんが、排便と同じ行為なわけです。排便の時、寝てした方がやりやすいよつていう人は誰もいません。けれども助産についての専門家が出てくることによつて、みんな寝かせてわざわざきついお産をさせるようになったわけです。

自宅でその人に合つた方法で……だつたものが、今は産婦人科のお医者さんにとつて都合がよいように、産婦人科のお医者さんの所であおむけでお産をする……というふうにな非常に産婦から遠いものになつていくということが、産む側から出産を調べることによつて、いろいろ見えてきたわけです。

こういうことが見えてきたとき、私がなぜいい女になりたがつていたかということがよくやわかつてきました。今、新しい出産法として、ラマーズ法だとか、水中出産とか言うところと何となく頭からいやーな気がしますよね。若い学生でも結構いやがります。何か新しがりやの女が変なことをやると……これはよく言われることですけれども、そういう、私の心をなんているか縛っているものを、「文化」と言うんですが、そういう「文化」という価値観、皆が共有している価値観を破ろうとするといやーな顔をされるわけです。簡単な例を出すと、挨拶する時に、この間G7+1で外国からいっぱい要人が来しましたね。その時に、握手したり、抱き合ったりいろいろしてましたでしょ。でも日本人は会釈しますよね。ところがこの間、山崎隊長をはじめとした民間PKOのみなさんが帰つて来ましたよね。その時の一番最初の挨拶、テレビで見ました？ 私、ああいう挨拶非常に楽しくて見るんですが、その時に山崎さんが、警察の

幹部と最初に挨拶した時に抱き合つたんですね、こう抱き合つてバーツと背中たたいて……。私、あんな事やつてもらうのイヤですわね知らない人に（笑）。そう思いませんか（笑）。だから皆さんでも挨拶の時に、本当に女同士でも初めて挨拶する時、日本人同士だったら「こんにちは」つてしないで、さあーと寄つていつて、こんなにして急に抱きついたらゾツとするでしょう。それと同じように、あれは異文化だったらやれるんです。私たちと同じ文化を持つている者にとつては、ああいう挨拶はできません。あんな挨拶はギョツとします。

### 「心はわたし色」で生きる

それと同じようにラマーズ法をやるとか、水中出産をやるとか、私流にやるなんて言うたら、皆イヤーな女ヤナーと思うわけです。ところが新しい出産方法っていうのは、調べてみると、全部昔の取り上げ婆さんの時代の女性の体、産む人の体にとつて生理的に本当に産むという出産システムを中心にしたやり方と同じだったわけです。ラマーズ法だったら呼吸法をすることによつてリラックス、リラックスして、そしてお腹の赤ちゃんの酸素がうまく取り込めるようにする。……水中出産なんっていうのはすごく新しいことに聞こえるけれども、日本には昔は陣痛がなかなか進まない時にはお風呂に入るといふ知恵があつた。お風呂に入つたら体がリラックスするわけです。リラックスすれば体の生理作用は進んでいくわけです。反対にコワイよ、コワイよつて思つていたら、なかなか出産は進みません。そういう意味で、生理的に非常に合理的にできてたわけです。だが医者はいやがる。お医者さんは産婦が座つてしたら医者は跪い

てやらなきゃいけません。先ほどの産婦人科の御大ではありませんけれども、「患者は神様だなんて思わない」……ね、「医者には神様だ」っていうふうには自分は思っているわけです。だからこんなやつてられんと思うわけです。そういう状況が、本当にすごく見えてきたわけです。だからやつと私は自分の心を私の色で見ることができるようになりました。そういう意味で私自身というものから見ていけば、見えてくるものがいっぱいあります。

私がやっている（お産ネットワーク）も、それから（女が老いを豊かにする会）もそうですが、今までこの社会を支えて生きてきた人たちが、最後になつて生きていくのを心配しなくちゃいけないなんて、おかしいじゃないですかという気持ちがあるんです。皆でみてあげて、その後どうしようかと思ひ悩まなくつて、いきいきと生きられるんだつたらもつともつと生きたいと思うでしょう。出産のことだつてチクショーと思つても何も言わないで、お産は一回か二回だから黙つておこうと思ひましたが、それは本当じゃなかったわけです。「何か変だ」と思つたことにこだわり、具体的に行動したことによつて、出産とは何かの真髓がわかり、出産を本当に「自分が産む」という基準で考えることによつて、人生まで変わつてきたのです。

まず一步！ 行動に踏み出そうよ——道はなんとか開けてくるものだ。同じ心意気のあるもの同士、ネットワーキングすればもつと元気が湧いてくる。

私はいま、そんなふうに思っています。私の話の中で、何かお感じになつたことがおありでしたら、どうぞ、どんなことでも、どんどんとり込んで書いてください。（拍手）

（まとめ 窪田泰子）



## 新しい嶺へ第一歩を踏み出したい

赤松 宜子

お産。遠い昔の記憶である。吉村さんのお話を伺っているうちに、忘れていたあの日の感覚がまざまざと蘇つて来るのを覚えた。

長男の出産は昭和二十年八月。敗戦の二週間前であつた。夫は一月に召集を受けて出征中。私はU市の夫の実家で出産の日を迎えた。痛みの間隔の短くなつた正午ごろ、姑に沸かしてもらつたお風呂に入ると、うそのように痛みが薄らいだこと。間もなく空襲警報が出て、産婆さんが来られず氣を揉んだことなど、今思えば不安の多いお産であつたが、午後三時すぎ三・五キログラムの男の子が産ぶ声をあげた。

次男の出産は九州のK市で。世相もようやく落ち着いた昭和二十四年五月五日子どもの日であつた。痛みで早暁に目覚め、夫が呼びに行つてくれた産婆さんが間に合いかねるほどの安産であつた。母となつた歓びの記憶である。

二回ともごく自然のお産だっただけに、吉村さんの吸引分娩装置による苦痛や「ああ、女の子を産んでしまった。この子も将来こんな思いをするのか」という悲痛な叫びに驚き、その後「お産に出会う」の本を出版されるまでの心の軌跡、行動のお話に耳を傾けた。

吉村さんの転機は、ご主人の勧めで愛媛大学の聴講生になられた時に訪れたという。そこで藤岡教授という大先達を得られ、体験によつて疑問を持つておられた現在のお産の非合理性を追求しようと研究を始めら

れた。

私は吉村さんが自分はどう生きるべきかと常に問題意識を持って生きて来られたこと。それをご主人がよく理解して協力されたことをすばらしいと思い、羨しくも思っている。

振り返つて見ると、私も子どもに手がかからなくなった時期には「こうしていいのだろうか。何か生涯をかけて取り組むことを見つけないは」とあせつたり悩んだりしたことがあった。夫は「何でもやれよ」と寛大なところを見せてはいたが、本心は「何時も自分の方にだけ顔を向けていて欲しい」と思っているのだと私には感じちれた。今にして考えれば、吉村さんの言われたように、よい妻でありたいと自らをしばっていたのであろう。結局、夫と子どもに一直線。余暇には趣味を楽しんだがただそれだけのことで不完全燃焼の悔いが残る。

その子どもたちも巣立つて久しく、夫も逝つた。「お前が好きな勉強をする時間をやるよ」と天国からの声が聞こえるような気がする。いま私をしぼるものは何もない。

吉村さんのお話を聞くことによつて、はからずも母性の原点である自分のお産の記憶が蘇り、今までの生き方を振り返る機会を得た。

振り返り反省することから、今後の生き方の模索が始まる。しかし、私にどれだけの時間があるだろうか。兼好法師の声が聞こえる。「死期は序を待たず、死は前よりしも来らず、かねて後に迫れり、人皆死あることを知りて待つことしかも急ならざるに覚えずして来る」

ゆつくりしてはいられない。新しい嶺をしつかりと見定めて第一歩を踏み出さなくては。

## 脳細胞の浄めの水

井谷 五十鈴

この日まで、私はただ営々と生きて来たばかりで、まるで心のゆとりもなく過ごしていた気がする。やがてもう枯れつきてしまうのが目先に見えている身ながら、最後の試技と、勇気を振るい起こしへあこらゝの集いに参加してみても本当によかつたと感謝している。

講師のお話にすつかり感動し、その深い心の輝き、情熱に、憧れと羨望を覚えずにはいられなかつた。話の内容、書くことの意義、片時も眼をそらす暇もなく二時間を知らぬ間に終わつていた。

渡されたプリントの引用文の見事な文章、言葉に圧倒されて、私など、ついていかれるかしらと不安がのしかかつてきたけれど、講師の活き活きした雰囲気と、誰をも受け入れてくださる眼差しに、生きていることの自覚を促されて、今からでもという気持ちで湧いてきたのである。

友達と連れ立って来る約束をしていたのに、彼女は支障が出来て今回は出席を見合わせたので、次回には必ず引つ張つてでも一緒と思つてゐる。

今まで私は何の会合、グループにも、自分から進んで参加したことはなく、私には一生に一度の一大飛躍である。

心の中に清冽な若々しい、冷たい水を注ぎこまれ、萎縮して凝固している脳細胞が洗浄されてゆく快い爽やかな音が聞こえてくるような心地がしている。

## 第五回 自分史の伴走者として

山 本 典 子

私は一九五三年生まれ、四十歳になります。現在、株式会社オオモトという印刷会社の出版部の部長をしております。私どもの出版部は、スタート時、自費出版が主で「自費出版まつやま」という名前でしたが、平成四年、「人の森出版」と改めまして、出版事業も積極的に取り組むことになりました。

十年前、この仕事に就くまで私は経理を担当しておりました。本については「読むのが好き」という程度で、編集の仕事などということは一切考えていませんでした。

先代の社長の発案で、出版部の新設をということになった時、その部をまかせる人材がいません。とりあえず「おまえ、やれ」の一声で、私はその椅子に座ることになってしまったのです。

私はとても困りました。早速、依頼主が現れたのです。気の毒なお客様にはしたくありません。若葉マークの編集者としては、とりあえず二つの誓いをたてました。

一、心をこめる。



二、その人を知る。

そのささやかな誓いを胸に、私は編集者としての一步を踏み出しました。そんな私ですが、年を経ること、本の依頼が増えてきました。

## 自分史に出会って

みなさんは、自分史とは何だとお考えでしょうか。「生まれてから今日までのことを記録してあるもの」とよく言われますが、私は、「自分の一番こだわっていることについて書いてあるもので、その人物が見えてくる文章」が自分史であると考えています。そういった自分史に、何度か出会った頃、私は転機をむかえたのです。

それは「わたしの昭和」という本の編集でした。昭和が終わった時、数々のテレビの特別番組を見ていて、私は歴史に区切りをつける怖さを感じたのです。それに、自分史を通じて私が知ったことを、これからどうしていくのか。語り継ぐものは歴史の年表ではなく、私たちの生活の中にあるはずです。昭和を私たちの言葉で語り継ごうということで、一冊の本を企画したのです。この本は、企画から十一か月というスピードで多くの方の支持を得て出版されました。

「わたしの昭和」の出版の後、自己流で身につけたものに、いろいろな方からアドバイスをいただき、私の仕事は順調でした。仕事は増えてゆき、多忙な日々を送るようになりました。たった一人きりのスタートだった出版部は四人のスタッフを持つようになりました。

「わたしの昭和」への評価と、忙しい日々は、私に大切なものを見失わせました。多くの

投稿者の体験から生まれた本で、これは私への評価ではないはずなのに、マスコミにとりあげられたり……で、少し天狗になりかけていたのです。それに忙しいとやさしさを持つゆとりが持てないのです。傲慢な私がそこにいたのです。そんな自分に気づいた時、私はとても恥ずかしくなりました。実は、これが今回この講座の講師をお引き受けした理由です。

## やさしさで読みたい

忙しさの中で見失ったものは、私が編集の仕事を始めた時の二つの誓いでした。

一、心をこめる。

二、その人を知る。

はじめ、何の力も持たない私が立てた誓いは、いみじくも編集者として一番大切なものであったと思います。本をつくることへの姿勢を取り戻すため、私は新しいことにチャレンジして、自分を初心に返そうと思ったのです。

ところで、先日、ある友人の離婚に至るまでの文章を読みました。彼女の心のうめきを聞いた気がして、胸にせまるものがありました。人は悲しみを乗り越えるためや、自分のハードルをこえるために、書くということをします。悲しみを文章にするのはむずかしいのですが、しかし、その書かれたものを見て「自分の悲しみに酔っている」「あまい」と評する人もいます。文章の読み方、感じ方は、人それぞれで、強制できません。読み手は、時には残酷でまったく容赦がありません。それはあたりまえのことでしょうし、ことさらに責めるつもりはな

いのです。

読み方は確かに自由です。でも、私たちは、人の想いにそれほど鈍感でいいのでしょうか。この講座の第四回の講師、吉村典子先生が「反応する受け皿を用意していなければ、いい本は読み取れない」というお話をなさいました。受け入れる心（やさしさ）で読むと自分の気づかないものが見えてくるのです。人とは、みんなそれほど深く、おもしろい——これがこの仕事によつて私の得たものです。

## 辞書のおもしろさに気づく

仕事を通じて得たもう一つは、辞書をまめに引くようになったことです。

学校時代はそれほど辞書を引かなかった私ですが、編集の仕事に就いてみると、何はなくても辞書なしにそのその日一日をすごすことはできないのです。これは私だけでなく、つぎつぎに加わってくるスタッフとも、「昔、これだけ辞書を引いていたら、人生変わっていたかも……」などという会話をよく交わします。

ある女流作家が、愛読書は広辞苑だと話していましたが、辞書をまめに引くようになって、辞書をおもしろいと、感じるようになりました。

## 書き写して味わう

また、文章についての関心も一段と深まりました。

私は、ときめく文章に出会うとき、自分のノートに書き取ることになっています。一字一字書き写すという、傍目から見ればまどろっこしい作業に、文章を味わい直し、まるでコレクションを眺めるような、わくわくするような楽しさがあります。

そういう私は「電子ブック」の液晶画面になじめるかどうか、装丁を含んで「本」が好きな者としては、「時間よ止まれ」と祈りたい気分です。

## 子どもたちに伝える本をつくりたい

最後に、これからのことですが、私は今、一九九五年八月十五日（終戦から五十年）にむけて、「戦争を伝える本」を企画しています。「わたしの昭和」の企画の時、「私は書きたくても書く力がない」と言った人のいたこと、また、ナマの声を伝えていきたいということで、インタビューによつて編集することになりました。

なぜ、これほど戦争にこだわるのかとよく聞かれるのですが、あの戦争で失ったものを知つてしまうと、それを無視することができなくなつてしまうのです。私は私の子どもたちに伝えるために、戦争を伝える本をつくらうと考えています。



自分史を書く前に

構成表

(氏名)

- 一、テーマを決める
- 二、目的を決める——何を  
知ってほしいのか
- 三、誰に読んでほしいのか  
——伝えたい人は誰

構成をたてる

構成表をつくる。

- 一、おおざっぱに目次をつくる  
——全体の流れを考える  
——起承転結  
——ヤマ場、人生観、自分の  
のこだわりをどこへ
  - 二、目次(章)それぞれ  
の内容を簡条書に書く
  - 三、それぞれに用意する  
資料や写真をメモする  
文章は短くする。
- 主題と述語をあまり離すと意味が不明瞭になる。ひとつの文はできるだけ短くまとめる。

月 日	見出し(各章)	内 容(備考)
4 / 26	幼年(幼女)時代	○年○月生まれの私が物心のついたのは何歳頃だった。 出生地(現在どのように変わっている) 家族構成 記憶に残っていることなど。(子供の頃の写真)
5 / 10	生家の家業 (父の仕事)	僅かな田畑で農業をしていた。小作人で夜遅くまで働き、私も田植期や収穫期には学校を休んで手伝っていた。ご飯はムギが多く混じったもので白米のご飯は、年に一、二度だった。 こうした家庭で自分の役割など。(両親の写真)
5 / 24	小学校時代	一年生の担任の先生のこと。褒められたり、叱られた思い出。得意だった学科、また嫌いな科目。体が弱かったため、体操の時間が怖く学校を休んだことなど。(学校か友達と一緒の写真)
6 / 14	中学校時代 将来への夢 (希望)	この頃から将来への夢を持った。 軍人になりたい。先生になりたかったなど。 希望に対する家族や先生の理解。 淡い初恋の思い出など。(先生の写真か卒業写真)

句読点、段落を効果的に使う。

読点「、」——文章を読みやすく、文の意味を正しく理解してもらうために使う。

声に出して読んだとき、息が詰まらない

ほどの長さにする。

使い方により意味が変わってしまうので  
要注意。

句点「。」——文末に使う。

段落——文章のそれぞれのひと区切り。

文章の書きはじめにひとマスあけて、  
段落の区切りを表す。

☆強調したいとき

☆場面や時の変わったとき

☆書いている対象が変わったとき

☆ひとつの段落が長すぎるとき

### 文章を書くときのポイント

読み手のいることを忘れていないか

ひとりよがりの文章、自分にだけわかればよいの文章は  
読みにくいもの。

文章の品位はあまり落としたくない

人の悪口や、自分を卑屈に書きすぎるのは読みづらいもの。  
また、たとえ良いことでも、名前を出されたくない  
人もいる。うらみ、つらみや悪い思い出を文章にする時

## 自分の本ができるまで



は固有名詞はさげたい。  
できるだけ、仮名にするなどの配慮が必要。場合によつては著者の品位が問われる。

上手に書くことと知らない

文章を飾りすぎると、かえって書きたいことが率直に伝わらない。よくばらず、気取らず、自分の言葉で何を一番書きたいか考える。

辞書（国語辞典・漢和辞典など）を手近に置く  
すぐ引く習慣をもつ。

自分のまわりの人を登場させる

人とかかわりを書くことで、自分のことがよりわかりやすく表現できる。

「話言葉は自然に

いつも使っている言葉で書くと、あたたかみのある情感豊かな文章になる。

印刷（出版）依頼するとき（下図参照）

出版社との打ち合わせ／入稿まで

一、費用の確認

あらかじめ見積りをとる。見積りの目安として、

①判の大きさ ②総ページ数 ③組み方 ④部数

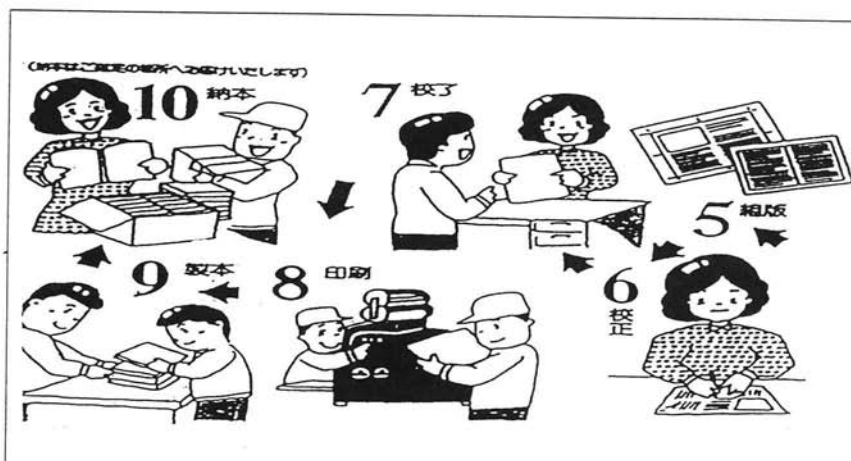
⑤写真・イラスト点数 ⑥カラー刷りの有無

他にも希望があるときは、それも提示する。

二、本ができるまでの工程を知る

●校正はいつごろ？ 完成はいつ？

三、ページ見本をつくってもらふ



## 原稿を整理する

### 校正

- こんなふうに直してほしい……という意思が伝わるように、赤ペンでわかりやすく書く。
- 原稿ときちんと照らしあわせる。
- その後、素読みをしておかしところがあれば直す。
- たくさん直しを入れた時は再校を出してもらおう頼む。希望や疑問なところは「こんなこと聞くと……」と、恥ずかしがらず、納得のいくまで相談しましょう。
- 担当者とは、よい人間関係を。

### 原稿用紙の使い方

- 原稿は原稿用紙に書きましょう。
- 原稿用紙は一定のもの（四百字詰、二百字詰）を使つて下さい。
- 読みやすい字で、鉛筆または黒・青ペンで書きましょう。
- 文字は一マスに一字ずつ、句読点や（ ） も一マスに書きます。
- ！？などの記号も一マスとります。……（リーダー）——（ダーシ）は二マス、とります。
- 原稿用紙には通し番号をつけましょう。

### 引用文を使う時の注意

- 資料や他の人の文章を自分の文章に引用する時は、著作権法により取り決めがあります。
- ① 引用した文や資料には著作者名・書名を明記します。
- ② 引用する文と自分の文の区別がつくように「「」」、段落をとる、などして明確にします。
- ③ 引用文は手直ししてはいけません。
- ④ 本文より引用文が長いのはいけません。

## 美しい人の美しい話に感動

森 幸子

人生を楽しんで送っている人は美しい。傍らで見ているだけで愉快である。「いきいき文章ゼミナール」の第五回の講師、山本典子さんはまさに「そういう人」で、「自分史の伴奏者として」というテーマで話をされた。五回シリーズの最後を飾るにふさわしいテーマと講師であつた。

絵（イラスト）や文をかくことが好きでかいているうち、誰かに見てもらいたいと思うようになる。書くだけで満足がいくなら日記で十分だが、手紙が好きというのは、私のメッセージを受け取つて、わかつてもらいたい願望の現れである。もつと夢がふくらんだ時、「私の本」自費出版に発展する。

「漫画で自分の生活を表現できるような環境を」と考えて漫画の印刷所を「夢工房」として若者たちに開放している人がある。大本夏子さん、愛称「なつちゃん」で、先の講師山本典子さんの母親である。母と娘と、目指す方向は微妙に異なりながら、母娘二代肝つ玉で、次々に新しい事業を始めている。

山本さんは昨年六月から「人の森」という情報誌を発行することになった。その「人の森」の第三号には「小さくて大きな決心」と題して「戦争を伝える本」を企画したことを書いている。人との出会いをゆつくりと喜び、そういう自分を紹介できるように努めるという決心が語られている。

五年前「わたしの昭和」という企画が、広い層から支持され一冊に編まれた。その「わたしの昭和」が新しい山本さんを作り、今また「戦争を伝える本」が山本さんと、人の森出版を大きく育てることを信じている私である。

〔講座を終わって〕

## 文章教室で見つけたもの

三浦 加奈代

あこら松山可能性教室の試みとして、平成五年四月から八月まで、五回シリーズで文章講座を企画した。もともとの発想は、「あこら」への寄稿原稿がうまく書けないとの一会員の訴えに始まったものだ。どうせ勉強するのなら、会員内々でなく一般人と一緒にやってみようではないか、思いは進み、素人による素人のための文章講座として「いきいき文章ゼミナール」と銘うつて誕生した。

講師は、へあこら松山代表、奥川さんの顔の広さがものを言つて、半プロ級の名士に登場いただけることになった。毎日出版文化賞を受賞された方あり、郷土の文芸協会代表の方、出版社のオーナー、また、東京で公民館活動をされている、自称生活エンジョイナー、というように、分野の異なる多彩な顔ぶれであった。出席者はせいぜい十名、多くて二十名とふんで、顔見知りの喫茶店の奥まった一隅を借りた。一時間を講話、コーヒープレイクをはさみながらあと一時間を質疑応答とした。「あこら」のバックナンバー本も受付前に並べることも忘れなかった。

私たち企画メンバー五名は、当日、暗中模索の不安な気持ちで一時間前に待機していた。ところが、前後して一、二名とお客様が現れ動転する。三十分もすると、受付は私一人ではまかない切れず列が出来る。釣銭の準備まではしていなかった初日であった。席が足りず、店内の椅子を動員させて、店主の不平をかってしまった。年輩の夫婦連れあり、男性も二、三人混じっているのは予想外だ。四十部用意したレジュメが不足し、後送する事態になってしまった。講話などほとんど聴けず、平身低頭、店員になり切っている自分に気づいたのは、盛会と確認できた後半だった。

二回目からは、早速会場をホテルの会議室へ移動したのは言うまでもない。「あこら」も思いのほか売れ、

特に「あなたもライターになれる」(一五三号)は束の間になくなつたのは驚きであつた。

四回目までは、人の交替はあつたが、だいたい初回数を保ち、五回目までの皆勤賞を七名の方に出したのだつた。

ただ最終回は、八月のお盆月や夏休みが災いしてか、あるいは打ち上げ親睦会での発言を遠慮してか、半数余りの出席者であつた。しかし各人の自己紹介を聴いていると、誰も文章を書くことへの思い入れは強く、この講座への未練を述べられた。量より質と私たち企画スタッフは満足したのだつた。

講師の話も充分聴けない不満はあつたが、それは後日のテープ起こしで補うことにして、共に学んだ共通の喜びは、労してこそ得られるものと得心した。

それとへあこらゝ会員ならではの友情の絆が強まつた思い出は、苦しくも嬉しいハプニングであつた。それは、一回目の受付の多忙さを見かね援助してくれた友との秘事である。充分気をつけていたつもりなのに、集計が合わない。千円の会費に一万円札を出され、釣銭がないのでもたついて、どうもその一万円札をもらい損ねたらしかつた。本代も絡んでの混雑で私のミスと惨めな気持ちになつた。当然自弁と秘めていたが、数日迷つた末、解決のヒントがあるかもしれぬと彼女に相談した。すると、細かいことは無視して、自分にも半分の弁償義務があるからと譲らず、とうとう折半したのだつた。もう金銭など問題ではない。その温かな思いやりに感激。

後日その二人の秘め事を、ある契機から、皆に明かす必要が生じた。会員たちは、黙つて処理したのが悪いので、ミスは起こつて当然、と言つてくれた。この全員一致の好意ある解釈に、一層身の縮む私であつた。情けない思いをしながらも、人間性豊かな友人が一人ひとり増えて行くのは労苦にまざる収穫であつた。

ハプニングは良いことばかりとはかぎらないが、そこから何かが生じる。それをプラス思考に持つていければ一つの成長となる。じつとして進歩はない。

今、人は自分の内面を見つめ、それを文章で表現してみたいと、思い立っているのではなからうか。偶然にも、その手伝いが今回少し出来た気がしている。

「あこら可能性教室」とはなんと味のあるネーミングであらう。

## その日の日記から…アトランダムに

芥川 光江

### ◎第二回 奥川睦先生

「私のこだわり——ことばに乗せられない思い、吐き出したいモヤモヤをどう表現するか」

自分のことだけで手一杯の私は、子どもが幼いことで、結果として逃げていたのではないだろうか。時間が終わりに近づくほどに会は盛り上がり、後にはなごり惜しさと、書きたい思いが残った。

メモを取る人、うなずく人、録音する人……。とりわけ裏が白地の広告紙で作ったノートで学ばれる老婦人は印象深く、「学びに年齢は関係ない」と身をもつて教わった思いがした。

東山さんの司会があまりにみことだったので、後になって「どうやって司会のこと勉強されたのですか」と尋ねる。

「あこら」スタッフの方は、「東山さんは、PTAも生協もされた。PTAを経験するとやっぱり何か違ってくるね」って話された。

東山さんは、この講座の司会のために「あこら」の本から、司会の言葉を拾ったり、講師の先生方の執筆された本や文を読み、勉強されたそうです。

ただでさえ何もなく手薄な「あこら松山」に西中さんの転勤が重なり、あの夏、メインテーブル上に並ぶ、奥川さん、三浦さん、東山さんの顔が人生経験も知識も及ばない姑の姿とタブって見えた。「姑に仕えるお



嫁さん」のような心細い自分を感じたのは、私だけだったのでしょうか。

### ◎第三回 菊池佐紀先生

「書くことの歓び」——文章修業のコツ

印象に残ったことは二つ

☆主婦が何かをしようと思つたら、家族に背を向けず、口では「あなた、あなた」と夫に対しても言えるぐらいの利発さがないと、長く何かを続けることはできない。

☆「名文を読み、辞書を読み、書き続けることが大切」

今まで書くことはつらいことだと信じていた私に、書くことの歓びを初めて語ってくださった方でした。

### ◎第四回 吉村典子先生

「書き方は生き方」

五歳になる娘が一歳の頃、毎日読んでもゲラゲラ笑つていた「やだもん」の絵本のページ。そのページがくるのをいつもワクワクしながら待つていた。息子も当時（三歳ぐらい）、絵本と同じセリフをしゃべつては幸せな顔をしていた。

今日、娘は何年ぶりかでその本を持って来て、「読んで」とせがむ。私の方がワクワクしながら、ページをめくる。

娘はクスリとも笑わず、どうしたのかな（？）とのぞきこむ私の顔を逆に不思議そうに見る。

あ！ 本との出会いって、こんなものなんですね。

私の心：

私の心は今、何に飢えているのか？

その人自身の中に、それを受け入れるものがなければ、私の目がそれに反応する受け皿を用意していなければいい本とは、出会えない。いい本も読みとれない。

自らが体験された病院出産への疑問から心の中の気がかりに目をむけ、「お産と出会う」を執筆。その中で、今の医療や社会規範（習慣）が全てではないことを裏付けし、お産ネットワーキング等実践面でも活躍中。

◎ “私の目” で見、問題意識を持つ。

◎ 自分のために自分の言葉で自分の文章を書く。各講師とも、机上の空論でなく実践に裏打ちされた、生き方が印象に残った文章ゼミナールでした。

（通信教育のスクーリングなどと重なって、残念ながら五回シリーズの三回だけしか出席できませんでした。）

\*\*\*\*\*

随想

## 今を生きるために

井谷 五十鈴

\*\*\*\*\*

星空の彼方から古代ギリシヤの哲人セネカが、「僅かな者しか行けなかつた年齢から初めて人生に取りかかるうとするのは、何と人間の可能性を忘れた愚劣なことではないか」と戒告しているのに、私は今、愚か者の最たる代表として短く限られた未来を夢見、今日さえも忘れてスタートしたばかりである。

生命のゴールは目前で、目的のゴールは遠く、走り始めたものの完走するのは覚つかなく、途中、力尽きて倒れ息絶える自分の姿が脳裏をかすめる。しかし走り始めて胸に受けるこの風の爽やかな感触、透明な空気の冷たい抵抗の快さは誰にも何物にも制約されず、思うままにやつと到達した境地にほかならない。

以前から書くことを考えてはいたけれど、消極的で居ずま

いを正さなければペンを持てず、いつかはと気持ちばかりを持ち続けてきたのである。

その扉を開けて中に入れば、もう二度と戻れない部屋の前まで来て、一ときを念願にかけ細い蝋燭の火をともし、燃えつきたいとの思いである。

バレエダンサーの、歌手の、一幕のステージにかけるすべて——会心作の生まれるまでの芸術家の精進と苦悩には程遠くても、残された時間を精一杯生きられたら、現在までの長く怠惰に過ごした月日のためにこの世に人として生まれた喜びを、幸せを、感謝と共に終わることができると信じている。人の一生を一線に描き、一八〇度の平角とすれば私に残された角度は一〇度未満というところであろうか。

私は私。かく生きる私の足掻きである。

\*\*\*\*\*

## 老春に燃える



檜垣 幸子

\*\*\*\*\*

こんなに雨がよく降る毎日だと、郵便受けに入っている絵手紙が、雨に渗んでいる日が多い。

豪雨被害や、低温・日照不足をもたらした今夏の気候、夜の蟬時雨が恋しい。新しい季節、秋への心や身体の準備もできないうちに秋がきたような毎日である。私の膠原病持ちの身体には、この気候が非常にこたえる。

私の病気、全身性エリトマトーデス「SLE」は、膠原病の一種で、原因は不明で、根本的な治療法がないため、厚生省の特定疾患（難病）に指定されている。関節や筋肉や胃臓、肺、心臓、神経まで、さまざまな臓器に炎症を起し、症状がいろいろと起る。昨年の暮れ、歌手の岸洋子さんがこの病気で亡くなられた。お手紙をいただいて励まされたことがあるので、大ショックであった。

私がこの全身性エリトマトーデスに患ったのは、三五歳。

それ以来、二七年間の間に、入院・退院の繰り返し、死の宣告、自殺も考え、家の中を整理し遺言も書いた。一番悲しかったことは、家族の者、夫（サラリーマン）子どもたち（当時七歳と十一歳）に迷惑をかけることであつた。こんな闘病生活を続けながら、今は、この上ない、生きがいある老春を謳歌している。いろいろのことを模索していった中で、十年前、絵手紙にめぐり会えたためである。「動かなければ出会えない」とは日本絵手紙協会長、絵手紙作家 小池邦夫先生の語録の一つであるが、まさに人生にとって出会いほど大切なものはない。すばらしい出会いによって、その人のそれからの人生が左右されるものだ。

今、私が夢中になっている絵手紙とは、風景、人物、花、静物などの身の回りのものをモデルに描いた絵に、あいさつの文や時々のおいを短い文章で添えた手作りののがきであ

る。「へたでいい、へたでいい」という小池邦夫先生のことばであるが、手紙はやはり、大切なのは、文章であり、その文章に味をつけるのは、日常の自分の心の有りようである。私の絵手紙を受け取ってくださる方が喜んで下さるように、思いやりのある絵手紙をかくために、私自身の根を太らさなくてはいいけない。

それには、いかに毎日毎日を大切に、生き生きと、感動

## “仮面の家”を読んで

\*\*\*\*\*

胸が詰まつて息苦しく、何度も中断して呼吸を調えなければ先へ読み進むことができなかった。

特に父親と母親による息子殺害場面は、読むに忍びない苦しさであった。心臓の一突きが失敗してベッドから転げ落ちもみ合う父親と息子。その息子の頭めがけて力いっぱいモデルガンを振り下ろす母親。弱りきった声で「許してくれ、悪かった。お願いだから殺さないでくれ」と哀願するその声に

をもつて生活してられる方たちの本物の心に響くお話を聴くことが大切なことか、それでこの文章講座を受講し、毎回、私の心を充たし、根を太らせてもらえたことを、本当に感謝している。

いよいよ五回終了となつてしまつた。何ともかとも惜しまれる講座終了である。次なるステップに上がることができる機会を心から心から希んでいます。



宮浦 暢子

\*\*\*\*\*

「今じゃ、もう遅いんだよ」と言いながらとどめを刺す父親。同じ年頃の子を持つ親として、それでも我が子を殺さなければならぬ心情はいかばかりであつたろう。

そしてこの世のものとは思われぬ凄まじい形相のふた親の姿に、いまわの際で息子は何を思つたであろう。

愛媛新聞の追跡ルポ“仮面の家”を毎回胸のふさがる思いで読ませてもらった。

我が家にも大学生と高校生の二人の息子がいる。自我の確立がなされる過程において、いくたびもの親子の葛藤があり修羅場があった。いや、現在もまだ終わつたわけではない。特に長男の場合その度合いがより激しいようだ。

女優の浜美枝さんはカギを閉めた息子のドアを三度も蹴破つたそうだ。我が家も三か所カギに穴があいている。腹だちまぎれに息子があけたものだ。

人は一人ひとり持つて生まれた資質がある。それが育つ環境によつて微妙に影響を受け、それぞれの性格が形成されてゆく。

今度の事件の最大の悲劇は、よい資質に恵まれていたであろう子どもを、頭も人格も人並み優れた両親が最悪の事態に至らしめたこと。もちろん家庭環境だけでなく社会状況もおおいに影響を及ぼしたではあるうが。

もし息子の「許してくれ」の哀願に最後のとどめを刺せず、思いとどまつていたとしたら、息子は病院のベッドで、警察で取調べを受けているであろう両親の絶体絶命の悲壮な決意に、きつと何かを感じたはずである……と思うのは私の願望でありすぎるだろうか。少なくとも最悪の事態は避けえたのではないかと悔やまれてならない。

この世に生を受けて二十と三年、可能性をいっぱい秘めた前途ある若き命は、彼の誕生を一番喜んだであろうその人によつて閉じられねばならなかつたのである。余りにも哀れで残念。

有り余る才を抱きてその一つも

生かせず逝きし子の傷ましき

この手もて吾子を殺めし悲しみの

癒ゆる日もなく我老い行かむ

父親が獄中で詠んだ歌である。彼が生涯背負わなければならぬ十字架はあまりにも重い。

\*\*\*\*\*

## 雨の午後

朝から雨が降り続いている。雨の日の外出はなかなか決心がつかない。ぐずぐずしているうちに昼になり、午後から思い切つて出かけることにした。

駅へと続く道のぬかるみを避けながら、重い足取りで歩く。後ろから華やいだ男女の声が聞こえてきた。近くの高校の生徒が一本の傘に寄り添い、すばやく追い越していった。その青い水玉模様の傘が通り過ぎたとき、ふと小学校の貸傘を思い出した。

ナイロン製の傘がドツと出回つてきた時代ではあつたが、小学校の貸傘はまだ番傘だつた。その傘も皆にいきわたるだけの数はなかつた。「からかさ」と呼ぶのが正しいのかも知れないが、私のふるさとは番傘と言つた。

各学年一クラスずつの小さな小学校。木造の古ぼけた校舎は歩くと軋み、廊下のあちらこちらで雨漏りがした。



占部 愛子

\*\*\*\*\*

急に降り出した雨に担任の先生から渡された番傘は、一年生の子供の手にはかなり重く感じられた。力を込めて広げると、パリパリツと乾いた音がして、傘のまわりに油の匂いがたちこめた。雨の中へ歩き出すと、パラパラとにぎやかな音があたりいちめんに広がった。一年生の初め、新品だつた番傘も時にはチャンバラの道具となり、月日と共に紙が破けて竹の骨だけの残骸となつていった。時代と共に消えてしまつた番傘をふいに思い出したのは、近所の同級生たちと、一本の番傘をさして帰つたときの、小さな手と手のぬくもりが心によみがえつたからかもしれない。

激しかった雨足は、駅に着いた頃には、ポツリ、ポツリと、やさしい春の雨に変わつてきた。

\*\*\*\*\*

## 「書く」と「生きる」と



高井 百合子

\*\*\*\*\*

私の手許に、黄ばんだ「あこら」の一冊がある。どこで、いつ誰から買ったのか思い出せない。

もう十年ほど前に私が、同じ精神病の仲間たちと障害者運動をしていたときに、そのつながりで二、三回参加した「女たちの会」で買ったように考えられる。しかし数年前から老病者の私は障害者運動から遠ざかり、へあこらの松山支部があることなど知らず、そのまま時おり手にして見るだけであつた。

ある夜ふと買った新聞に「いきいき文章講座」の記事があり、素人が素人のためにという文句に、気安さを感じて受講した。

「こ縁」があつたと思う。今度は、はつきりへあこらを知った。フェミニズムを目指しているへあこらは、疲れきつた私を癒す薬草の役目を果たし、一生咲かすことのなかつ

た私の花（才能）を咲かすことをもたらす根つこの栄養素になることを信じ、今ここにしっかりと己が心と、文字に記し留め、実現するための約束しよう。

意志、体力ともに弱い病者の私が、今回五度も受講できたのは、いきいきのびのびとフェミニズムに洗練された講師の方々の、人間性の豊かな魅力に引かれたからだ。芯までは無理で表面だけ、シャワーを浴びた後のようにすつきりした、あの爽快な気持ちは忘れられない。瞬間だけで終わらせるのは口惜しい。賢明な人に接する幸せを与えられるから、私は五度享受できた。

斎藤千代様の家の飼犬のモルは、死ぬ前に薬草をさがし、かじつて少し生きたそうだ。私もそうしようと「あこら」の薬草をかじる。よく効きそうな希望を抱き始めたころ、折角の希望を打ち砕くことがあつた。



十年前から、姉弟のように、友人のように、夫婦のまねごとのような、同じ精神病者の十歳年下のTと、茶飲み友達結婚宣言し、支えあつてくらしていた五六歳の彼が心筋梗塞で入院した。五年前、白血病で国立がんセンターに十か月入院したTが、奇跡的に癒り、石材工の仕事に、せつせと毎日出勤するほど元気になり、私も昨年夏、手がしびれ、足もよちよちしか歩けず、杖を買つて歩いて歩いたのも、今年の春にはなおり、文芸講座にも参加したりと、のどかな気持ちでくらしていたときだった。十年前にもTは心筋梗塞で職場で倒れ、三度目の大病である。今回もやつぱり「おろおろして、心配しなくてもいい」と言つて毎日病院へ行くだけであつた。

私のよくなつた足が、悪くなりそうなので休んでいた灸とハリにかかる。私の持病は、強い不眠症と、操うつ病、うつ状態になつた。なけなしのお金で、彼の入院生活に有用なものや、花飾りなど買い、うつを晴らし、氣を取り直してまた病院へ行つた。

そんな落ち込んでいた八月に入つて、文芸同人誌の「アミーゴ」三十号記念号が刊行され、菊池佐紀様を送つて下さつた。

同誌には一年前からぼつぼつと数回例会に参加していたが、今回初めて原稿をのせてもらった。私の文は「清貧の思想の根源を問う」と短歌十首で、何か所か氣になる文章はあつたが、学び勉強した成果は確かに出ていた。

それで私のうつ気分が少し晴れた。

今回の講座で、「書く」ことは「生きること」と学んだが、解放され、歓喜して、いきいきのびのび生きすることは障害者には難しい。

フェミニズムを学ぼうと私は思う。疲れきつた私がやつと見つけた、フェミニズムという名の薬草の生えたへあごら〜という真実の砦。ここを足がかりにし、老病貧の人生に負けないで、いきいき生き続けよう。

私はいきいきのびのび生きすることは、いきいきのびやかに死んでいけることと信じる。

\*\*\*\*\*

## 少なからず項垂れて<sup>うなだ</sup>



夏井 紀明

\*\*\*\*\*

耳年増ならぬ、知識だけ先走りの中年男の目をひいたのが、古本屋の婦人公論八月号。目次に「男たちの更年期障害」とある。女性の閉経に対応して、男性ホルモンの総称であるアンドロゲンが休止するという意味で、アンドロポーズという用語でもって、アメリカのマスコミでも話題になつていくとか。女性の場合に比べれば、生理的変化としては徐々に現れるものだから、放つておけばよいというのがこれまでの定説であつた。ところが二十世紀末に及んで、放つておけない様相を示すに至つたのは、単に身体、生理的な問題に止まらなくなつたからである。

変化が激しく、刺激の強い現代社会は心身を虐げる。人間関係、特に、強くなつた女性との関係は、「男であること」を難しくする。これまでは、虚勢を張つて押し隠して来たが、耐え切れなくなつた男たちが病的症状を示し始めた。勃起不

能を筆頭に、疲労、性欲減退、うつ症、筋肉関節の痛み、凝り、イライラ、不安感、夜間に特に多い発汗、肌の乾燥！全く女性の場合と同じような項目が並び、何と、のぼせまである。自分も、かなりの部分、身に覚えあり。前回も、朝夕現象を喪失した嘆きを書いたばかりである。

もつとも、フェミニストに言わせれば、この「男の病」は、「立たなければ男ではない」と思い込んでいる「男という病」こそが、根本的原因ということになるのだろう。しかし、それが、本当に後天的な文化としての思い込みに過ぎないのだろうか。

たまたま、同じ雑誌に、「ホルモンが脳の男女差をつくる」(新井康充)という記事があり、これまたたまたま、その内容を詳しく著した同じ著者の「ここまでわかつた！ 女の脳・男の脳」(講談社)を見つけて読んでみた。「男らしさ、

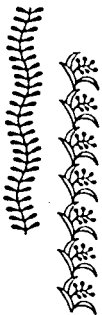
女らしさは出生後の社会的・文化的なインプットによつて増幅されていくと考えられるが、脳は本来両性的な面をもつており、胎児の時代の男性ホルモンの洗礼を受けるかどうかによつて方向づけがなされる」のだそう。脳の機能のハードの段階で既に性差があり、ソフト面では補い切れない性役割の違いが、狭義の生殖機能以外にもあるのが、科学的な事実らしい（のです）。「その方向づけが不十分であつたり、生まれてからのインプットとその方向づけとのずれが大きかつたりすると、こころの葛藤が起きる原因になると考えられる」そう。

そうすると、インプットに偏りがあつて、文化的に男らしい男になり損ねているオラは、知的野次馬を気取つて、あこら牧場の柵の外から、ジャジャ馬をおだてるようなきれいことを言つてるけど、本音は、馬尻（ケツ）とたわし（へヤー）にしか興味の無い、最も原始的な痴的雄馬でしかないのか！（ソウジャー！）

弱気になつて来た分だけ素直になつたか、焦つたか、勧められるままに、お見合いの真似ことをしてみた。お互い様なんだろうが、我が事は柵に上げて、ポタ餅を期待しているせいか、いまひとつピンと来ない感じで終わつてしま

つた。美味しい相手なのに、こちらの食欲が減退しているからか。ホルモン療法が女性の更年期障害に有効なのと同様に、男性の場合も心身共に著しい効果をもたらすそう。やはり、副作用の心配があるとなると、臆病を隠して、薬の厄介にまでは……と強がつてしまふが、興味は結構ある。

チンけな一物に振り回されるとは、何たる情けないことか！とは言いつてもいい。己の存在の証しをそこに集中しがちな平凡な男の哀れさ、（若い女性のシンデレラコンプレックスは夢のある上昇志向だが）下向きな中年男のチングラリコンプレックスの哀しさを笑わば笑え。独身（チン）で衰え行くのは（財津一郎式に）「サビシイ！ ワカッテ、チヨードイ！」



\*\*\*\*\*

## 私の“庭”に花が咲いた

吉沢菊枝

\*\*\*\*\*

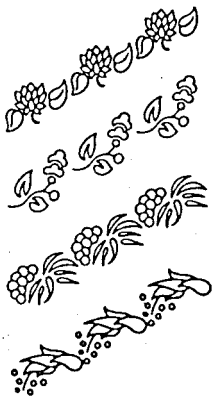
櫻草やすみれ、連翹まで、私の小さな庭で短い春を謳歌しています。

もう植える場所もないのに、花店の前に立つと、わけもなく欲しくなってしまう。そして「美しく」に反して、乱雑な、花の集合となってしまうのです。

新聞の片隅に、ちいさくのせられていたへあこらへのお誘い、私はすぐに好奇心をあおられていました。私の小さな庭のように小さな私の脳、もう全く余地がないはずなのに、吸いこまれるように、こじんまりとしたその会合に、出席していました。数か月を過ごして。

英語の勉強にと、加えて頂いたこの会合。英語もさることながら、湧き上がる泉のように、豊富な体験と知識を、惜しげもなくわけて下さるO様のお話は全く興味が盡きません。

私にとりまして、また、何回目かの思春期が訪れたように思います。新しいアーモンドの花を（花言葉・希望）見つけた、と、感じています。



## 北京会議NGOフォーラムの登録受付

八月一日からニューヨークの国連本部NGO部門で受付の予定でしたが、大幅に遅れ、八月末日までは登録用紙を送れないという連絡が入りました。登録用紙等、入手しだい希望の方にはご連絡します。先着順で締切りということはありませんので、ご心配なく。(受付は北京ではありません)

## 北京会議の速報、お知らせします

東アジア女性会議と(あこら)主催の「北京会議への道」の打ち合わせのため、斎藤千代さんが、中村道子さん、松井やよりさんたちと、八月八日、北京に向かいました。北京会議の詳細も中華婦女聯合会の方々に伺ってくる予定です。詳細は次号に掲載します。

## 東アジア女性会議入場券は九月一日発売

東京一日仏会館でのシンポジウム(10月23日)が二千元、江ノ島での本会議と分科会が三日間通し(10月20日-22日)で三千元です。希望者が殺到していますので、お申し込みはお早めに。なお、各部会の討論に参加した方に優先権があります。

◆入金先——郵便振替口座「東アジア女性フォーラム」口座番号00240・7・75261

◆テーマ別責任者は、次のとおり。参加希望者はご連絡を・開発における女性(ODA、企業進出、債務、労働)

関口悦子(0423・71・8337)

・女性と政治(政治参加、市民運動・法律)

中西珠子(03・3815・2446)

・女性の人権(女性への暴力・人身売買・買売春・家族・性と生殖・女性と健康・マイノリティー)

伊従直子(03・3809・2581)

・女性と文化(教育・表現)

船橋邦子(0473・88・8899)

・女性と戦争(戦争責任・従軍慰安婦・核・基地・PKO)  
斎藤千代(03・3354・3941)

## 横浜で女性史を学びませんか

九月から六回にわたって開かれる「旭女性史研究会」の女性史講座は、「近世時代の横浜と日本史の女性の生き方を比較し、生活文化を学習すること」がテーマです。日本女性の歴史、グローバルな視点での女性問題への関心、地域女性史研究などをするため、基本学習、史跡めぐりなど「焦らずマイペース」をモットーとしています。

・一回目（9月7日）宿場町の飯盛女から横浜遊郭の歴史  
・二回目（9月14日）古文書にみる江戸期神奈川の女性  
・三回目（10月5日）江戸期女性のライフ・サイクル―女大  
学に示される像

・四回目（10月12日）江戸期女性文化の広がり  
1 心学・儒学と女性  
・五回目（11月2日）江戸期女性文化の広がり

### 2 国学と女性

・六回目（11月11日）学級生交流反省会  
・料金は全回参加で千五百円。場所は県立公文書館中会議室。  
・時間は毎月第一、第二水曜午後一時半～四時。  
・問い合わせ：申し込み、安本 ㊦045-366-1405。

## 政治家はほんとうにお金が必要なの？

今度の「政治改革四法」が施行されるようになりますと、政党には「助成金」が入り、国会議員に支出される国税は、一人あたり九千万を超えることになります。政治家であることは、そんなにお金が必要なのでしょうか。

去年の選挙で落選されたとぐち玉子さんを「支える会」から、次のような会計報告が届きました。とぐちさんを「支える会」の会費は年額三千円です。

収 入	支 出
前期繰越	501,000
会費 (326名)	360,000
バザー売上	31,409
資料代	36,183
雑収入	249,771
収入計	471,954
	49,144
	69,081
	1,768,542
	483,722

## 声を思いを届けよう！

昨年七月、多くの希望を託して自民党の一党支配に終止符を打ちましたが、その後、どの政権も、有権者の意向を全く聴くこともなく、次々に各種の「改革」を打ち出しています。「それをされては困る」「何々をしてほしい」等々、率直な思いを各党の責任者に直訴するほか、手だては、ないようです。

電話とFAX番号をお知らせします。ご利用ください。

党名	党首	電話	(03)	FAX	(03)	選挙区
社会党	村山富市	3508-7292	3508-3502	大分1区		
自民党	河野洋平	3508-7503	3581-1532	神奈川5区		
新生党	羽田 孜	3508-7324	3502-5080	長野2区		
公明党	石田幸四郎	3508-7188	3502-5187	愛知6区		
さきがけ	武村正義	3508-7038	3508-5626	滋 賀		
民社党	米沢 隆	3508-7637	3502-5096	宮崎1区		
改革連合	星川保松	3508-8305	3581-6098	山 形		
自由党	柿沢弘治	3508-7118	3502-5023	東京6区		
日本新党	細川護熙	3508-7040	3503-2889	熊本1区		
共産党	不破哲三	3508-7286	3508-7286	東京6区		
二院クラブ	青島幸男	3508-8629	5512-2641	比 例 区		
臨選レール	田 英夫	3508-8229	3593-6269	東 京		
青 雲	小澤鋭仁	3508-7641	3591-2735	山 梨		

## BOC出版部で編集者を募集中

「あこら」の版元BOC出版部では、業務急増のため、契約社員と社員を募集中です。

### A 契約社員

編集熟練者、在宅勤務可、職歴・作品名、希望の報酬をお知らせください。

### B 社員

新卒・就職浪人も歓迎。  
どんな仕事にも好奇心でチャレンジできる方。

A・Bとも、〈あこら〉の主旨を理解し賛同する方。どちらも千字以内の自己紹介文を添えて

160 東京都新宿区新宿1-9-4-303  
BOC出版部へお送りください。

# 個として生きる

## 深井美和

(愛媛新聞文化部記者)

男女雇用機会均等法が施行されてまる八年。地方の新聞社にも毎年のように女性が採用されるようになった（入社して三年を過ぎた私も、均等法と売り手市場という好条件に恵まれ、まがりなりにも新聞人のはしくれとして仕事をさせてもらった）。

とはいえ、女性はまだまだ少数派。入ってくる女性は毎年四、五人、うち記者採用は一、二人で、女性を代表する選ばれた（？）一人として、それなりの期待を背負っていることも事実。現に先に入社した先輩たちが、結婚、出産等のハードルを越えてなおも頑張り続けていることは、私たちの励みになっている。

ところで今年、四国の地方紙四社の青年婦人部が開いた女性集会では、「地方紙と女性」がテーマになった。青年婦人部は新聞社の労働組合に属し、女性全員と三十歳未満の男性が部員。育児休業法、男女の昇進差別といった女性に関わる問題はこの青年婦人部が中心になって改善をめざしている。その女性集会で初めて知ったのだが、女性が毎年入社しているのは愛媛のみ、四国の他社は採用ゼロの年があったり、ある時期からばったり採用しなくなっているというところだった。均等法以降、あたり前に男女が同じ条件で同じように働いている、という思い込みがあったため、私には驚きだった（バブル崩壊後の女性の就職難によっても、均等法が建前に過ぎなかったことが明らかになったのだが）。そして全社で十人にも満たない少数派の彼女たちが、女性ということでの働きにくさを感じていることを聞いた。

例えば、仕事とは関係のない服装とかプライベートルなことでも思わぬうわさをたてられたり、育児のために休むと男性にしわよせがいついていやがられる、とか「夜討ち朝駆け」といっても取材相手が若い男性の場合、控えなければならぬとか。

マスコミというのは実に本音と建前とが両極端なのだ。新聞紙上では、女性の社会進出を奨



励したり、子供の出生率の低下の危機感から働く女性が子供を産み、育て易い環境にしていこうことの重要性を訴えたりしている。が、そういつている当の会社が逆に遅れている部分が多い。長いあいだ男社会だったため、頭のなかの柔軟性が失われているのだらう――。

こうした女性集会は全国規模でも開かれている。そこでは、全国紙の女性たちがリーダーとなつて話し合いを進めている。全国紙では、数少ない女性として頑張っていた時代は過ぎ、もはや女性は一勢力となりつつある。しかし、女性が増えたら増えたでまた違った悩みがでてきているという。以前は多少つらいことがあつても、後に続く女性たちのためにと、ふんばつてきた部分があつた。ところが最近入社してくる女性たちは、それぞれの価値観で、自分のために働いている。結婚してすぐにやめたり、仕事よりも私生活を大事にしたり（それは個々人の自由なのだが）、組合活動に熱心でなく、男性たちの間に「やはり女性はあるににならない」という意識が生まれていることを危惧している、ということだった。

人数が多かれ少なかれ、どの職場でも女性たちの悩みはつきないようだ。その原因は、一人の女性の行動や生き方がその人の個性でなく、〈女性〉という性に属する人々全体の代表としてみられがちだ、とういことにあるのだらう。

男性だっているんな価値観をもつて、いろんな働き方を選択している。しかし、その人がさうだからといって「だから男性はだめだ」ということにはならない。一方、女性は個人としての顔をなかなかもたせてくれないのだ。学生であつたり仕事を続けているあいだは「○○さん」と呼ばれていた人が、結婚すると「××さんの奥さん」になり、子供が生まれると「△△ちゃんのお母さん」になる。もうしばらくの間、この状態は続くのだらう。働きにくさを感じながらも、個人の顔をもつたまま、したたかに、自然体で生きていきたいものだ。

intolerance.

(25年たった今も、アメリカのゲイは狭量な社会の中にいる)と述べている。ストーンウォールは N.Y. 市のバーのあった場所の名。そこに集まっていた常連客と警官が衝突 (street clash) したのが、25年前の6月28日で、“a gay civil rights movement” のキッカケになったらしい。次のページの写真についた説明文は、…… in most states gay couples have won the right to adopt children (ほとんどの州でゲイ・カップルは養子を迎える権利を獲得した) とあり、養子をまん中にして絵本を読んでいるカップルの一人は次のように語る。“People seemed to be letting me know, in code, that they suspected and it was O. k. I don't have much tolerance left for that kind of tolerance,” (人々は、目つきや仕草で、疑っているという信号を送ってくる。それはいいんだ。でも、こういう度量にがまんならないんだよ)

それにしても、アカデミー賞もとったこの話題作、心にせまる説得力とドラマとしての盛りあがりに今一つ迫力を欠く。何故だろう。佐藤健志氏 (6/9朝日新聞「エイズの主人公の内面描かず」) が指摘するように、彼自身が闘ったのは、自分の弁護を引き受けてもらえる有能な弁護士を見つけ出して説得し、承諾させるまでで、そこで主人公は入れ替わり、彼はひたすら受身に生きる。

逆に黒人弁護士 (ディンゼル・ワシントン) は、この裁判を引き受けることで「お前もゲイなんだろう」と色目を使われ激怒したり、そのことで内なる差別意識と向き合ったり、つき合い (ゲイ・パーティーなどの) を通して、生命のいとおしさ、おごそかさを実感するなど、魅力的で、主題の分散を言われても仕方がない。

オリエンテーションは入学説明会など日常的に使われている語に同じ。オリエント文化から来っていて、動詞で使う orient は、文化・知識の方角へ眼を開かせ、興味を持たせたり志向させることを言う。アメリカはsuccessororiented society (成功志向社会) だ、のように。

## セクシュアル・オリエンテーション (Sexual Orientation)

奥川 睦

日本国憲法第14条「すべての国民は法の下に平等であつて、人種・信条・性別・社会的身分又は門地により、政治的・経済的又は社会的関係において、差別されない」

映画「フィラデルフィア」を見ていて、この条文を思い出していた。アメリカの憲法 (constitution) は少し違うかもしれないが、常識的に考え大差は無いと思われる。“…jobs, races, sex, …” の後に “sexual orientation (性的嗜好)” が加えられ、それらによつて「差別されることはない」というセリフが、裁判の場面で使われているのを聞いて、ある種の感慨を覚えずにはいられなかった。

かつて「告発の行方」でレイプが扱われ、周りではやしたてた男たちを告訴に踏み切り、有罪を勝ち取るというこの映画が、現実の裁判を先取りするような形でセンセーションを巻き起こした。残念ながら「フィラデルフィア」にそれ程のインパクトがあるとは思えないが、主人公 (トム・ハンクス) がエイズを従容として受け入れ、そのことで自分を悔やんだり卑下したり、罪の意識を持ったりしない点で、淡々としていて、従来の描き方と違うのは事実だ。家族も友人も皆良い人たちで、彼の生き方を認め支え、偏見など持っていそうもない。だから彼も職場の不当解雇に正面から異を唱えられたのではあろう。

『蜘蛛女のキス』や『トーチソング・トリロジー』にみられるように、これまでだったら、sexual orientation (性的嗜好) が一般と違えば、それだけで違和感や軋轢を生み、人間関係を歪めてしまう大変な状況が前提としてあり、そこで消費される膨大なエネルギーが悲劇を産まずにはいられなかった。

「異性のかわりに同性を愛して何が悪い」と、自分たちの sexual orientation 受容を、社会にむかつて要求してきた現実の運動 (a gay civil rights movement) が、映画の中で、セリフとして組み込まれたということかもしれない。

6/27号の “Time” は、ジェーン・オースティンの小説のタイトル “Pride And Prejudice” 「高慢と偏見」をそのまま使った記事のサブタイトルで

Times have changed 25 years after Stonewall, but gays in America still face

## けわしい“医師道”を踏みしめて

砂山 恵子さん

この人のエネルギーはどこから出てくるのだろう。文芸同人誌「アミーゴ」の月例会で「北欧の文学」の話を頼まれ、ストリンドベリー、ラーゲルレーフ、イブセン、ムンクなどの話をさせてもらった時のこと、一人の女性が遅刻ぎみに参加され、活発に質問。西条（松山まで車で片道二時間）から来られたというし、おなかも大きい。熱心な人もいるものと感心したが、それが砂山さんだった。

聞けば、医師会の集まりがあつたのを無理をして、ということだし、フェミニズムに興味があるというのでお送りした「あごら」。お礼状が届いた時にはもうすでに「あごら」に入会したとの一行。さらに、ピツシリの経歴や自己紹介にしばしボー然、そしてタジタジ。

おしゃべりタイプの私とは正反対

に、いくら書いても書くほうなら苦にならないという彼女には、当欄としては変則ながら、彼女自身に彼女を語ってもらうことにした。

「働きすぎにブレーキを！」の流れに逆行する忙しさの中で、セルフヘルプ（摂食障害等）のグループ活動へも動き始めている彼女の、それでいておつとりとした語り口がそのままお届けできないのは残念ではあるが……。

\*

いのしし生まれの、おひつじ座のB型は、目的のためならつっぱしるといえます。

生まれは香川県ですが、五歳のとき伯父の家を継ぐべく西条（愛媛県）に養女に出されました。岡山大学医学部に進学し、今の連れ合いとそこで出会い、卒業と同時に結婚、私は耳鼻咽喉科、連れ合いは内科へ入局しました。

ところが、すぐに妊娠し、世間知らずの二十四歳の女（の子）には次から次へと現実の厳しさがおそってきました。それまでに味わったつもりでいた苦勞や厳しさとは別の種類のものでした。

大病院は日雇いです。産休制度などありません。出産前に退職をいい渡され、雇用を約束してくれていた病院にも復帰できぬまま、結局、出産後二年間はあんなにあこがれていた医師業をとざされた状態にありました。

しかも、連れ合いの母と同居して、気持ちのあせりから、またマタニティーブルーも重なり心身症になりました。やっと再開できた医師業ですが、夜八時九時まで働いたり、夜の当直はざら。しかも子連れで、無認可保育所に入れ、この男性中心社会の中で、女性<sup>が</sup>が医師として働く苦しさを痛感しま

した。でも休んだら、産休で解雇されたのと同じ目にあいます。結局、郷里に帰り、開業して二年余りたちました。ずっと生理も不順でしたが、できたらもう一人産みたいと思い、幸い今年一月に次女をさずかり、今年三月末からは、その子を保育所に預け、また耳鼻科医として産後復帰しています。長

女はもう小学校五年生になります。今は、パソコン通信がおもしろいですね。あと、文芸同人誌に歴史小説を書いたりしています。合唱、音楽、心理学の本と関心は広いです。いつか、いつしよに娘と合唱をしたいです。漫画（コミック）も好き、水泳もずっとやっています。



# ペルーの女は立ち上がったⅣ

## 第二章 資本主義経済の中で 1

キヤロル アンドレアス  
訳 サンデイ サカモト

### 英国と北米の経済侵略と支配

一八二一年、ペルーはついにスペインから独立した。そして奴隷制は形式的には廃止されたが、英国が北米に政治的に負けたことにより、英国はますます必要にせまられて、ペルーの人々と資源を収奪し続けた。英国は、スペイン人が金や銀を奪い取ったのと同様に、肥料、ゴムなどを奪い取った。さらに、肉、布、麦などを作らせ、新しく発見された鉱物などと一緒に、輸出させていた。家族から離れて賃金労働を探す多くの男たちは、一時的季節労働者として、山岳地帯のコミュニティから沿岸やジャングルに移住した。これが生活のパターンになった。女たちは、コミュニティの生活が続け、家で自給自足の農業を続けたが、つねに封建地主の虐待にあう恐れがあつた。コミュニティの土地の外に迷い出た家畜を殺したりする地主と、女

たちは闘わなければならなかった。地主は先住民女性が盗みを働いたと非難したり、地主に命令された無給の仕事をするのが遅いと夫たちを罰した。妻たちは夫や息子たちが服従しなかった時にも虐待され、罰せられた。彼女たちは、地主が所有している土地や動物の世話をして働く家族のために、いつでも食物をもっていけるように準備していた。

ペルー共和国が、英国によって支配された頃、宣教師や他の侵略者はジャングルを植民地化するのに成功した。しかし、スペイン探検家や宣教師は、先住民によってアマゾン地帯から追い出された。それにもかかわらず、メステイソー、英国人、他の商人や侵略者はついにこの地帯に足場を固めることができた。彼らは、労働と交換に先住民に作物を与えたが、それが足りなくなると、奴隷労働をさせるために村を襲い、道路建設や公共事業などのために先住民をかり集めた。また、ジャングルの盗人である豪商は、



女や子どもたちに、虐待の限りをつくした。後に若い女たちは、ブラジルの侵入から国を守るためにアマゾンにやってきた企業家やペルー兵に、騙されたり、無理に売春婦にさせられたりした。また軍事居留地近くの先住民コミュニティの女性の減少によって、先住民の男たちは、相手を探し求めて他の村を襲い始めた。その結果、熱帯地方の特徴であつた男女の大きな関係(注7)は、男性支配の強制的結婚や集団レイプにとつてかわつてしまつた。

## 地主と手を結んだ北米人

英国によるペルー経済支配は、ペルーがチリとの戦争に負けた後、十九世紀末頃に終わりを告げた。チリは、英国にとつて硝酸塩の収奪の場所でもあつたペルーの南沿岸地方を支配しはじめた。その頃から、ペルー経済は、北米のビジネスと経済利益に支配されるようになった。北米人は、同時に封建的な地主と手を結び、またペルーの企業家は、特に沿岸ぞいに資本主義的企業を建設し始めた。結果的には一九五〇年代には、北米人は企業家と手を組み、輸出の可能性を高めるために、地主に産業にも投資するよう、また農業を近代化するよう勧めた。経済支配が重要な位置を占める一方、北米企業による直接の投資は、可能である限り継続された。外国の信用貸しに依存することにより、ペルー人の生活は多国籍企業、銀行や他の財政組織の手中に置かれた。(注8)

ペルーにおける北米の存在は、階級分裂を加速化し、地方からの大量移民を生み出した。またそれによつて、リマにおける経済力と政治権力の集中化がおこり、仕事やコミュニティにお



いて、女と男はさらに分断されていった。資本主義的賃金労働は、利益に結びつかない農業生産を監督する立場に、女たちを追いやった。一方、男たちは、賃金労働をするために必要な技術を得ることを奨励された。砂糖、綿、コーヒ、ウール、材木、魚、動物の皮やコカインとともに、鉱産物は再び基本的な輸出品になった。またその頃、機械やアメリカの米や麦の余剰生産物の輸入は、ペルーコミュニティに重荷を残した。お金のない者にとつて、コミュニティでできた自給用の穀物は生活のために必要であつたが、資本主義的市場の競争によつて、しだいにそれらは作られなくなつていった。ペルーの歴史上初めて、じゃがいもが輸出されたのは、以前に比べて生産性があがつたからではなく、地元で売るより高い利益があげられたためであつた。後に続く章では、北米によるペルー経済支配が、山岳地帯、セルバ（ジャングル）、沿岸地方などの地区で、どのように女性に影響を与えたかを述べる。

### ゲリラ活動の先頭に立ったアンデスの女たち

比較的空气が乾燥していて涼しい山岳地帯は、自給用耕作、放牧、採集に適していると思われる。ジャングルは、蒸し暑く、一般的に、狩、漁業、耕作、伐採、野菜の生産に適している。また、ジャングルは大きな石油資源を含むと思われている。沿岸はかんがい用水がある時を除いて乾いているが、機械化された農業地や工業地として使われたり、漁業の中心地になつていた。観光地や手工芸品の生産地は国中に存在する。

ペルーの資本家にとつて山岳地帯の女性たちは、労働力提供者であり、家庭用食物生産者兼

提供者であるわけだが、かつて歴史上類を見ないほど、ひどく搾取されている。しかし、彼女たちは、企業家によつて土地を没収された土地所有者で、以前自分たちの監督者だった人々から、一部だが独立した。インディオはスペイン人が打ち倒されて以来、封建的な地主からの土地の返還を要求してきたが、それが可能になったのは一九六〇年代のゲリラ運動にアンドスの女性が参加した結果として、政府による農地改革がなされたからであつた。

六百人の農民が虐殺された後、政府と男たちが交渉していたが、その会合でも、民衆闘争の中で、この頃の女性たちの非妥協的態度が、ありありと思ひ出される。「最後に発言したのも、全ての協定を否定したのも、警視総督の事務所の床に討論の間ずっと座り続けていたのも、女性たちであつた。彼女たちは弁護士や農民のリーダー以上に民衆を代表していた。彼女たちは民衆であり、妥協することのない先住民であつた。死ぬ覚悟もできていて、農民リーダーたちは彼女たちを動かすことさえできなかった。」(注9)

### 資本の収奪の中で

ゴム、毛皮製品、コーヒー、ココア、コカインから利益を得たいと望む人たちのために、先住民の女と男たちは石油産業の発展やジャングルの破壊に順応するよう期待されていた(注10)。自然環境破壊に加えて、植民地開拓者に対する負債は増え続けた。また先住民は、労働者、召使い、売春婦などとして働くことを強要され、奴隷のように扱われ、先住民の貧困はさらに悪化した。

最近では、アメリカ政府は主にペルーの中でもジャングルに投資を集中させている。領土問題で論争が続いているアマゾン地域では、先住民は、土地が肥沃で輸送に便利な川沿いの場所からさらに奥へと追いやられてきた。植民地開拓者や外国投資家から先住民の領土を「守ろう」というスローガンが、教会と政府の改良主義者によつて定期的に推進されてきたが、このようなやり方は侵略者の目的をおおい隠し、征服を早めるだけであつた。先住民グループは、多国籍企業による侵略を防ぐためのネットワークを結成したが、政府の弾圧はますますひどくなつていった。と同時に、女たちは、ジャングル以外に尊厳を持つて生活できる場所がないと知つていたので、先住民の文化を取り戻し、自分たちの経済生活を強めるために、組織運動に参加するよう先住民に呼びかけた。

### 労働運動でも果敢にたたかった女たち

町や太平洋沿岸では、女性の賃金労働は資本家によつて搾取されてきた。それと同時に、常に男性の支配下に置かれた。リマでは女性も子どもも繊維産業初の賃金労働者となつた。後に、女たちは漁業加工工場などでの仕事に採用されたが、男たちのほとんどは女性を雇うのに反対した。初期の労働闘争で、よりよい条件が取り入れられたり、工場が機械化された後には、女たちの代わりに男たちが雇われた。早くから労働力として採用された女たちは、労働時間の短縮を勝ちとるために、また工業による自然環境破壊を防ぐために始められた労働運動で、男と一緒に闘つて死んだ。このように激しく闘つたにもかかわらず、後には、彼女たちは季節労働

者や契約労働者として、資本の利益に奉仕する以外なくなつた。しかし今日では、彼女たちは、ますます闘争的になり、自分たちの労働組織や組合連合の女性代表を認めるよう要求し始めている。

地域的経済的格差が、女たちを政治的にも文化的にも分裂させる原因になつてゐるが、メステイソーと現地女性との交流が女性運動の中で始まつてゐる。町の女たちは仕事場での女性の権利を主張し、地方では、特に男たちが積極的に教育や技術を支持してきたが、それから除外されていた女たちは、このような教育や技術に対して疑問を表明していた。また彼女たちは、伝統的な医療や耕作や栄養についての知識を取り戻し始めていた。町から来た女性たちは、これを助けたり、組織化を支援したりしていた。地理的経済的な壁は、組織の統一の邪魔になつてゐるとはいえ、ペルーの辺境でさえも、女たちは、各地で女性の闘いが起こつてゐることに気づきはじめてゐる。

革命運動において、女性の闘争精神が育まれることは、永久的なパワーベース（勢力の基礎）を築くための推進力になり得る。実際、社会システムによつて引き起こされてきた矛盾の中で、女性たちは長い間女性がこのような闘争精神を高めていく必要性を感じてきたことは確かだ。長い間、資本主義経済は、女性と子どもの無償の家事労働から利益をこうむつてきた。ここには封建的な関係が生きてゐる。しかし、家族に安定した生活を保証することすらできなかった。その一方で、女や子どもたちを労働予備軍として搾取したことにより、家庭関係も破壊された。資本主義のもとで女と男の利害関係が再定義されたため、仕事場や家庭で女と男の新しい矛盾した関係が作りだされ、政府は、社会援助プログラムを使つてその関係に介入せざるを得ない。

くなっている。

## キリスト教教会も社会変革を抑圧

経済が外国資本の利益に依存しているような「隷属資本主義国」（半封建主義、新植民地主義とよばれるペルーのような国）では、政府は失業やインフレのような状況に影響された家族にわずかな公共援助をする余裕さえ持っていない。それで、教会や他の個人的な機関が外国からのお金を使い、状況を改善しようとする。この本の後の章に書かれているが、ペルーの教会リーダーは、たいてい、政府と一緒に、個人的犠牲、貞節、寛大、自己否定、勤勉、誠実、禁酒を守ることによって、経済的困難な状況を打開するように女性たちを説得してきた。教会もまた消費と貯蓄を勧めた。カトリックとプロテスタントの教会は、「共産主義の暴君」の先駆者として協力するコミュニティの努力を恐れるよう女たちに教えこんできた。そして政治に干渉した場合は女たちを罰した。このように女たちが、秩序、安定、家庭を守るために政治運動に参加するのは素晴らしいことだと奨励されたが、社会変革を求めて草の根組織をつくり、搾取に抵抗しようとすれば弾圧されるのが常であつた。

教会の中でも、進歩的な人たちは、貧しい人々が苦しむことは「不正」そのものであることを認めた。さらに、彼らは貧困は神の意志によつてつくられたものであるという保守的な考えを否定し、政府への要求を出している組織の人々と団結して苦しみを和らげようとした。しかし教会は、貧困の原因を何一つ認めなかった。例えば、家族制度において、女性に期待されて

いることは、まずなによりも先に、夫や子どもの必要を満たし、家庭の平和をみださず、暴力にも耐えるということであるとし、このような家族制度が、女性の苦しさの原因の一つになっているということに、教会は疑問を抱くことさえなかった。

### 「開発」の名による抑圧も

個人的抵抗によって、女性が教会や政府に完全に従属させられるのだけは免れてきた。女性も、結婚後も所有権を持ち続けた（注11）。また先住民のカップルは試験的結婚（結婚する前に試験的に同棲する）に誇りをもち続け実行した。しかし、そのような伝統でさえも現代式「改良」政策のもとで一斉に攻撃された。このように、改良主義者たちは、コミュニティの生活の中で、女性が伝統的強さをもっているということを知らずに、女性の地位と力を弱めてきたのだ。

一九五〇年代に、ペルー、ピスコ地方で「開発プロジェクト」を推し進めた北米人のメモには、「発展」という名のもとにコミュニティの土地を奪われることに抵抗する女性の話が次のように記されている。

問題の結論はすでに明らかに出ていた。牧夫頭（羊飼いのリーダー）たちは何か他のことについて討論をし始めるところだった。ところが、戸口に隠れていたオヘダの妻（オヘダよりずっと年とって見えた）が部屋の中へ飛び込み、ロドリゲスとピラーに対して、金切り声

で痛烈な非難の言葉をあびせた。彼女は、彼らを立つたまま他人を搾取する怠け者の直立したペニス（性的な意味も含めて威張りくさった男）だといひ放ち、ロドリゲスが彼女の耕された土地を処分したいと望むなら彼女の土地にキスをしなければならぬと言った。彼のよ  
うなペニス（男）が、彼女の土地に近づける方法は、彼女が死んだ時以外にはないと言った。  
ここまでくると、ロドリゲスは黙つていられず、そんなふうには話すなと言った。事件は彼女  
ではなくて、夫に關係があるのだから、牧夫頭である自分が彼女にあんなふうには呼ばれな  
ければならない理由はないと言った。彼女は出ていくことを拒否し、荒々しく喋り続けた。マ  
リオとリカルディは、夫に彼女を追い出すよう頼んだが、彼女は動かなかった。そこでリカ  
ルディはタデオに頼んだが、彼も彼女を動かさなかった。リカルディは席を立ち、床に座り  
込んでゐる彼女を手で押したが、動くのを拒否し、ずっと喋り続けた。リカルディはむこう  
ずねで、まだ熱弁をふるつてゐる彼女を押し、彼女はついに立ち上がった。そこでリカルデ  
イとエンリケが彼女を戸口まで歩かせ、門のそとに追い出した。彼女は一、二分の間外で叫  
んでいた。（注12）

この事件を記録した人は、間違ひなく、これは非常に「おもしろい（可愛い）」話だと思つたにちがひない。公的なプロジェクトの記録には、男たちとは違つて女たちは土地を出なかつたということ以外には、この「開発」が女性の生活にどのような影響を及ぼしたか述べられていない。一九六〇年代に、フェミニスト運動がヨーロッパ、北米に生まれて以来、ペルーの資

リーダーシップ、個人事業などの様々な分野で、女性に技術援助、経済援助をしたりして、女性が必要としていることに目が注がれた。しかし、経済状況全体と女性の二重の役割を考えると、そのようなかけ離れた努力は、結局、援助を受けとった者の間で競争を作りだしただけで、大多数の女性の必要を満たすことはなかった。

〔注〕

7 人類学者によつて挿入句的に述べられたただだが、この地域の住民によれば、このようなことはまだジャングルで起こっているという。

8 ペルーにおける米国の投資の仕方と今世紀におけるペルー政府の移り変わりとペルーと米国の関係は、次の書物において論議されている。Virgilio Roel, *Esquema de la evolucion economica*; Anibal Quijano, *Nationalism and Capitalism in Peru*; and William Bollinger, *"The Bourgeois Revolution in Peru: A Conception of Peruvian History,"* pp.18-56

9 この引用は: hugo Neira, *Los Andes: Tierra o muerte* (Madrid: Editorial ZYC, 1968) これは出版されなかったが、Christina Giron によつて LLO の研究論文 "Participacion social y politica de la mujer rural en un contexto de reforma agraria" に引用された。

10 本題からはずれるが、重要な問題なのでここで述べておきたい。問題は、アマゾンのジャングルが破壊されることによつて、世界でもっとも重要な酸素の源泉の一つを失うという危険である。

11 ハウハの近くにあるワンカインディオの村アタウラで、私はコミュニテイの男性と結婚



したが、そこでは、結婚前に少なくとも九か月間の同棲に成功したという証明をしなくてはならないことになっていた。義理の母は、私と同じ年で、お互いに成人した子どもをもっていたが、伝統と考えられている結婚前の同棲などの手順を監督するためにリマからやつて来た。彼女は、私たちのアタウラでの結婚によって、コミュニティの土地の使用権を復活させることができるようにと願っていた。

12 Florence Babb, *Men and Women in Vicos, Peru: A Case of Unequal Development*, p.13.

この論文は、農業改革が女性に与えた影響を理解するのに貴重な資料である。それは、ピコスプロジェクトがその後の政府のプログラムのモデルになったからだ。ピコスのプロジェクトについての公的記録は：Henry Dobyns, Paul Dougherty, and Harold Lasswells, eds., *Peasants, Power and Applied Social Change: Vicos as a Model* (Beverly Hills, Calif.: Sage Publications, 1971). なお引用文中に使われた名前は本名ではない。





## フィリピン元「従軍慰安婦」

### ロラ・ロシータさんを迎えて

貴重な証言を聴く会を持った。事前の学習会もしないまま、それでも四十名以上の人が参加した。

ひどく寒い夜だった。ロラは薄着のまま「大丈夫、大丈夫」と言い、ネリアは松山コミュニティセンターのびかびかに磨きあげられた床や広々としたフロアに「東京でもこんなきれいな会場で講演したことはない」と驚いた。豪華な会場と、静かな聴衆。予想どおりの展開と言えた。

「ロラに、ぜひ一言でも感想を語ってください。日本人の反応を、彼女は聞きたいはずです」

ロラの号泣、ロラの叫びに何かを返さなくては、と私は呼びかけた。

沈黙だけが流れた。

日本人たちの頑固な沈黙を、ロラはどう見ただろう。彼女がさらけ出した傷、今なお血が溢れ続ける傷こそ、私たちが負わせたものではないか。

「あなたたちの責任ではありません。私はあなたたちみんなを愛しています」と語るロラの言葉に、絞り出してでも彼女に言葉を返し、彼女を抱擁しなければならなかったのは、私たちではないか。

三年前にやはり同じ風景があった。日本の大量の木材輸入のために、根こそぎ森を奪われるサラワクの先住民女性がこの町で話をしたときもそうだった。大勢の、沈黙を続ける聴衆の前で、彼女は泣き崩れた。

「恐怖」ではなかったか。彼女たちを恐れさせたのは、どんなに自分を開いて見せても、黙って座り続ける日本人の存在そのものではなかったか。

それは金のために心など捨てた化け物、戦争という弁解の下で少女を強姦し続けた化け物の、真正正銘の同輩だった。この集会を「それぞれが重い課題を背負って家路に着いた」とくくる気は私にはない。

問われたのは私たち一人一人だ。答えることは義務であるし、発せられない言葉は、ないのと同じだ。突きつけられることを嫌い、背を向けてきた「日本人性」を、またこの集会でも確認した思いだ。

命がけのメッセージを受ける方法さえ持つていない私たちに、「戦争は嫌だ」などと言う資格はない。（深見 史）

## フィリピンの友の話を聞く

フィリピンから来日の元「従軍慰安婦」ロシータさんの話は、半分義務のような逃げられない思いにかりたてられ、出かけた。スウェーデンからの友人を迎える直前のあわただしい時期、スケジュールに追われ、ダウン気味。会場をまちがえ右往左往の末の参加だった。



同伴のネリア・サンチョは、一九八九年四月、斎藤千代さんへのインヴィテーション・レター（招待状）一つだけを手がかりに急拠出かけたマニラでの世界女性会議の議長。翌年、イザベラ（北ルソン）の貧しい農民女性のためのソーイング・プロジェクトのための資金（沢山の人から寄せられた基金）を届けにメトロ・マニラを再訪した際、個人的にもお世話になった友人。

彼女はその時、新しいプロ

ジェクト（アジア女性人権評議会）を始めたところだと話していた。以来三年余、国連の人権委員会も調査に乗り出したというこの問題も、底辺で、彼女たちがしつかり支え、不断の励ましと地道な活動があつたのは間違いない。

日本軍に拘束され、昼間は炊事・洗濯・掃除、夜はお定まりの性的奴隷にさせられたというロシータさんの話の中で、特に私の印象に強く残ったことがある。やつとのことで、命からがら日本軍から逃れ、途中出会ってホツとした同国人に、あろうことが、同じ悲惨をなめさせられたという話に及んだ時、彼女のこらえていた感情がどつと堰を切った。それは彼女の背負った悲しみの深さだった。

女であることを、労働や快楽の道具としてしか把え得ない男たちの意識は、時代をこえ、国境をこえ、いまなお変わりが得ていない気がする。

戦争という非人間的な空間で、それが鮮明にえぐり出されただけだ、とも言えそうだ。「あなたの罪ではない。悪いのは、あなたに大きな傷を与えた相手であつて、あなたではない」そうくり返し、支え、励まし続けるネリアの言葉にも、力がこもる。「彼女たちの自己回復の勇気を引き出せない限り、真のシスターフッドにはならない」とも……。

（奥川 睦）

（写真提供 毎日新聞記者 亀田さん）

## 議員ウオッチ・シンポジウム

有権者という言葉がある。だが、選挙の時、一票を投じることを権利として行うという意識が、どれくらい私たちの中に根づいているだろう。納税者としての意識も、日常的な生活レベルで希薄な気がする。

権利として投票し選んだ自分たちの代表なら、選んだ人（政治家）を見守り続ける義務があるはずだし、義務として払ったタックス（税）の使い道をウオッチし、注文を出す権利もあるはずだ。日本人はそのどちらにも他処（よそ）こと他人（ひと）ことで関心が薄い。米国で voter（投票者・有権者）や taxpayer（納税者）ということばが常に生活の中でくり返されるのに比べると雲泥の差だ。

そういう私たちだから、汚職議員や汚職構造を放つておくことに何の痛痒（いたさ）も感じていない。そんなもどかしさを抱えている私だから、議員ウオッチ・シンポには興味をそそられた。

「政治をわかりやすく身近なものにできないか」という姿勢も「腐敗防止や選挙制度改革に加え、有権者意識をテーマに、政治と報道のあり方を話し合う」という意図も果たせていたように思う。いくつか印象に残ったことをアト・ランダムに記す。

まず秋葉忠利氏（社会党衆議院議員・政策グループ「太陽」代表）の発言から。

氏は二十年ほど米国の大学で数学を教え、その間十年、地方新聞の記者を広島・長崎に招き、現地体験を帰国後レポートしてもらったというプロジェクトの窓口をされた。私はケンタッキーで受けとった日本の新聞でアキバ・プロジェクトを知り、感激した覚えがある。

☆“conflict of interest”（利害の衝突）——「裁判官が自らを裁く」といったような、対立する利害を一人の人間または一つの組織に持ち込むこと。「自己中心」は生物として不可避免と認めた上で、なるべく公平を期したい、との趣旨で使われる言葉。日本はすべてがルーズ、ガイドラインも必要では？

☆NHKが予算案を自ら立案する。これ正に「利害の衝突」、民放などが予算をプールしてやるとか、何か良い案を考えるべきと通信委員会に提案したが、問題のありようすら理解されなかった。

☆湾岸戦争開始から一週間、学生三十人とニュース・ソースを調べた。フジ・TBS・日本テレビ等も八対一、十四対七と米側の情報が多かったが、NHKは実に十四対一だった。これに対し「物理的にそうかもしれないが、私としては偏向したという感じはしていない」というのが通信委員会での会長発言で、マスコミに報道されることもほとんどないほどの

軽い扱いだつた。

☆「第八次選挙改革審議会」二十七人の委員のうち七人が大手新聞社等の代表。記者は自分の社のボスが名を連ねる審議会の答申を正面から判断できるのか？

次に出雲市長 岩国哲人氏の発言から。氏は八九年市長就任までは、国際舞台で活躍した証券マン。小沢政治の参謀、知恵袋と言われる平野貞夫氏（新生党参院議員）や二世議員で弁護士谷垣禎一氏（自民党衆院議員）にはない斬新な切り口が感じられた。

☆「四年に一回、一年をかけて大さわざをして」と輕蔑していたアメリカ大統領選挙を最近見直している。大統領候補者は全米をかけめぐり選挙民と対話する。その対話を通じ国民を教育（政治へひきずりこむ）し、有権者は大統領を造っていく。日本に欠けているのはこれかもしれない。

☆今、日本にあるのは政治家報道であつて、政治報道ではない（秋葉氏も権力ゲームの視点でしかインタビューに来てくれないとボヤいていた）。

☆政治家の大事な発言が、土・日だつたり国会の外だつたり、深夜記者会見だつたりするのはおかしい。政治記者もそれに合わせ夜行性になつてゐるのでは。「夜十一時以後は、いくら右往左往しても記事にはしません」のようなルールづくりが必要だ（そうなれば少しは、普通の生活ペースに近い発想

になるかも。「由らしむべし、知らしむべからず」から一歩も出ていない）。

☆二世議員の禁止法制化はムリとしても四割は多すぎる。相続税に相当する世襲税をとればいい。親とは別の選挙区から出るとかの枠・制限はつけるべきだろう。

☆鉄の三角形といわれる政・官・財に第四の勢力、報道界が加わり、今や鉄の四角形になつてゐる。悪くて、かしこくて、金を持つていて、弁が立つ。よほど腹をすててかからないと歯が立つわけがない。（その通り。溜飲を下げたと言いたいところだが、いかんせん現実の壁は厚すぎる。でも自民党が権力の座を追われてから、ゲーム感覚っぽい視点で言えは何でもありで、何が起るかわからない面白さはある。昨年六月ストックホルムのホテルで宮沢総理退任を知り、帰国直後の解散・総選挙で細川内閣成立。短命と言われた羽田さんも二か月で総辞職。あまりキリキリせず、ノンビリながめていようか、が今の私の心境である）。

（奥川 睦）





## 織田が浜裁判と、今治市に於ける

### 行政手続条例を求める運動

去る六月二十六日、高松高等裁判所は、瀬戸内最後の長浜といわれた「織田が浜」の埋め立てに反対して訴えた地元住民に訴訟「棄却」の申し渡しをしました。瀬戸内海の「保全」をうたつた「瀬戸内法」に違反しないという理由です。

織田が浜は美しい海でした。一・五キロも続く白砂の長浜、海水がその砂の一粒一粒を洗い、水際の美しさは格別でした。夏も冬も、この海辺が、どんなにたくさんの人々の心と体をやし、子どもたちを育んできたことでしょう。戦争中にここの人たちが亀に「お神酒」を飲ませて海に放つたのは、たった五十年前のことなのです。海は魚の宝庫でもありました。

判決の日、原告住民は上告しましたが、この浜の三分の一を埋め立てる港湾計画は、来年三月には完成します。私たちは、こんなとり返しつけないことを、いつまでくり返すの

でしょうか。

私たち、〈今治町づくりネットワーク〉は、昨年から、「行政手続条例」を求める直接請求の運動を展開しました。それは学校給食の問題や、この織田が浜の埋め立ての問題を考えるにつけ、「計画段階」から市民を行政に参加させてほしいという願いから生まれたものでした。

市民が織田が浜の埋め立て計画を知つたのは、一九八三年二月でした。それも、市が愛媛県に対して「港湾計画推進」の陳情をした時です。地元住民がこの計画の説明を受けたのは、さらに八か月後でした。この時すでに、市は、調査費等の名目で予算を支出し、全ての青写真、筋書きは、すっかり出来上がっていたのでした。

何かおかしい。そこに暮らし、浜と共に生きてきた人たちの声は、全てが決まった後、形式的にしか聞かれない。この海を一番愛し、知っている人たちが、この都市計画決定に参加できないのはおかしい、との思いでした。

埋め立て工事の音がするたびに「体が痛む」という浜の老人の痛みや悔しさは、自らのことを、自ら決定することができなかつた、ふみにじられた人々の「人権」の叫びでもあります。

条例制定の直接請求が議会に提出権をもつために必要な署名数は、市の有権者数の五〇分の一。その一、八四一名をはるかに超える八、一一九名（有効数七、八八八名）の署名簿を、限られた一か月で集めて提出したのは十一月二十日のことでした。

十一月十二日、欧米諸国では早くから成立している「行政手続法」が、国会で公布されました。私たちが請求した「条例案」が、行政の行う公共工事などを計画段階から公開し、意見を言う機会が与えられることを盛り込んだのに対して、「法」では、この部分は削られ、行政処分や、行政指導の事前手続についての規定のみに終わっています。そして、私たちの請願も、一月十七日、市議会で否決されました。

しかし、今や我が国も、従来の「起こってしまつてから」の「事後救済」の考え方から、これから起ころうとしている「事前救済」の制度をもつ時代に入りました。

一度失つてしまえばとり戻せないたくさんのが、私たちの生活の中にあります。かけがえない私たちの街の自然や、それに関わる人々の暮らし、想い、それらは「事前救済」の制度をもつことでしか守られないでしょう。

私たちは、子どもたちが生きてゆくこの町に、住民自治を根づかせるために、行政手続条例の制定を、これからも求めてゆくつもりです。そのことが、地方分権時代を迎える私たちの課題でもあると思っています。（阿部悦子）

=ランドマークブックス=

時々刻々の歴史の変動に機敏に対応し、新鮮な構想を提供するΛ道しるべVブックス。いま新党への決断の時、戦後政治の終焉を告げる永田町に、市民・民衆の関の声が響きわたる。A5判 ¥700（全シリーズ）

貧しい「経済大国」を撃つ  
いま・何を—新党への決断の時  
人間に光あれ、再び—

降旗節雄  
暉峻淑子  
小森龍邦

BOC出版部

〒160東京都新宿区新宿1-9-4-303

看護婦



と



(16)

## 川嶋哲子さん (1)

増田れい子

武蔵野線の東浦和駅からタクシーでおよそ十分、見沼たんぼの近くに埼玉協同病院がある。所番地は川口市木曾呂一三一七、田園と住宅地にかこまれた地域総合病院で、診療科目は十八、病棟は七つ、三百五十床。医師、技士、看護婦などオールスタッフ四百六十人、うち看護婦（士）は二百三十七人、夜間外来も含め一日外来患者は千人をこえる。保育所も併設されていて、もひとつ特徴をいうと、ここは埼玉の医療生協センター病院になっている。

川嶋哲子さんは、看護婦歴十四年、四人の子のいる大ヴェテラン。年齢は三十六歳。いまの職場は外科病棟主任。

嵐のような日を送ってきた。嵐はいまも続いている。吹きやみそもない嵐である。しかし、川嶋さんは、逃げない。

細っそりしていて、口数は少ないが、これまでいくつもの厚いかべをこえてきた。どうしたら患者に信頼してもらえるか、どうしたら子どもを産み育てることと仕事の両立をはかれるか、どうしたら母親失格にならないですか、どうしたら地域の仕事に参加できるか……。



そのために身を削り、心をくだいてきた。見かけは細っそりしているが、内側はハガネのようだ。

彼女がかけ抜けてきたこの十四年を見るとき、私は、トライアスロンを勝ち抜いた選手を重ねあわせてしまふ。同時に、彼女をはじめ看護婦にかかつている途方もない加重について、あらためて怒りを感じないではいられない。

川嶋さんの四番目の子はたまたま女児だった。まだ一歳半の赤ちゃんだが、その子を抱きしめて「看護婦の道を歩ませるか」と問われたらよろこんで……と、即答する自信はありません」という。もちろん、こどもの進路はこどもの選択にかかわることだから……の意味も含まれている。看護婦という職業が、名実ともに「すてき」な職業になるのはいつのことか。

ナースウエーブの運動は、人間にふさわしい職業としての看護婦をめざしてはじまった。「看護婦確保法」(一九九二年六月成立)はその成果であるが、何しろこのクニでは、法律はタテマエであつて、現実の変革にはなかなか機能しない。ホトケつくつて魂入れずがこのクニの習慣らしく、確保法のもとで看護婦の人員整理(クビ)が平然と進められている有様だ(北海道の国立病院で賃金職員の処遇で働いていた看護婦が、処遇切り下げにあい退職に追いこまれている。対象人員は五百三十一人)。

看護婦不足はクニも認めている事実で、確保法は、ただちに看護婦の増員に向かつて機能すべきなのに、事態はまるで逆行している。

これが日本というクニの現実なのである。

トライアスロンの選手のような川嶋さんでも、かわいい娘を看護婦にしたくない思いにかられるというものである。

高齢社会は目の前に来ている。高齢社会とは要するに病むひとが多くなり、病むひとを人間らしく看護介護できる高度な福祉社会の実現が焦眉の急になる。わかっているのかいないのか、こと看護婦に限っていえ

ば、光は見えない。もつと光を、早く光をと、求めたい。

川嶋さんが看護婦を目ざした直接のきっかけは、長兄の突然の事故死だったという。川嶋さんは山形県の農家に生まれた。四人きょうだいの末っ子。しかし、農業だけでは生計は立たず、父は冬になると東京の工事現場へ出稼ぎに行つた。長兄は中卒と同時に木工会社で働きはじめ家計を助けた。川嶋さんが小学校三年の夏、同窓会に出た兄は、会が終わると夜勤のため会社へ。いとこの運転するバイクに乗つて行つたのだが、運悪くバスを追いこしざま接触して転倒、即死してしまつた。たつた二十歳だった。中学三年生になつたとき、上の姉が肝がんで死んだ。結婚間もなく還らぬひととなつてしまつた。二十四歳だったという。

四人いたきょうだいは、半分に減つてしまつた。ひとのいのちつて、何てはかないのだらう。川嶋さんはこのショックを少しづつ、自分の進路に結びつけていつたらしい。きょうだいを失つたこの悲しみ、たくさんひとと同じ悲しみに出あう、その悲しみを軽減するために、私は看護婦さんになろうかしら。いのちを救う側にまわりたい……そんなふうに思いはじめた。

「看護婦の仕事は大変だよ。姉にも友人にもいわれましたけど、親友が看護婦になろうと誘うので、決心しました。」

高校を出ると看護学校に進んだ。

きょうだいの死について語るとき、川嶋さんはまっけを濡らした。「こどもをたくさん欲しいと思つたのも、きょうだいに死なれたからなんです」といつて、少し泣き笑ひした。

看護学校は埼玉県越谷市立の看護専門学校を選んだ。山形から埼玉へ……。高校の恩師の兄にあたる人が、この専門学校の副学校長をつとめていた関係で紹介されたのだ。三人で受けたのだが、合格したのは川嶋さんだけ。

コゲ茶の地味なツーピースにローヒールといういでたちで、仲良しグループの寄せ書きだけを大切にカバンに入れて旅立った。一九七七年の春のことであつた。

「あ、そうそう。ナイチンゲール誓詞も大切に持つて行きました」

全寮制。授業料は月千円。食費は月五千円。奨学金は月一万五千円くれた。家からの仕送りは月二万円。両親は農業をやめて、そのころ山形に進出してきたメリヤス会社のサラリーマンに転進、母も縫製の仕事の内職をして、学費をひねり出してくれた。

クラスは二十五人。寮では四人が一と部屋に入つた。タタミ一畳ほどのベッドが四つ。部屋の両サイドにつくりつけになつていて、窓ぎわに机が四つ置いてある。トイレなどは共用。クローラー、暖房はついていた。最上級の三年になると六畳一間の個室がもらえた。

まつしぐらに、脇目もふらず勉強した。松山千春のうたで心をあたためていた。

六か月たつたとき、戴帽式があつた。

三年卒業を目前に、どの病院に就職するかを決めるときがきた。越谷市立の看護学校に学ぶということは暗黙のうちに越谷市の病院に勤務することを意味していた。しかしこの際、他の病院も訪問してみようと何か所かあたつてみた。その中のひとつに、いま勤務中の協同病院があつた。

協同病院には、他の病院と違う点がいくつかあつた。当時、規模はさほど大きくはなかつたが、何か開かれたふんいきがあつた。

大学病院などと違って、地域のひとたちの健康を守るのを第一義とするぬくもりのある病院という印象を持つた。

総婦長が「いっしょにやりましょう」とよびかけてくれたのも、嬉しかった。働きやすそうだ。自分の場所がありそうな気がした。

ところが、学校は難色を示した。

「奨学金をあなたに与えた。その額は何百万円にもなる。他の病院に流出されたのでは困る」

結局、協同病院側が奨学金相当額を支払うことによつて、川嶋さんは晴れて協同病院に勤めることができた。一九八〇年のことである（現在は、協同病院も付属の看護学校を持つようになった）。

振り出しは外科病棟だった。いま十四年目で再び外科に戻ったかたち。その間、内科、整形、小児科、そして循環器内科を経験している。

結婚は一九八二年六月。ジューンブライドだった。夫は同じ病院の事務職員の芳男さん。スポーツ好きで、スポーツを通して健康づくり地域づくりをしたいという意欲にいまも燃えている元氣者。

出あつたのも、スポーツが縁だった。川嶋さんは高校時代テニスの選手で、主将をつとめたこともある。スポーツは人と人を結びつける。

もつとも、川嶋さんにいわせると「結婚は念頭になかった」。なぜなら、看護婦は結婚するのたいてい退職してゆく。結婚生活と看護婦という職業は、およそ相性が悪い。結婚は敵に等しかったからである。

「ところが、さらつと結婚を前提につきあつてくれませんか……といわれてことわれなくなつてしまいました」

川嶋さんはこう考えることにした。「この仕事を続けて行きたいから結婚するのだ。仕事をやめるために結婚するのではない。したがつてひるむことはない」

芳男さんも覚悟を決めた。看護婦であり続けることを条件にした結婚だ。まず、看護婦とはどういう存在なのか。どういう勤務条件を負っているのか勉強した。

また、実際問題として、ふたりで働かなければ住宅も持てないという現実問題があつた。二DK、賃四万

五千円、駐車場料金月額三千円。こどもを育てるのだって、一人力より二人力の方がいい。

いまはこどもが四人にも増えて、買いかえた四LDKのマンションでも手ぜまになつてきた。こどもたちの教育費のこともある。二人力でいつばいいいつばいの暮らし。

申し込みを受けてから一年半後、ふたりは結婚式をあげた。仲良しの友人も薬剤師さんと結ばれることになつて、ふたりいっしょに祝賀パーティを開いた。

「だつてひとりじゃ何だか恥ずかしくつて……。友人といっしょなら結婚式してもパーティしても恥ずかしくないと思つたんです」

この友人とは常にはげましあつて、出産にも育児にも挑み、チエと力を貸しあつてきた。

川嶋さんはその経験から、同じ課題に立ち向かう仲間がいるということが、厚いカベを越えるときの不可欠の要件という。ひとりではとても越えられない女の前に立ちはだかる結婚や出産育児。でも、同じ困難に挑もうとする同志がいたら、ラクだという。女ともだちの連帯が、カギだという。

パーティで、川嶋さんは真紅のウエディングドレスをまとつた。貸衣装はあまりにも高かつたので、ウエディングドレスは手づくりにした。

白衣を着るふだんのくらし、真紅は川嶋さんにとつて、非日常をあらわす色であり、またそれはいのちのシンボルの色。看護婦を生き抜く覚悟をあらわす心意気の色でもあつた。

十四年。覚悟の道は続いている。

(この項つづく)

娘の学校

性差の社会的再生産

マリ・デュリュベラ著

中野知律訳

藤原書店刊

「女性についての本を書くのを私は長いことためらってきた。それは、特に女にとっては苛立たしく、しかもいささか陳腐な主題なのである」……シモーヌ・ド・ボーヴォワールが「第二の性」の序文でうちあけているこの感情をどうして分かち合わずにいられようか。

「はじめに」の冒頭で言う著者のこの言葉に、複雑な思いはこめられている。女子教育の分析に研究的をしばらくすることで、正統の社会学（たいていは

男性の）つけたしの「ご婦人の書」の扱いを受けそうな不愉快を述べ、性に関する不平等に関心をもちことで女権擁護派（フェミニスト）の書のように思われる抵抗を語る。

が同時に「日本語版への序文」では、①生徒が男子であるか女子であるかによつて、就学経歴の各段階でどのようにな多様な差異が現れてくるか、その現状明細書を作成する ②そうした差異が、異なる「本性」の表れなどではなく、いかに社会的な現象の産物にほかならないかを明らかにする ③そうした状況の根底にあるのは、生徒たちがやがて組み込まれていく成人社会の男女の社会的ステータス（職業生活においても家庭生活においても）であることを報告する。以上三点が本書の

目的だと明言する。

「一種の被害者の立場を想定し、悲惨な面を際立たせたり、現実にある女性の劣勢を認めることになりかねない」危惧を語る著者だけに、第一部今どんな状況にあるか 第二部 就学の過程で性差はいかに「つくりだされている」か 第三部 これから何をめざすか？ いずれも読みこたえがある。

一見、学術書のように難解に思える人も、見出しの中の関心の深い所からアト・ランダムにページを開くというような無責任な読み方をしているうちに、次々と興味が広がり、因果関係を追っているうちに読了する。訳者による上段の小見出しも出色。

（奥川 睦）

（三五七ページ、A4変形版）

## お産と出会ふ

吉村典子著  
勁草書房刊

文化人類学とは、何と素晴らしい学問だろうと思います。

吉村先生は、この視点からお産という医学の一分野に向かわれたので、ただ一直線に医学のみを学んだ学者には見えなかったものまで見えて来たのだと思います。

「お産と出会う」同様、同じ吉村先生の「子どもを産む」（岩波書店）は、単に、医学の世界だけでなく、教育、フェミニズムの世界までが明らかにされて行き、胸のすくような面白さでした。そして、その難しいと思われる学問への解明の鍵は、文明の届かない離島であり、山村にあつたという点です。昔のままを引き継いでそこに住んでい

る無学で貧しい素朴な人々こそ、大地に根を張った生きる知恵の宝庫かもしれないことも、当然すぎるほど当然のことかもしれません、少し視点をずらすと、非常にシヨッキンな事でもあります。

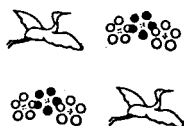
「どうやら、女性の不淨視や劣等視によるいわれのない男女の性差別観が庶民の間に根をおろし、拡大されたのは、私たちの手の届きそうな近世であり、しかも為政者の意図的なものである可能性が高いと思われる」とおっしゃる吉村先生は、「目をみはるような進歩」ととげた近代医学がポロポロこぼしていった「心の病い」「体質の問題」「慢性病」「出産や加齢になやむ人々」の事などから、さらに深く感覚の世界へ、或いは民族学の世界へと分け入って問題を解明して行かれます。とても幅の広い、深い内容は、こと医

学に限らず人間全般の事に及んで感動を呼びます。

そして、世の中の不正に対して、常にラディカルな見方をしがちである私に教訓として残ったのは、吉村先生の書が医療に対しての不満から出発したにもかかわらず、決して「告発の書」や「医者に対立する立場」としてのものにならずに、静かに、穏やかに、見事に、「産む人」に救済の道を開かれたことです。

（窪田泰子）

（四六判 二七六ページ 二四七二円）







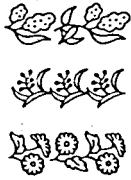
エミニストらしくて気持ちがいい」という人、「ほんとうのフェミニストは、こんなに突つ張らないのでは」という人、さまざまな意見が出て盛り上がりました。女性問題を考えるきっかけとして役に立つ号でした。

(群馬 安田みずえ)

◆197号、たいへんお安くしていただいてありがとうございます。売行きは好調で、二十冊も引き受けてくれた男の友人もいます。

最近「思想の科学」九月号にも書きました。いろいろとおもしろい企画も広がりそうです。

(守口市 藤谷二三枝)



### 「おたより」

◆194号に私の通信が載っていたので大変驚き、また嬉しく思いました。

目まぐるしく過ぎる中国での毎日、何から書いていいのかわからないほど充実した生活です。今は、ここでできる限りのことをしたい。自分のやりたかったことをやつと見つけたような気がします。

日本の政治は、本当にどうなつてしまったのでしょうか。ここ中国も政治的にはたいへん不自由な国ですが、中国の学生に「日本には自由があります」と言われると、「そうではありません。日本は民主国家ではありません」と言つてしまいます。

夏休みに日本に帰りましたら、ぜひ事務局に寄せてください。

日本に真の自由と平和を！

(中華人民共和国・四川省 芦澤礼子)

### 「お知らせ」

◆五月二二日に「子どもの権利条約」が発効されましたのを機に、九月十日に、子どもたちと弁護士とでつくる二本のお芝居で構成した「もがれた翼」を上演します。この条約の内容と、深刻な人権侵害の事態にある日本の子どもの人権状況を訴え、皆様とともに子どもの人権保障の実現に取り組みたいと思います。

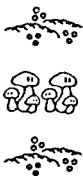
とき 九月十日(土) 午後二時開演  
ところ 銀座ガスホール(地下鉄・J

R新橋駅下車三分)

前売券五百円、当日券七百元、お申し込みは東京弁護士会人権課 陽山へ。

TEL 03-3581-2207

FAX 03-3581-0865





# 〔編集後記〕

◆一大決心をして司会を引き受け、その間は無我夢中。ただ「講師の方にはこちよく語っていただき、学習者の皆さんには、学べる雰囲気作りを」と私なりに心がけたつもりだ。この文章教室をきつかけにして、私は、「書かない自分」から少し脱皮できたように思う。「書くことから逃げまい」「下手から出発していいのだ」と自分流に居直ると、書くことも苦痛ではなくなつた。文章教室では、年配の方々が、予想外といつてよいほど、たくさん参加された。あの時の、活気、熱気。意欲のある人々の場面を共有できた体験が、少し前向きに机に向かえるようになった私を支えている。

（東山久子）

◆自分たちの勉強会を少し広げて一般化し、一人でも二人でも希望する人がいれば、共に学ぶ場を提供させてもらおう。そんな軽いノリで……のつもりが問い合わせ電話がジャンジャン！いくら多くても二十名は越えないとふんでいた我々の予想を裏切つて（？）四十名を越えてしまったのだから……。

「こういうイキイキとした息づかいの感じられる良い講座が終わつてしまうのは惜しい。また次の企画を！」という、うれしい激励も沢山いただいた。一同、苦勞の報われる思いがした。

チラシを作り、司会をひき受け、問い合わせ窓口で応対におおわらわだつた東山さんはもとより、当日の会場受付すべてに目を届かせてくださった三浦さん、窪田さん、芥川さん。良いチームワークでした。育ててもらつたのは我々だったかもしれない。

（奥川 睦）

（写真は、フィリピン従軍慰安婦 ロラ・ロシータさん（右）と、マニラ世界女性会議議長 ネリア・サンチョさん（左） 写真提供 毎日新聞記者 亀田さん）

女性と税制

・高齢社会と女性の選択 全国婦人税理士連盟 ￥1545

“政治改革”の危険性

政治を考える人びと ￥1133

どうなってるの？永田町

政治を考える女たち ￥948

従軍“慰安婦”問題が突きつけるもの

あこら新宿 ￥980

買春王国「性を売る女たち」

あこら九州 ￥886

家族ってなあに？

あこら東海 ￥948

「住職」を追われた女住職

あこら大阪 ￥948

サイレント マイノリティの BOC 出版

素人の素人による素人のための文章講座 ●発行 1994年9月10日

●編集 あこら松山

●発行所 BOC出版部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4-303 中公ビル

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替00100-0-5264

●発行人 あこら企画会議 ●定価 1081円(1050円+税31円)

この ひろい宇宙に  
たった一つの地球

その 大きな地球に  
たった一人のわたし  
そして あなた

かけがえのない地球  
かけがえのないわたし

かけがえのないあなただから  
たいせつに たいせつに しよう

あなたも

わたしも

地球も

たった一度きりの人生だから

思いきり

のびやかに生きよう

だれもが だれをも

ふみしだくことなく

胸の底まで深く息をし

ああ 生きててよかったねと

ほほえみあえる地球にしよう

へあごら

人と人の出会うひろば

へあごら

人と人の共に生きるひろば

定価1081円 (1050円+税31円)

女による女の BOC 出版部

ISBN4-89306-027-9 C0036 P1081E